倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告　第５集

茂浦古墳群

1996年3月

倉敷埋蔵文化財センター

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告　第５集

茂浦古墳群

1996年3月

倉敷埋蔵文化財センター

茂浦古墳群　正誤表

頁	行	誤	正
36	20	規則制	規則性
39	16	厚さ0.7cm、幅0.2cm	幅0.7cm、厚さ0.2cm
45	註(13)	総社市教育委会	総社市教育委員会

序

現在市内に広がっている肥沃な水田地帯は、近年急速な勢いで住宅地あるいは商工業用地にと変貌してきつつありますが、さかのぼれば中近世以前は、現在の平野部のほとんどは遠浅の海であったことはよく知られているところです。今回調査された茂浦古墳群のある連島の地も、かつてはその名が示すように高梁川河口に位置する島のひとつであり、周辺には旧石器時代から中近世にいたるまで人々が生活していたことを示す数多くの遺跡が残されています。

今回の茂浦古墳群の調査は、民間企業による宅地造成工事に伴い実施されたもので、３基の古墳が調査の対象となりました。調査の結果、いずれも盗掘を受けていたものの、まだまだ不明な点の多い連島の古代を研究する上で貴重な資料を得ることができました。また、幸いにも関係各位のご指導ご協力のもとに、最高所に位置する１号墳を調査後整備し、現地保存することができましたことは、遺跡の保護活用の面におきましても、誠に有意義なことであると存じます。

この報告書は、こうした古墳の発掘調査の成果をまとめたものです。本書が今後の文化財保護，保存に活用されますとともに、学術研究のための資料として、また郷土の歴史の研究の資料として、いささかなりとも役立てば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査をはじめ、古墳の保存整備、資料の整理にいたりますまで、ご指導ご協力を賜りました関係各位に対しまして衷心より厚くお礼申し上げます。

平成８年３月３１日

倉敷市教育委員会
教育長　山田錦造

例　言

1．本書は、住宅団地造成工事に伴い発掘調査を実施した、倉敷市連島町連島字小迫外に所在する茂浦１・２・３号墳の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、倉敷市教育委員会文化課学芸員　福本明・鍵谷守秀・小野雅明・藤原好二が担当し、1991年12月2日から1992年4月7日にかけて実施した。

3．出土遺物の整理は倉敷埋蔵文化財センターで行い、整理にあたっては、内田智美・木曽敏江・藤田朱美・宮地かをりの協力を得た。

4．本書の執筆は、第１章　中野倫太郎、第４章　藤原、第５章　片岡弘至、その他を鍵谷が担当し、編集は鍵谷が行った。

5．発掘調査における遺構写真及び遺物の写真撮影は鍵谷が行った。

6．挿図中に使用した高度値は海抜高であり、方位はすべて磁北である。

7．本遺跡は、すでに『倉敷市埋蔵文化財調査年報２－1992年度－』において概要が公表されているが、本報告書をもって正報告とする。

8．発掘調査で出土した遺物および実測図・写真等は、すべて倉敷埋蔵文化財センターに保管している。

目　　次

序

第１章　遺跡の位置と環境…… 1

第２章　調査の経緯

１．確認調査に至る経緯…… 4
２．確認調査の方法と経過…… 4
３．発掘調査に至る経緯と経過…… 5

第３章　茂浦１号墳

１．墳丘と周溝…… 8
２．横穴式石室…… 10
３．遺物の出土状況…… 12
４．出土遺物…… 13

第４章　茂浦２号墳

１．墳丘と周溝…… 15
２．横穴式石室…… 16
３．遺物の出土状況…… 16
４．出土遺物…… 21

第５章　茂浦３号墳

１．墳丘と周溝…… 30
２．横穴式石室…… 35
３．遺物の出土状況…… 36
４．出土遺物…… 37

第６章　まとめと考察…… 42

付　章　茂浦１号墳の復元整備…… 46

挿図目次

第１図　周辺の遺跡（Ｓ＝1/25,000）…… 2
第２図　工事区域内の遺跡…… 5
第３図　１号墳墳丘測量図（Ｓ＝1/100）…… 8
第４図　１号墳墳丘・石室断面図
（Ｓ＝1/40）…… 9
第５図　１号墳石室平面図（Ｓ＝1/40）…… 10
第６図　１号墳横穴式石室実測図
（Ｓ＝1/40）…… 11
第７図　１号墳遺物出土状況（Ｓ＝1/20）…… 12
第８図　須恵器実測図（Ｓ＝1/3）…… 13
第９図　鉄釘実測図（Ｓ＝1/2）…… 13
第10図　装身具実測図（Ｓ＝1/2）…… 14
第11図　２号墳墳丘測量図（Ｓ＝1/150）…… 15
第12図　２号墳墳丘・石室断面図
（Ｓ＝1/50）…… 17・18
第13図　２号墳横穴式石室実測図
（Ｓ＝1/50）…… 19
第14図　２号墳石室平面図（Ｓ＝1/50）…… 20
第15図　２号墳遺物出土状況（Ｓ＝1/40）…… 21
第16図　須恵器実測図（Ｓ＝1/3）…… 23
第17図　土師器実測図（Ｓ＝1/3）…… 24
第18図　鉄鏃実測図（Ｓ＝1/2）…… 25
第19図　馬具実測図（Ｓ＝1/2）…… 25
第20図　刀子・その他の鉄製品
（Ｓ＝1/2）…… 26
第21図　耳環実測図（Ｓ＝1/2）…… 26
第22図　玉類実測図（Ｓ＝1/2）…… 27
第23図　古墳に伴わない遺物…… 29
第24図　３号墳墳丘測量図（Ｓ＝1/150）…… 30
第25図　３号墳墳丘・石室断面図
（Ｓ＝1/50）……31・32
第26図　３号墳横穴式石室実測図
（Ｓ＝1/50）……33・34
第27図　３号墳石室平面図（Ｓ＝1/50）…… 35
第28図　３号墳遺物出土状況
（Ｓ＝1/50）…… 36
第29図　須恵器実測図（Ｓ＝1/3）…… 37
第30図　鉄器実測図（Ｓ＝1/2）…… 38
第31図　ガラス小玉実測図（Ｓ＝1/2）…… 39
第32図　耳環実測図（Ｓ＝1/1）…… 40
第33図　石鏃・貿易銭（Ｓ＝2/3）…… 40
第34図　土鍋実測図（Ｓ＝1/3）…… 41
第35図　古墳公園平面図…… 47

表目次

第１表　鉄釘計測表…… 14
第２表　須恵器観察表…… 22
第３表　耳環計測表…… 26
第４表　土製練玉計測表…… 28
第５表　滑石製臼玉計測表…… 28
第６表　ガラス小玉計測表…… 40
第７表　茂浦古墳群一覧表…… 43

図　版　目　次

図版１　茂浦１号墳
　１．調査前の状況
　２．古墳全景（南から）
　３．古墳全景（東から）
図版２　茂浦１号墳
　１．古墳全景（北から）
　２．古墳全景（西から）
　３．石室入り口
図版３　茂浦１号墳
　１．遺物出土状況
　２．土層断面（東側）
　３．土層断面（西側）
図版４　茂浦１号墳
　１．東側壁付近の築成状況
　２．奥壁付近の築成状況
　３．横穴式石室
図版５　茂浦２号墳
　１．調査前の状況
　２．墳丘検出状況（南から）
　３．墳丘検出状況（東から）
図版６　茂浦２号墳
　１．周溝検出状況（北から）
　２．調査終了後（南から）
　３．調査終了後（東から）
図版７　茂浦２号墳
　１．調査終了後（北から）
　２．調査終了後（西から）
　３．土層断面（西側）
図版８　茂浦２号墳
　１．奥壁付近の築成状況
　２．石室床面の築成状況
　３．遺物出土状況（１）
図版９　茂浦２号墳
　１．遺物出土状況（２）
　２．横穴式石室
　３．調査風景
図版10　茂浦３号墳
　１．調査前の状況
　２．調査終了後（南から）
　３．調査終了後（東から）
図版11　茂浦３号墳
　１．調査終了後（北から）
　２．調査終了後（西から）
　３．土層断面（西側）
図版12　茂浦３号墳
　１．奥壁付近の築成状況
　２．西側壁付近の築成状況
　３．遺物出土状況
図版13　茂浦３号墳
　１．横穴式石室
　２．調査風景
　３．現地説明会
図版14　１号墳出土遺物
　１．須恵器杯身
　２．須恵器杯身
　３．須恵器高杯
　４．鉛ガラス玉
　５．耳　環
　６．鉄　釘
図版15　２号墳出土遺物（１）
　１．須恵器平瓶
　２．須恵器・土師器
　３．鉄　鏃（１）
図版16　２号墳出土遺物（２）
　１．鉄　鏃（２）
　２．刀子
　３．その他の鉄製品
　４．馬　具
　５．古墳に伴わない遺物
図版17　２号墳出土遺物（３）
　１．耳　環
　２．滑石製臼玉・水晶玉・ガラス玉
　３．土製錬玉
図版18　３号墳出土遺物（１）
　１．須恵器杯蓋
　２．須恵器提瓶
　３．鉄　鏃
　４．馬　具
図版19　３号墳出土遺物（２）
　１．鉄　釘
　２．刀子・その他の鉄製品
　３．装身具
　４．古墳に伴わない遺物（１）
　５．古墳に伴わない遺物（２）

第１章　遺跡の位置と環境

茂浦古墳群は倉敷市連島町に存在する。連島町は高梁川現河口近くの東岸に位置する丘陵を中心とする地区である。この丘陵とそれをとりまく微高地は、縄文海進以降、近世の新田開発による干拓がおよぶまでの間、その名のとおり瀬戸内の一孤島であった。

連島の丘陵に属する山はどれも低く、頂部の標高は高いところでも150m前後である。畑作にともなう開墾は高所におよんでおり、頂の多くは台地状の平坦地となっている。古くに記録も留めず失われた遺跡のあったことが推察される。また、山裾の緩傾斜地、平野等の居住適地は、張り出した尾根に区切られて幾つかの小地区に分かれる。これらは現村落とほぼ対応し、自然の規制により形成された地区を単位として村落が発達してきた様子が見てとれる。

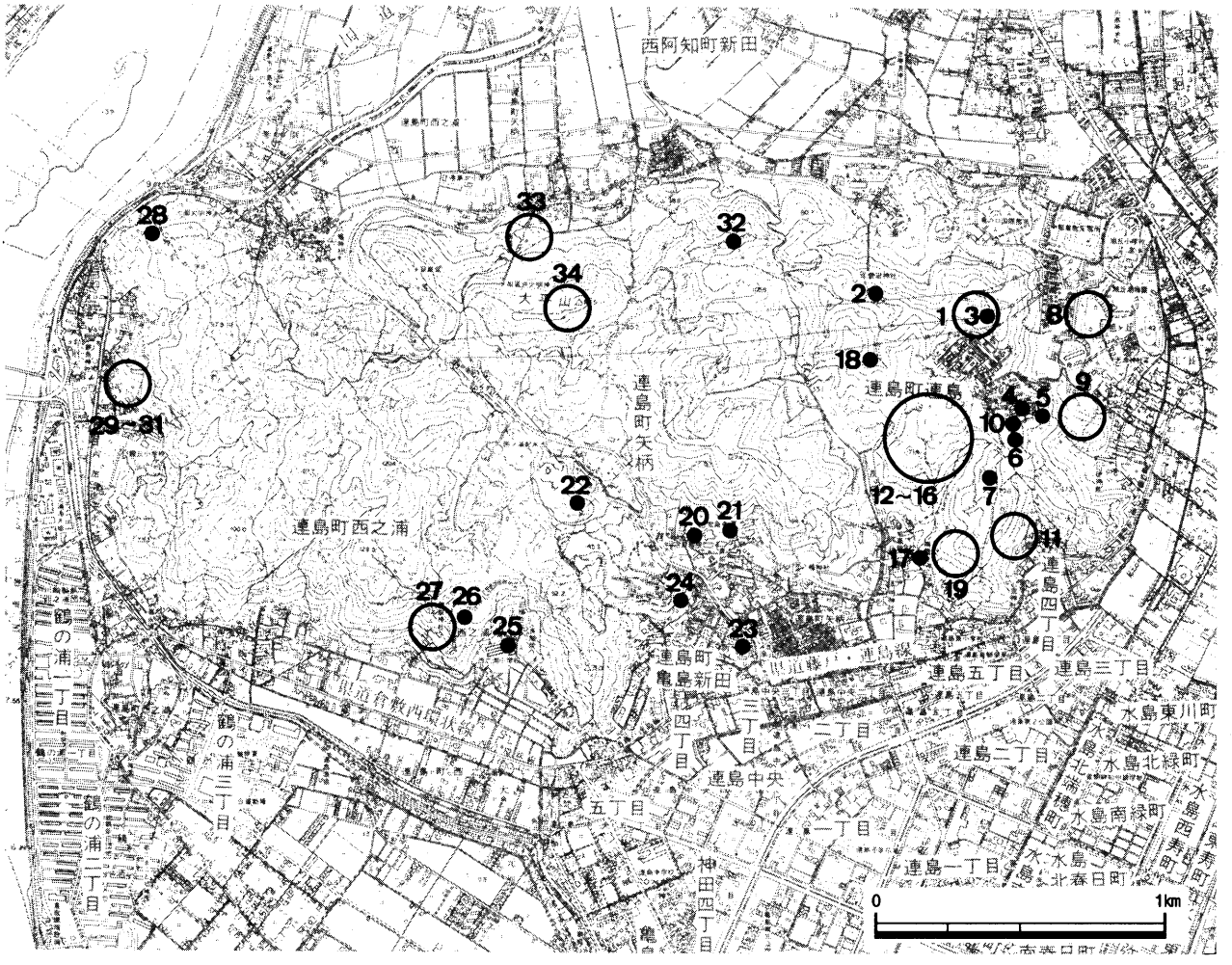
この丘陵における最も古い人間の活動痕跡は、旧石器時代にまでさかのぼる。丘陵東端部に近い尾根上にひろがる辻堂遺跡には、サヌカイトの剥片が広範囲に散布し、ナイフ形石器も数点表採されている(1)。この時代には、瀬戸内は広い平野をなしていたという。瀬戸内の当時の遺跡の多くは、この平野を望む高台に位置している。日々の糧を得る狩猟・採集の場を望む生活の適地を選んだものと考えられる。標高100m前後の高所にあり、開けた眺望を持つ辻堂遺跡の立地もまたこの例にもれない。

縄文海進の後、この地区は島としての歴史を歩むことになる。狩猟・採集に依存する縄文時代の人々は、眼前に広がる海から糧を得ていただろう。その痕跡は、西之浦地区の西之浦貝塚に認めることができる。この遺跡は戦後間もなく小学校建築によって破壊され、その痕跡も確認できない。当時の記録は、出土品として土器と石鏃をあげており、土器は中期の船元式に属するものと伝えている(2)。縄文時代の石鏃は辻堂遺跡でも表採されており、今回の茂浦古墳群調査でもまた数点が採取されている。

弥生時代にも人々の居住は続いただろうが、遺跡が現集落と重なっている等の理由によるのだろう、島内では弥生時代の遺跡は現在までのところ確認されていない(3)。水稲耕作が伝わった後のこの時期も、島の狭小な可耕地では、稲作の支えうる人口には限度があり、漁労、製塩等がその生活基盤の多くの割合を占めていただろう。近接する児島では、種松山真弓池遺跡、種松山山頂遺跡等が知られ、後者からは銅鐸が出土している。このあたりは瀬戸内の海上交通ルートの要衝である。海上交通権の掌握が、銅鐸を埋納した集団にその保有を可能としたものと思われる。児島に近接する連島の住人達も、こうした地理的条件を生かして生活していただろう。

弥生時代の遺跡が確認されないのと同様の理由によるのだろう、古墳時代の集落遺跡もまた全く知られていない。若干数の後期古墳が知られているが、破壊され、記録しか残っていないものが多い(4)。これらの古墳は前述の小地区の縁辺に設けられており、造営にあたった地区との対応関係を推測することができる。

大江地区は現在の大江から江長にかけて、児島との間の海峡に面する地域である。背後の尾根



番号	遺跡名	時代	備考
1	辻堂遺跡	旧石器～中世	
2	大空古墳	古墳	
3	辻堂古墳	〃	
4	狸塚古墳	〃	破壊消滅
5	狐塚古墳	〃	破壊消滅
6	平辻古墳	〃	
7	大江古墳	〃	破壊消滅
8	旭ヶ丘貝塚群	中世	
9	江長貝塚群	〃	
10	平辻貝塚	〃	
11	大江貝塚群	〃	
12	茂浦１号墳	古墳	今回調査
13	茂浦２号墳	〃	〃
14	茂浦３号墳	〃	〃
15	茂浦５号墳	〃	
16	茂浦６号墳	〃	
17	梅雲寺古墳	〃	市指定史跡

番号	遺跡名	時代	備考
18	才の上古墳	〃	
19	茂浦貝塚群	中世	
20	宝島寺古墳	古墳	
21	宝島寺東古墳	〃	94年度調査
22	宝島寺西古墳	〃	
23	首塚古墳	〃	破壊消滅
24	宝島寺南貝塚	中世	
25	西之浦貝塚	縄文	破壊消滅
26	箆取神社裏山散布地	中世	破壊消滅
27	箆取貝塚群	〃	
28	弁財天古墳	古墳	破壊消滅
29	五郎兵衛塚１号墳	〃	
30	五郎兵衛塚２号墳	〃	破壊消滅
31	五郎兵衛塚３号墳	〃	破壊消滅
32	丸山古墳	〃	
33	北面丸山貝塚群	中世	
34	大平山城跡	〃	

※茂浦４号墳は確認調査で露岩と判明

第１図　周辺の遺跡（Ｓ＝1/25,000）

には、辻堂古墳が破壊を受けながらもその痕跡を残している。また、かつていくつかの古墳が存在したという記録も残っている。海峡を望む立地が古墳を築いた人々の居住を促した要因であろう。茂浦地区は茂浦川沿いの緩傾斜地をその基盤とする。東側の三つの尾根には、尾根ごとに今回調査を行った茂浦古墳群をはじめ、才の上古墳、梅雲寺古墳が残されており、かつては尾根ごとに支群を構成していた可能性が指摘できる。矢柄地区は現在の宝島寺周辺、島で最も広い面積を有する緩傾斜地をその基盤としている。現在も沢沿いにふたつの溜池が見られ、過去にも水利的に恵まれていただろうことが推測される。この地域には破壊された古墳が２基その痕跡をとどめている。また、近世に宝島寺の寺域整理にあたりいくつかの古墳が破壊され、その石材が石垣などに転用されたとの言い伝えが残っている(5)。弁財天地区は玉島の島々との間の海峡に面している。現集落の背後には五郎兵衛谷古墳群がその痕跡をとどめ、山塊の北西端斜面にも弁財天古墳があったという記録が残されている。

以上から、古墳時代の人々が、水の便のよい南向き斜面、海峡に面した平地等を選び居住していたことが理解される。また、今回の調査で採集された製塩土器は当時の生業の一端を伝えるものである。

さて今回は、茂浦の尾根上にある中世貝塚についても確認調査を行っている。残念ながら遺跡は既に失われていたが、参考までに他の中世貝塚の分布をみておこう。後期古墳とよく似た分布状況を示しており、大江、茂浦、矢柄、西之浦等の集落縁辺の尾根上に存在している。ただ、古墳の分布と大きく異なるのは、北面・丸山の集落の背後、北向きの斜面にも多数が残されている点である(6)。この貝塚群のすぐ南の大平山山頂には大平山城跡と呼ばれる中世城郭遺跡が残されている。島の北側の航路を意識した城だと思われる。現状では、城の実態そのものが不明ではあるが、北面・丸山貝塚群と城との間にはなんらかの関係があったであろうことが推測される。

資料も少なく不十分な素描となったが、考古資料をもとに見た茂浦古墳群周辺の歴史的環境の変遷の概略は以上のとおりである。

註（1）　間壁葭子　「高梁川下流域の無土器時代遺跡」『倉敷考古館研究集報　第2号』1966年
（2）　平田英文　「三備地方貝塚集成概説　其四」『吉備考古　第八十七号』1953年
（3）　註（2）文献には「猶西の浦よりは銅鐸も出土している。」とあるが、これは同集落の某家が購入・所蔵していた出土地不明の銅鐸の誤認である。
（4）　『連島町史』連島町史編纂会　1956年
（5）　同上
（6）　小野一臣　「備中連島北面貝塚群調査報告（予報）」『古代吉備　第1集』1958年

第２章　調査の経緯

１．確認調査に至る経緯

倉敷市では、開発面積が1,000㎡を越える場合、開発者側は開発行為事前協議申請書を提出し、関連事項について関係各課と協議を行うことになっている。ただし、開発の面積が極端に大きいなど特別な場合には、事前協議の前段階として関係各課が集まり意見の交換及び調整を行っている。

平成2年6月15日、この意見調整会議において、倉敷市連島町に建設予定の大規模住宅団地（以下、（仮称）連島台団地）の全容が明らかになった。それは、総開発面積198,996㎡、予定分譲住宅地469区画、造成予定期間約２年半という、倉敷市でも近年まれにみる大規模なものであった。会議には、開発者側からは施主である小松建設工業株式会社大阪支店（以下、小松建設）、その現地での窓口である三和住宅株式会社（以下、三和住宅）、許可申請に係る業務を代行する株式会社開発技研コンサルタント（以下、開発技研）の三者が出席し、市側からは教育委員会文化課を含め、関係する18課が集まり意見の交換を行った。その結果、水島コンビナートの近くに多くの住宅地が確保できること、また、地域の住民も開発を望んでいることなどから市側としても大筋でこの開発を了承し、今回の会議で明らかとなった様々な問題点については、今後開発側が関係各課と協議を重ねながらクリアしていくこととなった。

これを受けて、6月28日、開発に係る埋蔵文化財の取扱いについての最初の協議が行われ、以下の点について了承を得た。

１．当該地に係る遺跡については事前に確認調査を行い、その有無、規模等について把握する。なお、この費用については市側の負担とする。
２．確認調査の結果を受けて、改めて遺跡の保存についての協議を行うこととする。
３．工事中新たに遺跡が発見された場合には、別途保存についての協議を行う。
４．設計変更等ができず遺跡の現状保存が不可能な場合は、教育委員会による全面発掘調を行う。なお、この費用については開発側の負担とする。

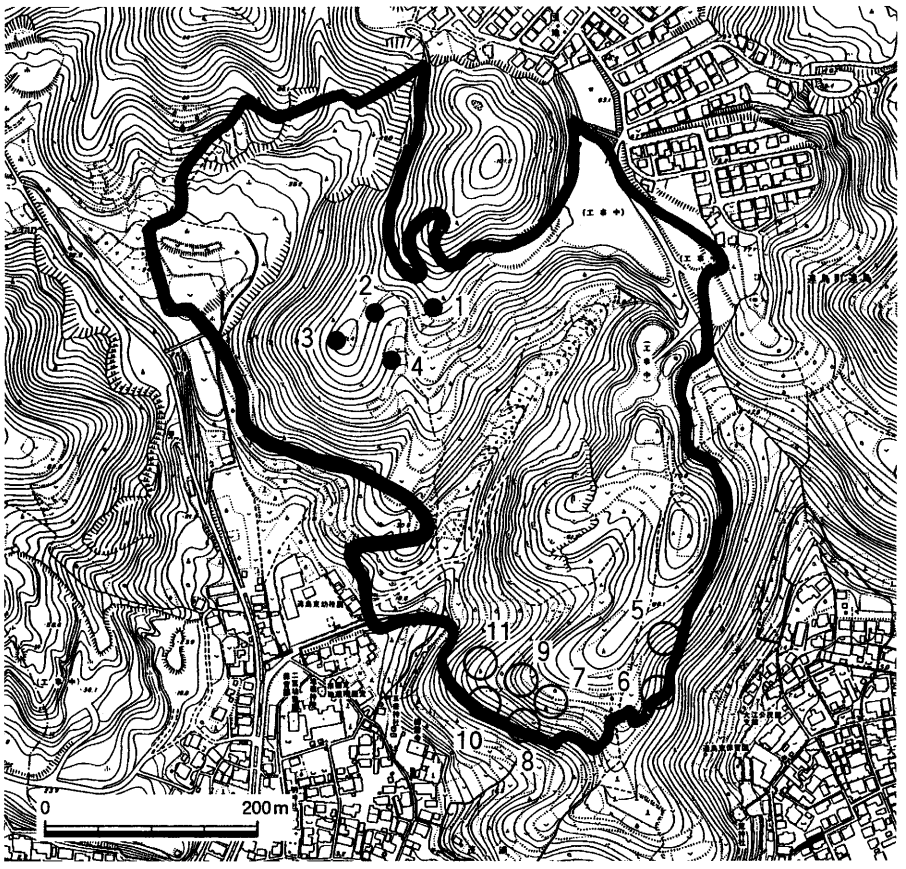
また、調査時期については、工事着工予定が平成４年２月頃とまだ少し余裕があるため、確認調査を平成２年の秋頃、全面発掘調査を平成３年の秋から冬にかけてに行うことで双方の合意が得られた。

２．確認調査の方法と経過

「倉敷市文化財分布図」によれば、（仮称）連島台団地の範囲内には古墳４基（茂浦１～４号墳）と中世貝塚７基（大江貝塚群Ｂ・Ｃ、茂浦貝塚群Ａ～Ｅ）が存在していたが、該当する丘陵地は一部が畑として今も使われているものの、分布図上遺跡が存在しているところの多くが荒地となり、雑草・雑木が繁茂している状況であった。そのため確認調査は、中世貝塚については伐

採後トレンチによる調査を行い、４基の古墳については伐採後その存在が確認できた段階で終了し、小松建設と保存についての協議を行うこととした。

確認調査は、当初の予定より３か月ほどずれ込んだものの、平成3年2月13日から3月15日にかけて行った。調査の手順としては、開発に伴う地形測量のための杭がすでに打っていたため、これを基準に杭を延ばしながら遺跡の位置を確定し、推定部分にトレンチを設定する方法を採った。調査は全て人力により行った。確認調査の結果、大江貝塚群Ｃ・茂浦貝塚群Ａでは純貝層及び中世の遺物包含層が検出され、茂浦貝塚群Ｃでは中世の遺物包含層及びピットを確認した。しかしながら、大江貝塚群Ｃを除いては、貝層や包含層が確認されたトレンチでもすぐとなりのトレンチでは確認できないことから、遺跡の残存する範囲は比較的狭いと推定された。また、茂浦貝塚群Ａ・Ｃでは、造成土中にも比較的多くの中世遺物が含まれており、東側の尾根筋に新たな中世の遺跡が存在する可能性がでてきた。これ以外の貝塚では造成土中に中世の遺物を若干含むものの、貝層や遺物包含層は検出されなかった。これら貝塚群の調査に続き、伐採による古墳の確認作業を行った。その結果、茂浦１～３号墳については確認できたが、４号墳については、自然の露岩は存在するもののその存在を確認することはできなかった。茂浦４号墳については、遺跡台帳においても「封土皆無、石室崩壊」との記載ぐらいしかなく詳しい記述がないことから、こうした露岩を見誤ったものと思われる。



1.茂浦１号墳　2.茂浦２号墳　3.茂浦３号墳　4.茂浦４号墳
5.大江貝塚群Ｂ　6.大江貝塚群Ｃ　7.茂浦貝塚群Ａ　8.茂浦貝塚群Ｂ
9.茂浦貝塚群Ｃ　10.茂浦貝塚群Ｄ　11.茂浦貝塚群Ｅ

第２図　工事区域内の遺跡

３．発掘調査に至る経緯と経過

こうした確認調査の結果を受け、4月19日、遺跡の取扱いについて再度小松建設・三和住宅と協議を行った。まず、中世貝塚のうち純貝層を含め残存状況が良好であった大江貝塚群Ｃについ

ては、開発区域ぎりぎりであったため小松建設が設計変更をすることで現状保存が図られることとなった。また、中世の遺物包含層及び遺構が検出された茂浦貝塚群Ａ・Ｃについては、調査可能な平坦部分の発掘調査を行い、新たな遺跡の存在が想定された東側丘陵上には、調査と平行してトレンチによる確認を行うこととした。古墳群については、いずれも比較的高所に立地しており、現状保存を行えば開発自体が成り立たなくなることから現段階での設計変更は困難と判断され、やむ終えず発掘調査を行うこととなった。ただし、地元にも古墳の保存を望む声もあることから、住宅団地内の公園等に古墳を移築しても良いとの提案が小松建設から出され、その具体的な方法や時期については今後も適宜協議を行っていくことで双方の合意が得られた。こうして、（仮称）連島台団地造成に係る発掘調査は、古墳３基、茂浦貝塚群Ａ・Ｃ及び中世の遺跡が想定される地点１カ所を対象とすることが決定した。この決定を受けて、倉敷市教育委員会文化課内に「連島台団地文化財調査委員会」が組織され、平成3年10月7日、小松建設との間に発掘調査についての委託契約が締結された。

現地での発掘調査は、平成3年11月1日から実施した。まず、中世の遺跡が想定された東側尾根筋のトレンチ調査から行い、引き続き茂浦貝塚群Ａ・Ｃの調査を実施した(1)。トレンチ調査では造成土中以外からは中世の遺物は出土しておらず、この尾根筋は既に段々畑により削平を受けていることが明らかとなった。また、茂浦貝塚群Ａ・Ｃにおいても、中世と思われるピット群が検出されたものの、後世の削平あるいは撹乱により残存状況は非常に悪かった。これら中世貝塚の調査を11月29日に終え、12月からは古墳群の調査に取りかかった。伐採の都合上２号墳→３号墳→１号墳の順で調査を行った。

２号墳の発掘調査は、12月2日から翌年の2月11日にかけて行った。石室はその前端部が崩壊しているものの、他の部分の残存状況は良好で、規模としても市内で最大級であることが確認された。石室内からは、耳環をはじめ滑石製臼玉・土製練玉などの装身具類、鉄鏃・鉄釘等があるが、既に盗掘を受けておりその量は概して少なかった。続いて３号墳の調査を、平成4年1月27日から3月31日にかけて実施した。石室の残存状況は悪かったが、その規模は２号墳のそれとほぼ同程度の大型のものであった。石室内には盗掘の跡がいくつか見られ、遺物としては耳環・ガラス小玉のほか須恵器杯蓋・鉄釘等があるが、その量は少なく全体としては点在という状況であった。最後に１号墳の調査を、2月13日から4月7日にかけて行った。３基の古墳の中では最も小さく、石室の規模も現存長4.7ｍ・幅0.9ｍ・高さ1.4ｍと、他の２基に比べて半分程度の大きさであった。石室奥壁寄りに棺台石が４個置かれており、石室床面からの遺物は全てこの周辺より出土した。なお、この１号墳については、付章に記したとおり発掘調査後古墳公園として復元整備を行った。

１号墳の調査がほぼ終わりに近づいた3月28日、茂浦古墳群の現地説明会を実施した。あいにく当日は朝から雨が降り続いていたが、開始時刻には約80人の市民の方が現地に集まった。周辺に駐車場はなく、現場までの山道を歩けば普通の大人でも15分程かかるという位置的悪条件、加えて朝からの雨である。にもかかわらず地元の人であろうか、お年寄りの姿が目立ったのは印象的

であった。遺跡に対する市民の関心の高さを改めて認識するとともに、発掘調査における現地説明会の重要性を痛感した一日であった。

註（1）　『倉敷市埋蔵文化財調査年報２　－1992年度－』倉敷市教育委員会　1993年

〔調査体制〕

連島台団地文化財調査委員会

委員長	今田昌男	倉敷市教育委員会	教育長
副委員長	杉本保男	〃	教育次長
委　員	三好繁光	〃	社会教育部長
〃	間壁忠彦	倉敷市文化財保護審議会	会　長
〃	山本慶一	〃	副会長
〃	小野一臣	〃	委　員
監　事	三宅正廣	倉敷市教育委員会	社会教育部次長
事務局長	香西文雄	〃	文化課長補佐
書　記	橋本篤男	〃	文化課係長
調査員	福本　明	〃	文化課学芸員
〃	鍵谷守秀	〃	〃
〃	小野雅明	〃	〃
〃	藤原好二	〃	〃
調査補助員	片岡弘至		

（肩書き及び役職名は、いずれも調査当時）

作業員

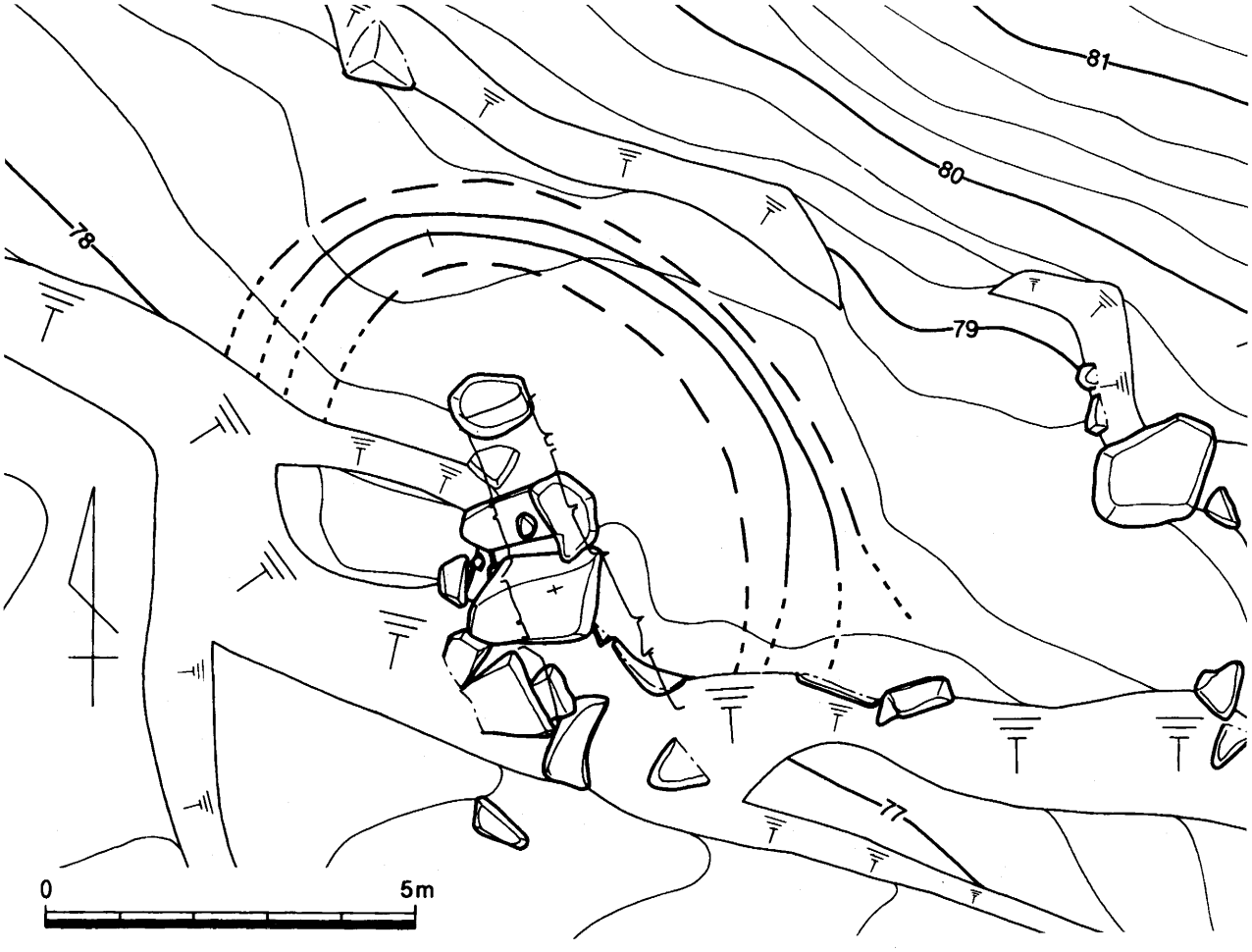
岩田俊明・犬飼睦夫・練尾雅子・内田斐雄・太田信子・坪井昭平
矢吹鈴子・多田　静

第３章　茂浦１号墳

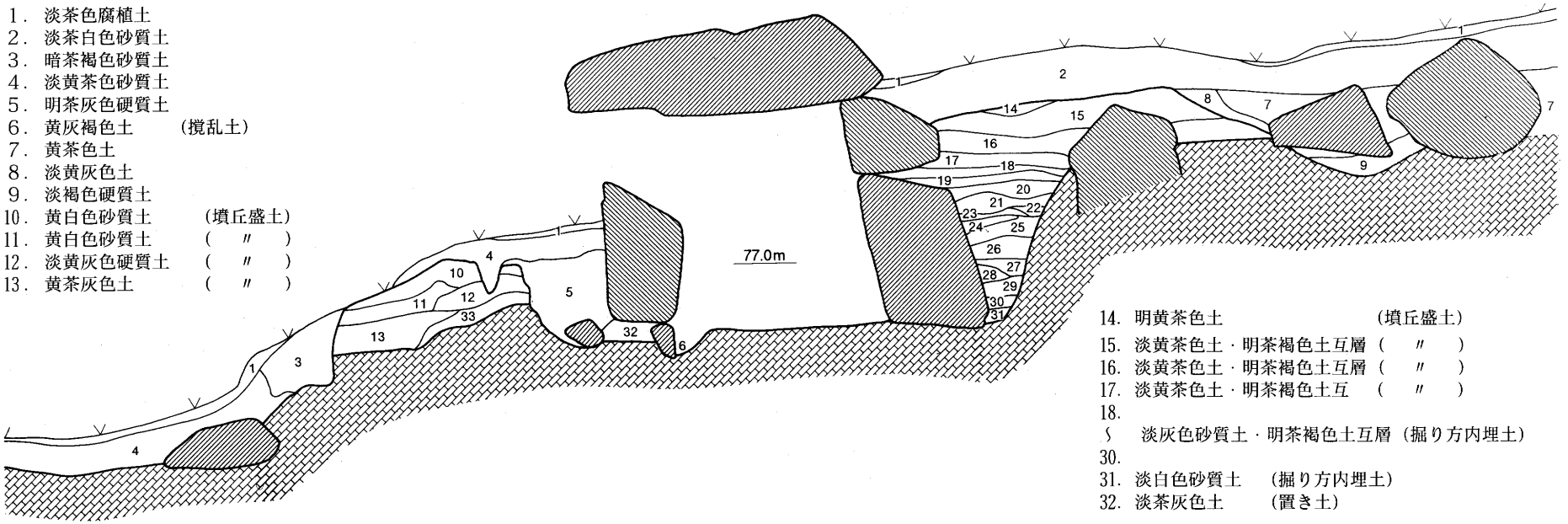
１．墳丘と周溝

古墳は、標高約76.5ｍの小さな谷の付け根部分に位置しているが、周辺にはかつての段々畑の跡と思われる大きな段がいくつも認められるなど、地形はかなり改変された状況を示していた。古墳もこの段々畑の造成により大きく破壊を受けており、調査に入る時点で既に天井石は全て露出し、大きな段の断面に石室の入り口が開口しているという状態であった。墳丘についても、その上半部分と南西部及び石室の前端部分は、削平等により消失していた。したがって、墳丘の調査は石室掘り方内の土層を中心とした墳丘下半部に限られた。

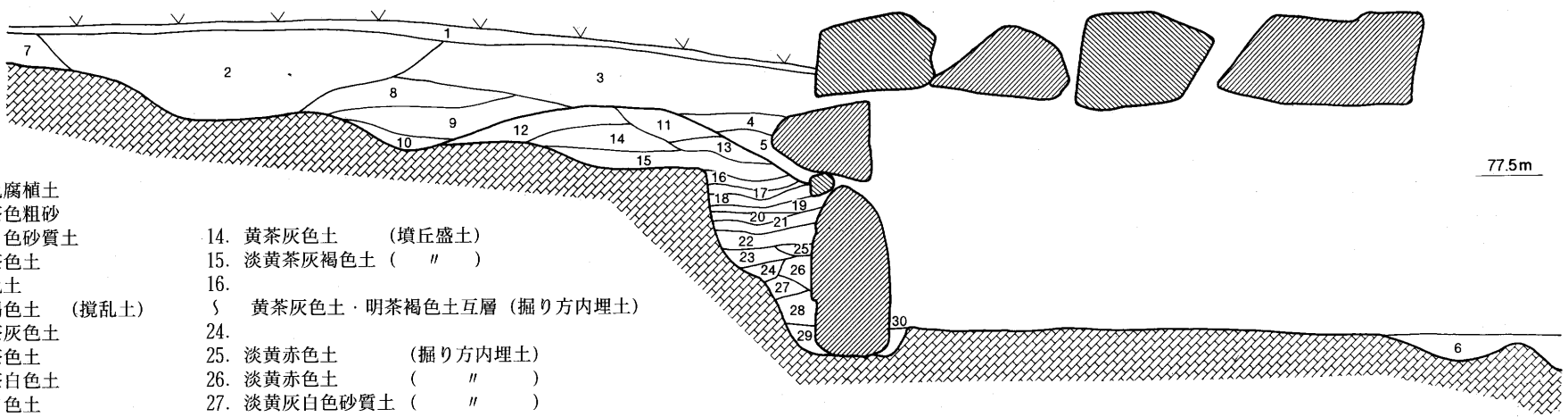
土層の観察は、石室主軸方向及びそれと直交するラインで行った。石室の東側と後ろ側である北側の土層によれば、墳丘盛土部分は20cm程度の厚さをもった層が多いのに対し、石室掘り方内では10cm以下の層を主としていた。また、掘り方内の土は、堅く版築状に叩きしめられているなど、墳丘盛土に比べかなり丁寧なつくりとなっている。一方、石室の西側は段々畑による破壊が大きく、墳丘もわずかの部分が残存していたにすぎなかった。また、石材の裏側が撹乱を受けて



第３図　１号墳墳丘測量図（Ｓ＝1/100）



1．淡茶色腐植土
2．淡茶白色砂質土
3．暗茶褐色砂質土
4．淡黄茶色砂質土
5．明茶灰色硬質土
6．黄灰褐色土　（撹乱土）
7．黄茶色土
8．淡黄灰色土
9．淡褐色硬質土
10．黄白色砂質土　（墳丘盛土）
11．黄白色砂質土　（　〃　）
12．淡黄灰色硬質土　（　〃　）
13．黄茶灰色土　（　〃　）
14．明黄茶色土　（墳丘盛土）
15．淡黄茶色土・明茶褐色土互層（　〃　）
16．淡黄茶色土・明茶褐色土互層（　〃　）
17．淡黄茶色土・明茶褐色土互　（　〃　）
18．
〜　淡灰色砂質土・明茶褐色土互層（掘り方内埋土）
30．
31．淡白色砂質土　（掘り方内埋土）
32．淡茶灰色土　（置き土）



1．淡茶色腐植土
2．暗黄茶色粗砂
3．黄茶白色砂質土
4．明黄茶色土
5．黄茶色土
6．黄灰褐色土　（撹乱土）
7．暗黄茶灰色土
8．暗黄茶色土
9．淡黄茶白色土
10．黄茶白色土
11．黄茶灰色土　（墳丘盛土）
12．淡黄灰色土　（　〃　）
13．淡黄茶灰色土（　〃　）
14．黄茶灰色土　（墳丘盛土）
15．淡黄茶灰褐色土（　〃　）
16．
〜　黄茶灰色土・明茶褐色土互層（掘り方内埋土）
24．
25．淡黄赤色土　（掘り方内埋土）
26．淡黄赤色土　（　〃　）
27．淡黄灰白色砂質土（　〃　）
28．淡灰色砂質土　（　〃　）
29．暗灰色砂質土　（　〃　）
30．暗灰褐色土　（置き土）

0　2m

第４図　１号墳墳丘・石室断面図（1／40）

おり、石室の掘り方も確認することはできなかった。

周溝は、古墳の東側から北側にかけての約半分で認められたが、段々畑による破壊を考えれば、もともとは自然地形が最も低くなる石室先端部とその西側を除く部分に廻っていたと推定できる。その規模は、幅約90cm・深さ約20cmと比較的小さなものであった。この周溝の存在により古墳の約半分で墳裾が確認され、古墳の規模等について復元する事ができた。それによれば、墳形はたまご型に似た楕円形を呈し、規模は長径約8.4m・短径約7.6mを測る。墳丘の高さについては、上半分が全く残存していなかったため明らかではないが、周溝底部から墳丘への傾斜角度が築造当時のものとあまり変わらないとして、あえて図面上で復元すれば、周溝からの高さ約1.4m、石室床面からでは約2.5mという数字を得ることができる。

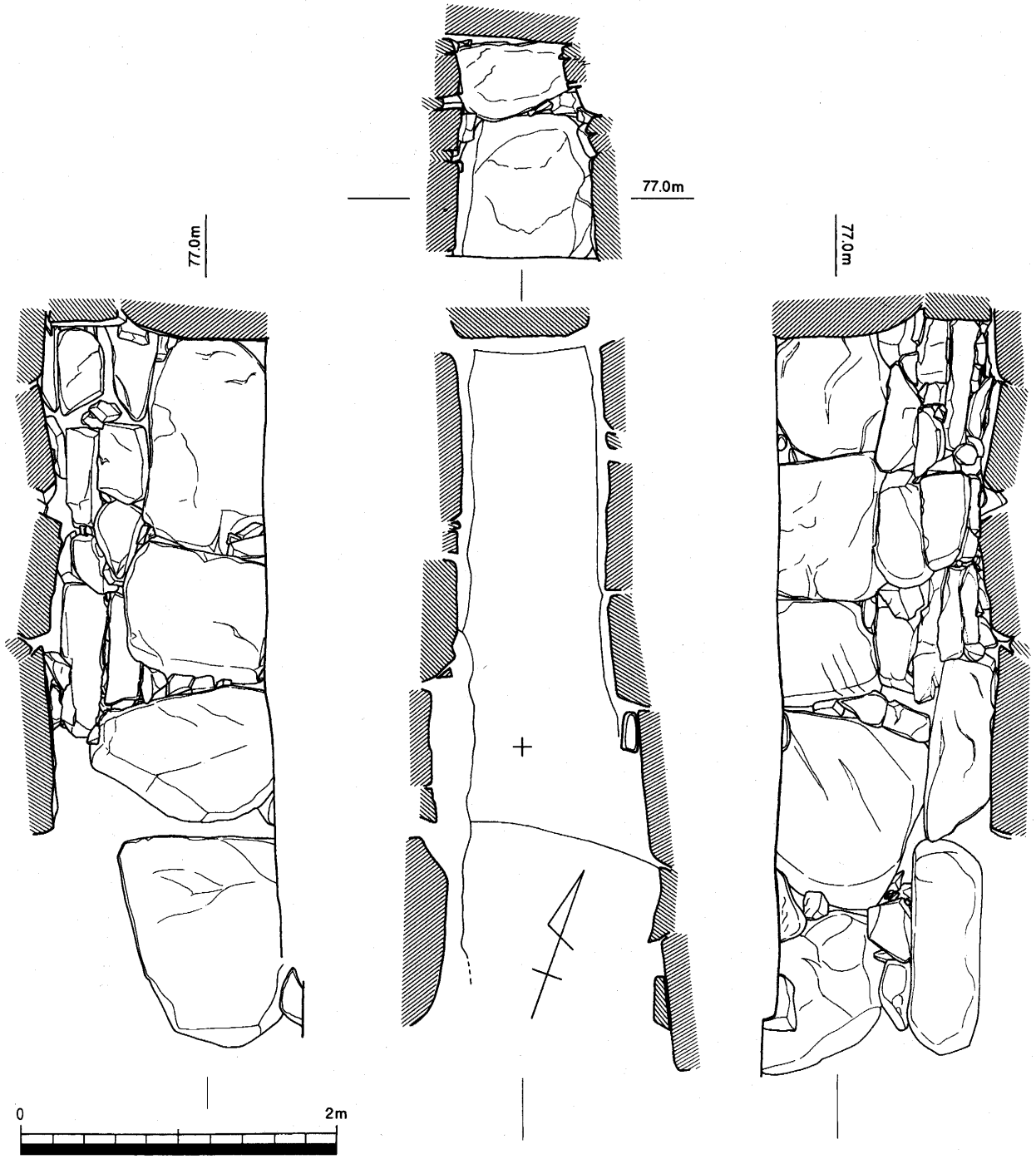
２．横穴式石室

茂浦１号墳の石室は、ほぼ南南東に開口する比較的小さな横穴式石室で、その主軸方向はＮ20°Ｗを示す。石室前端部は既に破壊を受け、東側壁の奥寄り半分は土圧により西側に傾き、かなり不安定な状態であった。

残存する石室の長さは約4.7ｍを測るが、周溝及び墳丘の大きさから築造当時の長さは5.5ｍ程度に復元できる。また、残存する４枚の天井石は全体としてほぼ水平に保たれており、その高さは約1.4ｍを測る。床面における石室の平面形態を見れば、東側壁は奥壁から2.3ｍの地点で、西側壁は2.1ｍの地点で、それぞれ10～15cm程外側へずれており、羨道部の幅が玄室の幅よりも広くなっている。したがって、石室の幅は玄室部分で約0.9ｍ、羨道部分で約1.3ｍを測る。天井石は４枚が残存しているが、羨道部がやや広い石室の構造に合わせたものであろうか、奥壁から入り口部分へ行くにしたがい徐々に大きな石材を用いている。閉塞施設については既に破壊を受けたと思われ、全く検出できなかった。

第５図　１号墳石室平面図（Ｓ＝1/40）

玄室の側壁及び奥壁の構築については、基礎となる１段目に大きな石材を用いている他は、使用する石材の大きさや形状等に特に統一性は認められない。また、石材の積み方については、１段目より上の部分についてはやや扁平な石材の小口を使用して構築しているものの、特に段・列を意識したつくりは認められず、最終的に天井部分の高さを一定にすることに主眼が置かれていたようである。羨道部の側壁については、玄室と接する１段目の石材が玄室のそれと比べて両側壁ともやや高くなっており、羨道部を意識した結果と考えれられる。１段目より上の部分につい



第６図　１号墳横穴式石室実測図（Ｓ＝1/40）

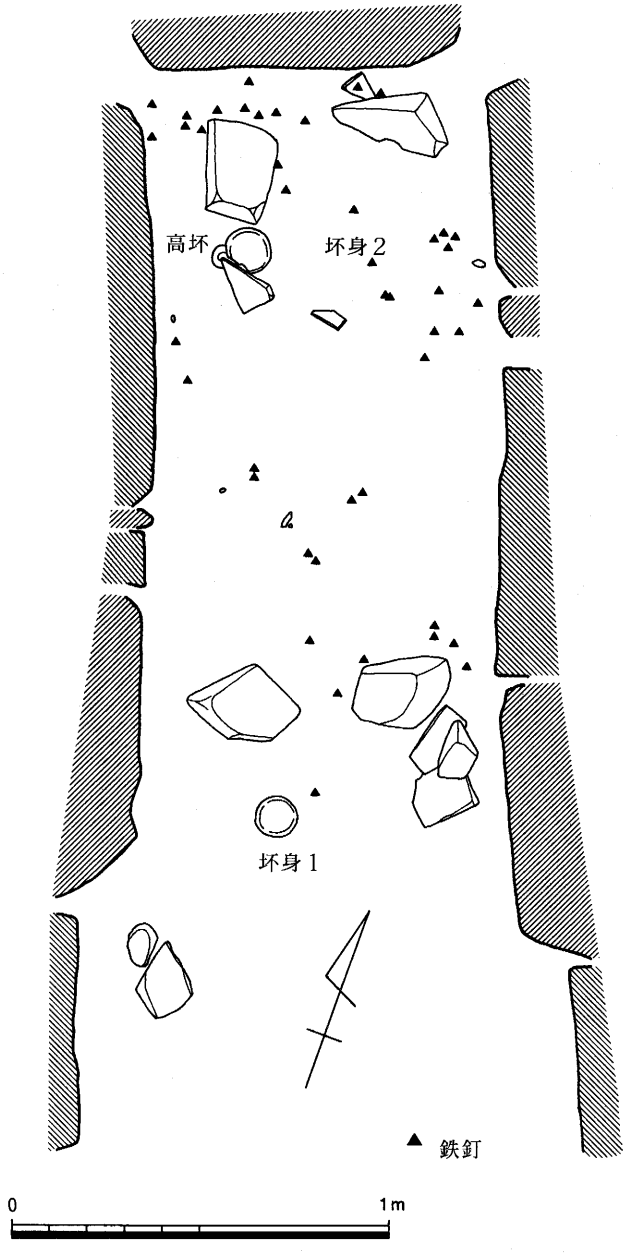
ては、東側壁では玄室より大きな石材を使用しているものの、西側壁では石材が残存していないため、これが羨道部に共通のものであったかどうかは不明である。

石室の掘り方は、石室東側及び奥壁側の断面で確認した限りでは、幅2.8ｍ・長さ4.7ｍ程度の隅丸方形ないしは楕円形を呈していたと思われる。奥壁側では二段掘りとなっており、その深さはどちらの断面でも約1.1ｍを測る。石室の掘り方の底面はそのまま石室床面となるが、玄室部分の床面では１段目の石材を据えるにあたり掘られたと思われる浅いくぼみが確認されている。この石材の掘り方は石室西側断面では確認されていないものの、１段目の石材の下で置き土の存在が確認されており、西側側壁においては少なくとも羨道部の一部までは石材の掘り方が延びていたことがわかる。

３．遺物の出土状況

１号墳から出土した遺物としては、須恵器、鉄釘、ガラス玉、耳環などがある。石室の前端部は破壊され、床面も現存する羨道部の中程まで撹乱を受けていたためか、これら石室内から出土した遺物は全て玄室内に限られた。出土した遺物のうち、玄室内に堆積した土砂の中から出土したガラス玉と耳環を除けば、あとはほとんど石室床面上で検出された。また、玄室の奥壁寄りと羨道部寄りにそれぞれ２個ずつ扁平な自然石が置かれており、棺台石と考えられる。

須恵器は、完形もしくはほぼ完形に復元できた杯身２点・高杯１点以外には、甕と思われる小片が2点出土したにすぎない。また、ほぼ完形に復元できたものも、やや離れた位置の破片と接合するなど、原位置を留めたものではないと判断できる。鉄釘は、４個の棺台石に囲まれる範囲から小片も含めて総数39点が確認されたが、完形品もしくは完形に復元できたものは１本もなく全て破片となって出土している。したがって、鉄釘の多くは２次的に移動したものと思われるが、棺台石の位置から推定さ



第７図　１号墳遺物出土状況（Ｓ＝1/20）

れる木棺の短辺・長辺と重なる位置で確認されたものもあり、これらについてはほぼ原位置を保っていると考えてよさそうである。木棺の痕跡については全く確認できなかったが、棺台石の配置や鉄釘の位置などから0.7×1.7m程度の大きさが考えられる。

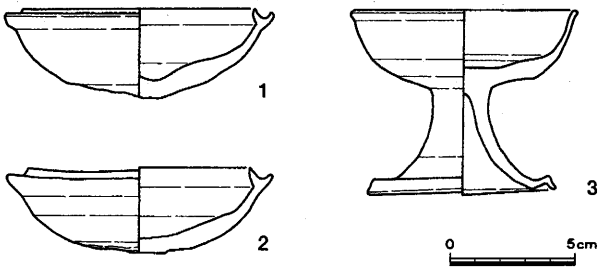
4．出土遺物

1．須恵器（第8図、図版14）

図化できたのは完形の杯身1点（1）と、ほぼ完形に復元できた杯身（2）・高杯（3）それぞれ1点の、計3点である。他には甕の胴部と思われる小片が2点出土した。

杯身（1・2）

いずれも口径9cm前後、高さ3.5cm程度の小型品である。1は、底部はヘラ切り未調整で、その他の内外面はロクロによるヨコナデを行う。ナデは丁寧に行われており、砂粒の動きはほとんど認められない。焼成は良好で、色調は淡灰色を呈する。2も底部はヘラ切り未調整で、そこから外面下半分ぐらいまではヘラケズリを行っている。その他の内外面にはヨコナデを施している。焼成は良好で、色調は淡灰色～黄白灰色を呈する。

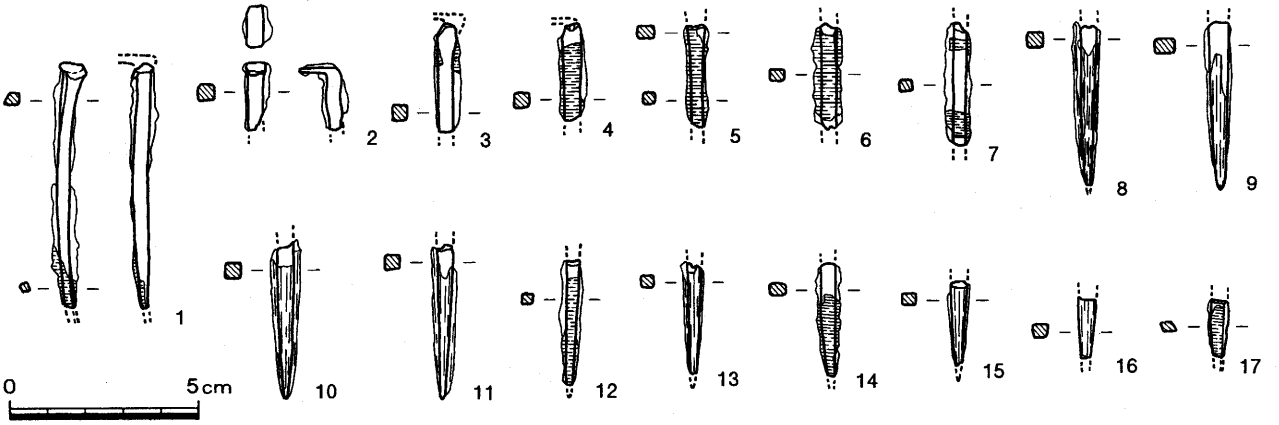


第8図　須恵器実測図（S＝1/3）

高杯（3）

口径9.1cm、器高7.4cmを測る。ゆるやかに外反する脚部は、その裾で斜め上方に少し上反りし、端部は再び斜め下方につまみ出している。杯部と脚部は、別々に成形した後接合しているが、杯の中心からややずれている。内外面ともヨコナデによる調整を行っており、焼成は良好であるが、全体的に器表面に風化が認められる。胎土はやや粗く、1～2mmの白色砂粒を多く含んでおり、色調は淡灰色～黄白灰色を呈する。

2．鉄釘（第9図、図版14）



第9図　鉄釘実測図（S＝1/2）

鉄釘は、玄室床面上及びその埋土から全て出土しているが、ほぼ全形がわかる１点（１）を除けば全て半分以下の小片で、実測可能なものは玄室床面上から出土した17点であった。

頭部の形態がわかるものは１点（２）で、それによれば頭部は、断面がほぼ正方形の鉄棒を薄く打ち延ばしてＬ字形に折り曲げたもので、その頂部は長方形状の平坦面を呈し、寸法は0.5×1.0cmを測る。他に頭部付近の破片としては、Ｌ字形に折り曲げた部分から先を欠損しているものが２点（３・４）ある。断面は正方形や長方形のものが多いが、ややねじれて菱形や不整台形を呈するもの（1・17）もある。

番号	残存長(cm)	断面(cm)	木目ﾀｲﾌﾟ	備　　考
1	6.5	0.4×0.3	A	
2	1.6	0.4×0.4	－	木目痕なし
3	2.9	0.4×0.4	A	頭部付近
4	2.6	0.4×0.4	A	頭部付近
5	2.7	0.5×0.4	A	胴部
6	2.8	0.4×0.3	A	胴部
7	3.2	0.3×0.3	A	胴部
8	4.4	0.4×0.4	B	先端部
9	4.4	0.5×0.4	B	先端部
10	4.2	0.4×0.4	B	先端部
11	4.1	0.4×0.4	B	先端部
12	3.3	0.3×0.3	A	先端部
13	3.0	0.3×0.3	B	先端部
14	3.0	0.4×0.3	A	先端部
15	2.2	0.4×0.3	B	先端部
16	1.6	0.4×0.4	B	先端部付近
17	1.5	0.3×0.3	A	先端部付近

表番号は、第９図の遺物番号に対応

第１表　鉄釘計測表

２の資料を除いて、鉄釘には全て木目痕が認められる。その付着状況には、釘の全長に対して木目が垂直に認められるもの（Ａ）と水平に認められるもの（Ｂ）の２種類がある。Ｂタイプのものは全て先端部の破片に限られ、鉄釘の全面に木目痕が認められるのが特徴である。これに対してＡタイプのものは、頭部、胴部、先端部のいずれの破片にも認められる。また、木目痕の残存状況はＢタイプに比べて悪く、その付着は表裏面に限られ両側面には見られない。

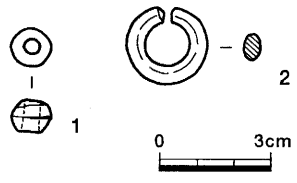
３．装身具（第10図、図版14）

ガラス玉（１）

玄室床面近くの埋土から１点出土した。直径1.1cm・高さ0.9cmで、孔径は上下で違い、４mmと５mmを測る。重量は1.78g、比重は5.24g/cm³の鉛ガラスで(1)、白乳色を呈する。器表面はかなり風化がすすんでおり、剝落による小さな凸凹が多く認められる。表面には浅い段が筋状にめぐっており、巻き技法で製作されたものと考えられる。

耳環（２）

玄室床面近くの埋土から１点出土した。銅芯に金箔を貼ったもので、開口部と芯の稜線部分を除いて金箔が残存している。銅芯の外径は、上下左右とも2.1cmとほぼ正円形であるが、断面径は上下７mm・左右５mmと楕円形を呈す。重さは8.5gを量る。



第10図　装身具実測図
（S＝1/2）

註（1）　奈良国立文化財研究所における研修中に、蛍光Ｘ線による分析を行った。風化面における定性分析ではあるが、Pb・Si・Cu・Feの４元素が検出された。なお、測定にあたっては、同所　埋蔵文化財センター肥塚隆保氏、同所　飛鳥藤原宮跡発掘調査部村上隆氏の指導を得た。記して感謝の意を表したい。

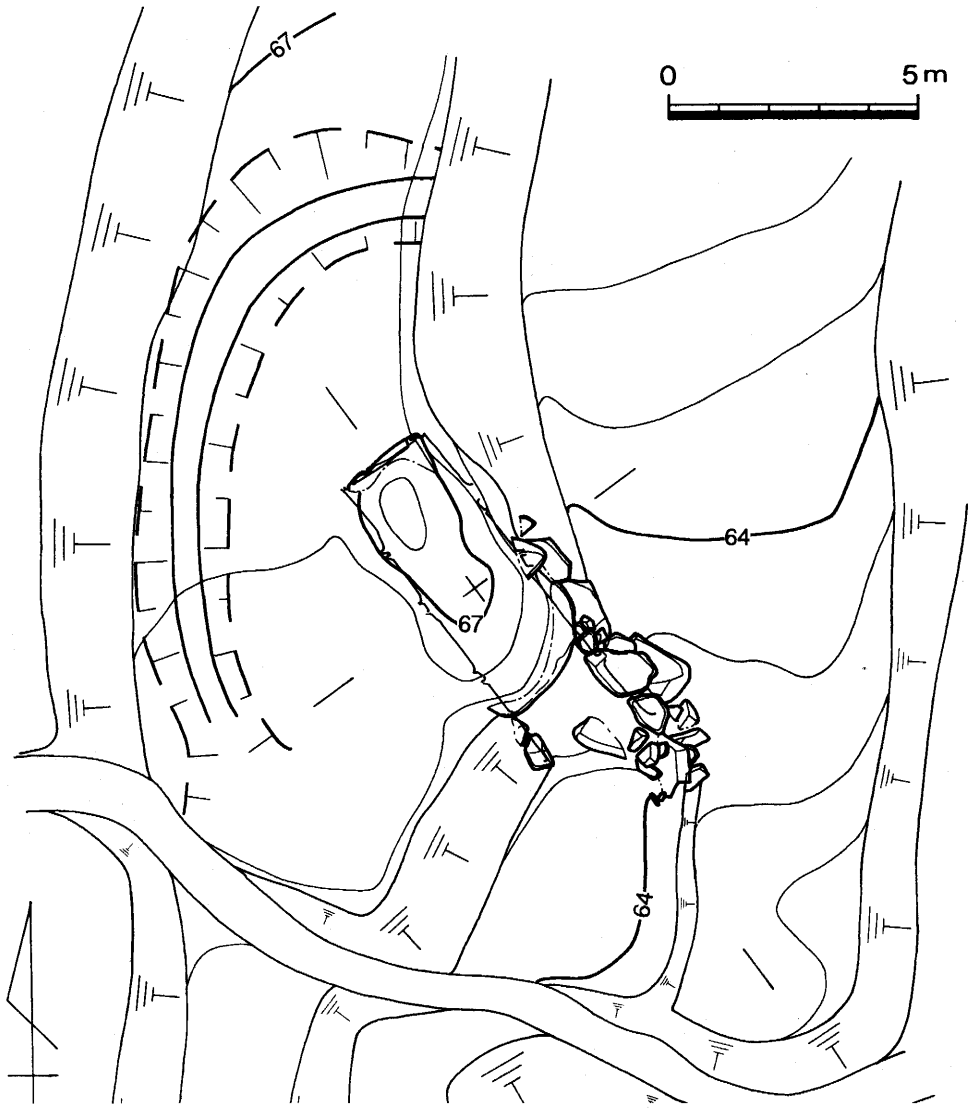
第４章　茂浦２号墳

１．墳丘と周溝

茂浦２号墳は、標高約65ｍ、南北方向に張り出した尾根の稜線部から東へわずかに下って位置する。３号墳の北東約35ｍ、１号墳の南西方向約70ｍである。古墳の墳丘は段々畑の造成でかなり改変されており、石室上部および石室東側の石材が露出している状況であった。

石室掘り方内には黄褐色土・暗褐色土・灰色土の互層が、側壁側で10～20cm、奥壁側で20～30cm厚の単位で版築状に重ねられており、非常に固く叩きしめられていた。

掘り方肩部から上には盛土が40～50cmの厚さで残存していた。土質は地山土にやや灰、炭を含んだもので、掘り方内ほど固く叩きしめられてはいなかった。石室上部にかかる土は大部分が後世の流土及び畑の耕作土であり、石室上部が現状以上に露出していた時期があったようである。



第11図　２号墳墳丘測量図（Ｓ＝1/150）

周溝は石室西側で検出され、最大幅2.5ｍ・深さ約0.45ｍを測る。地山を浅く皿状に掘りくぼめた周溝内には暗褐色ないしは灰褐色の堆積土が認められ、底から約５cm程浮いた状態で須恵器甕の破片が出土した。石室東側の周溝は、畑の段によって切り落とされていた。石室西側から前面につづく周溝は南にいくにしたがってゆるやかに開いていくようである。

古墳の規模・墳形については、西側で確認されている墳裾から推定して東西約12ｍ、主軸方向では石室前端部の石材抜き取り痕から考えて約15ｍの円墳であったと考えられる。高さについては推定の域をでないが、周溝の立ち上がりから考えて約２ｍ、石室床面から3.5ｍ程度であろう。

２．横穴式石室

本古墳の内部構造はほぼ南東方向に開口する横穴式石室で、その主軸方向はＮ36°Ｗを示す。天井石は５枚を確認したが、石室入口付近の１枚は石室前面にずり落ちた状態であった。残る４枚はやや東に傾いてはいるが、原位置をとどめていた。

石室の前端は既に破壊されており、残存する石室の長さは東側壁で7.2ｍ、西側壁で6.7ｍを測るが、東側壁の前端で石材の抜き取り痕が２箇所確認されており、これを含めると9.3ｍに復元できる。石室幅は奥壁付近で1.9ｍ、入口付近で2.2ｍを測り、入口へいくにしたがいやや開くが無袖と考えてよい。石室の高さは奥壁付近で２ｍ、入口付近で1.6ｍを測り、入口付近ほど低くなっている。奥壁には高さ２ｍ・幅1.9ｍ・厚さ0.8ｍ程の扁平な一枚石を用いている。両側壁と天井石との間には、小さな石を埋め込み、その隙間を埋めている。閉塞施設は確認できなかった。

側壁は１段目に1.2～2ｍ大の大きな石を並べ、２段目以後は1×0.3ｍ以下のやや小振りの石を積んでいるようである。全体として４段に積まれた部分が多く、上の段ほど石が小さく扁平なものになるようである。２段目以後はややもち送り気味になっている。

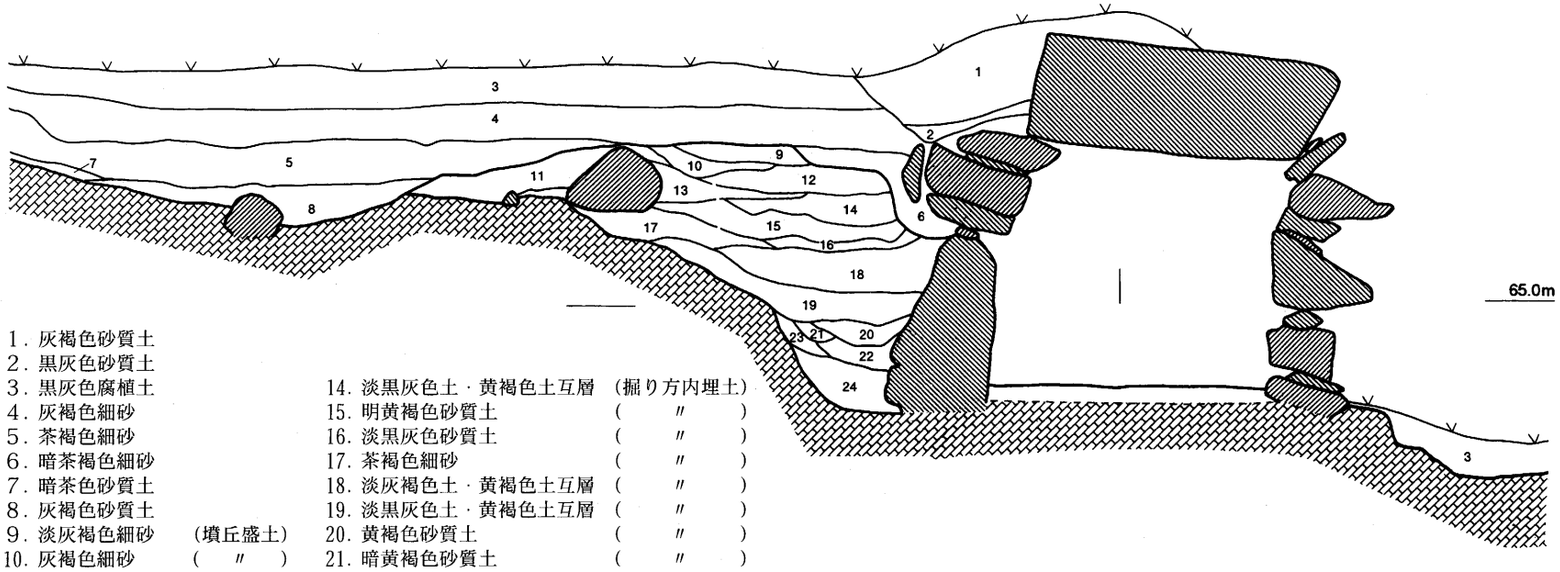
石室は、幅約６ｍ、長さ10ｍを測る長方形の墓壙を掘りくぼめた後、ほぼその中央に構築されていた。古墳築造前の地形は北西に高く南東に低いため、墓壙は北西が深く南西が浅い掘り方となっており、奥壁付近で1.8ｍ、西壁南部で1.6ｍを測る。東側は本来自然の傾斜が低く下がっており、それほど掘削されていないものと考えられる。石室床面は黄灰色の砂質土を敷いて床面としており、入口にむかってゆるやかに傾斜している。排水溝等の施設は認められなかった。

３．遺物の出土状況

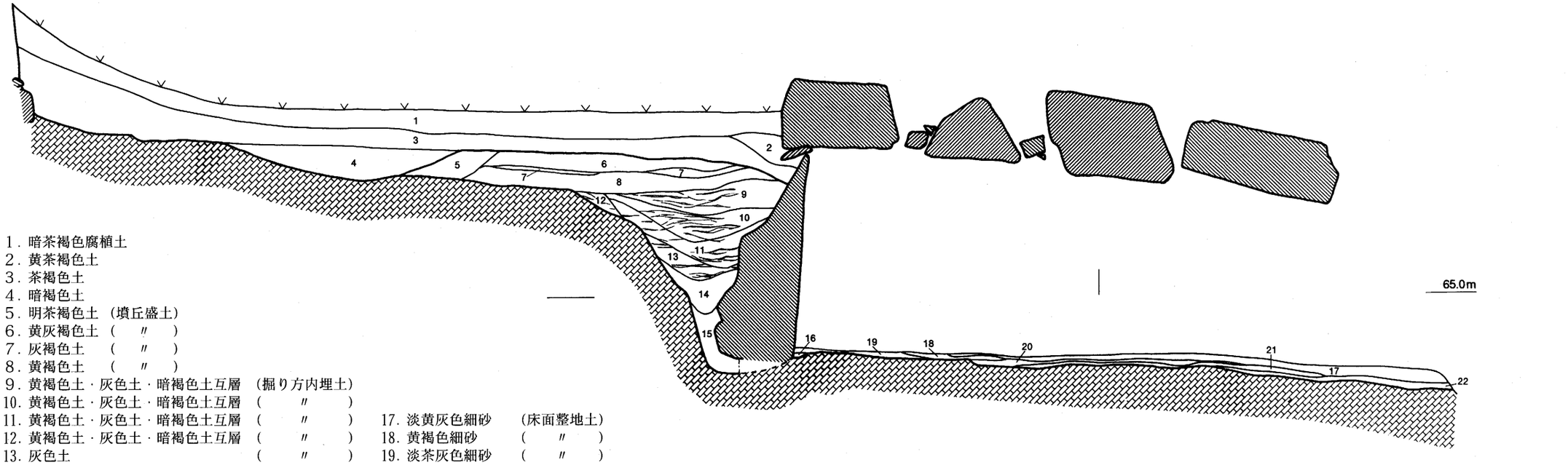
出土遺物としては、須恵器・土師器・鉄器・馬具・耳環・玉類等があり、石室内及び石室前面攪乱土中・周溝中から出土している。また、直接古墳に伴わない遺物としては、石鏃・製塩土器・中世以降の土器等が、石室内流土及び墳丘周辺から出土している。

調査開始時、石室は既に開口しており、石室内流土上にはところどころ攪乱孔が穿たれていた。流入土は約30cmほど堆積しており、流入土及び攪乱土中からは須恵器破片・土師器片・鉄鏃片・その他の鉄製品・馬具等が出土している。

石室床面に伴うと考えられる遺物としては、土師器細片・鉄鏃・刀子・耳環・土製練玉・滑石

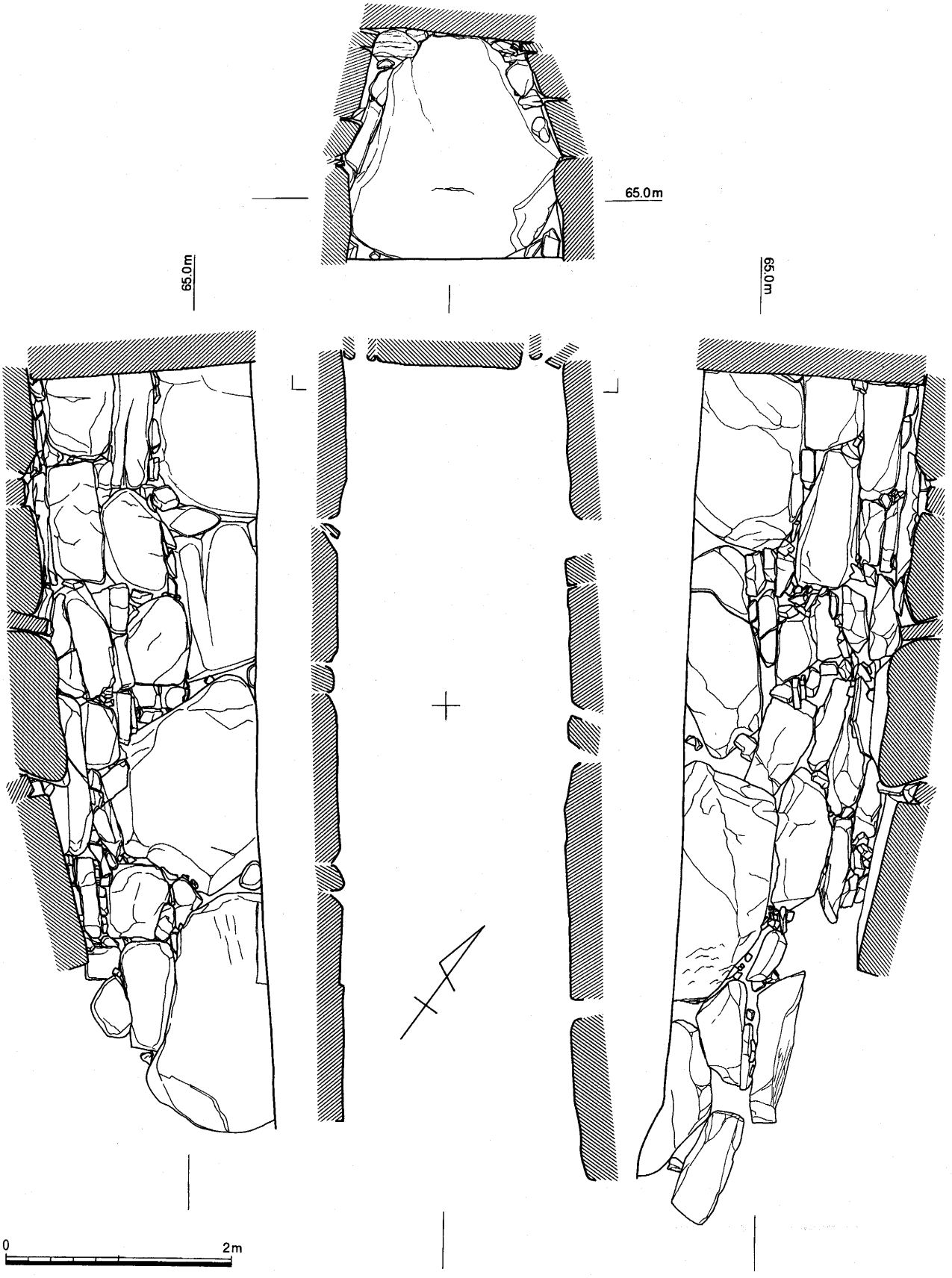


1．灰褐色砂質土
2．黒灰色砂質土
3．黒灰色腐植土
4．灰褐色細砂
5．茶褐色細砂
6．暗茶褐色細砂
7．暗茶色砂質土
8．灰褐色砂質土
9．淡灰褐色細砂　（墳丘盛土）
10．灰褐色細砂　（　〃　）
11．淡褐色砂質土　（　〃　）
12．明黄褐色砂質土　（　〃　）
13．淡黒灰色細砂　（　〃　）
14．淡黒灰色土・黄褐色土互層　（掘り方内埋土）
15．明黄褐色砂質土　（　〃　）
16．淡黒灰色砂質土　（　〃　）
17．茶褐色細砂　（　〃　）
18．淡灰褐色土・黄褐色土互層　（　〃　）
19．淡黒灰色土・黄褐色土互層　（　〃　）
20．黄褐色砂質土　（　〃　）
21．暗黄褐色砂質土　（　〃　）
22．橙灰色砂質土　（　〃　）
23．暗褐色細砂　（　〃　）
24．明橙灰色砂質土　（　〃　）

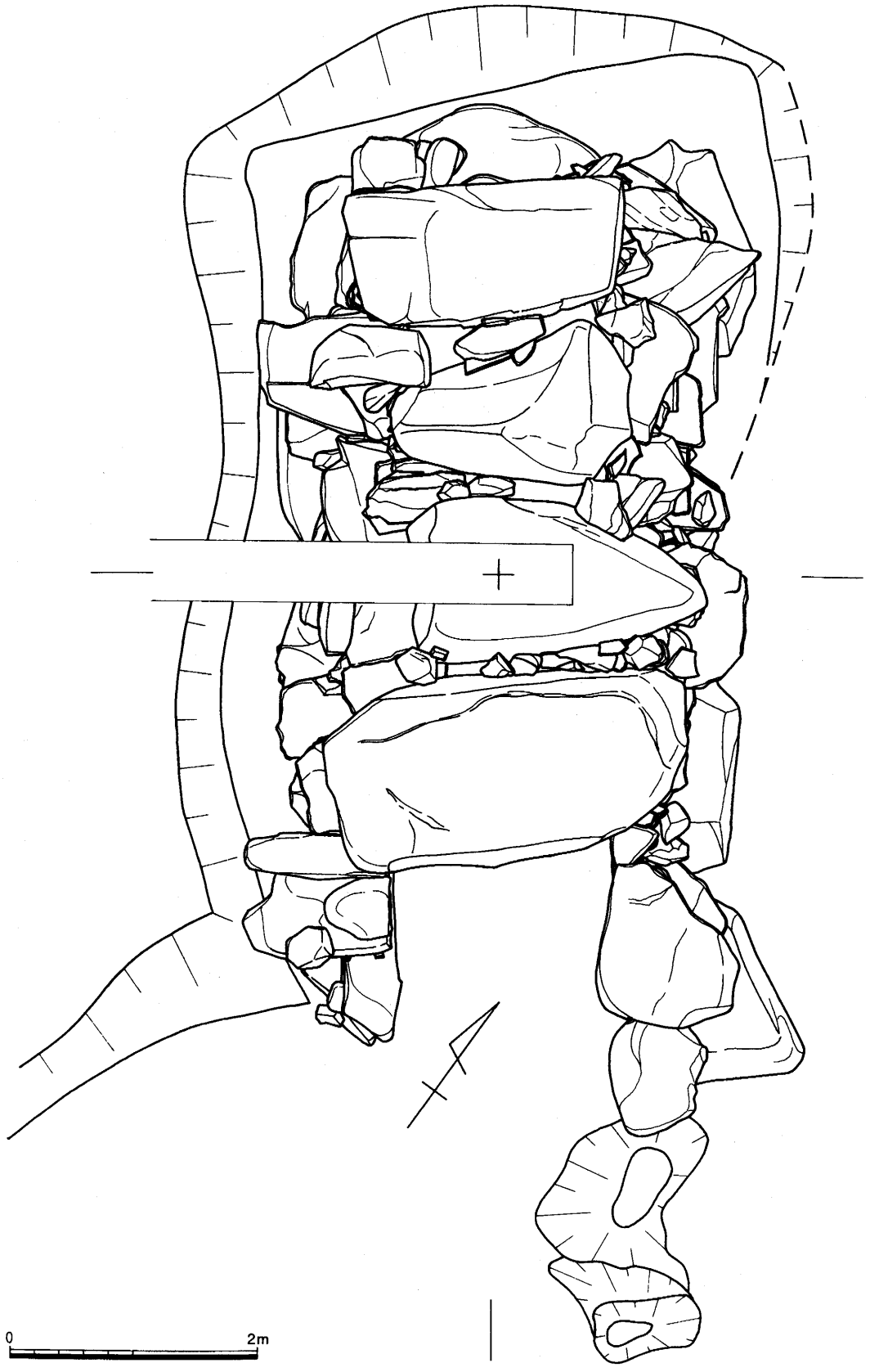


1．暗茶褐色腐植土
2．黄茶褐色土
3．茶褐色土
4．暗褐色土
5．明茶褐色土　（墳丘盛土）
6．黄灰褐色土　（　〃　）
7．灰褐色土　（　〃　）
8．黄褐色土　（　〃　）
9．黄褐色土・灰色土・暗褐色土互層　（掘り方内埋土）
10．黄褐色土・灰色土・暗褐色土互層　（　〃　）
11．黄褐色土・灰色土・暗褐色土互層　（　〃　）
12．黄褐色土・灰色土・暗褐色土互層　（　〃　）
13．灰色土　（　〃　）
14．黄灰褐色土　（　〃　）
15．黄灰色土　（　〃　）
16．暗黄褐色細砂　（　〃　）
17．淡黄灰色細砂　（床面整地土）
18．黄褐色細砂　（　〃　）
19．淡茶灰色細砂　（　〃　）
20．淡灰黄色細砂　（　〃　）
21．明黄褐色砂質土　（　〃　）
22．灰褐色土　（　〃　）

第12図　２号墳墳丘・石室断面図（Ｓ＝1/50）



第13図　2号墳横穴式石室実測図（S＝1/50）



第14図　２号墳石室平面図（Ｓ＝1/50）

製臼玉・水晶製丸玉等がある。

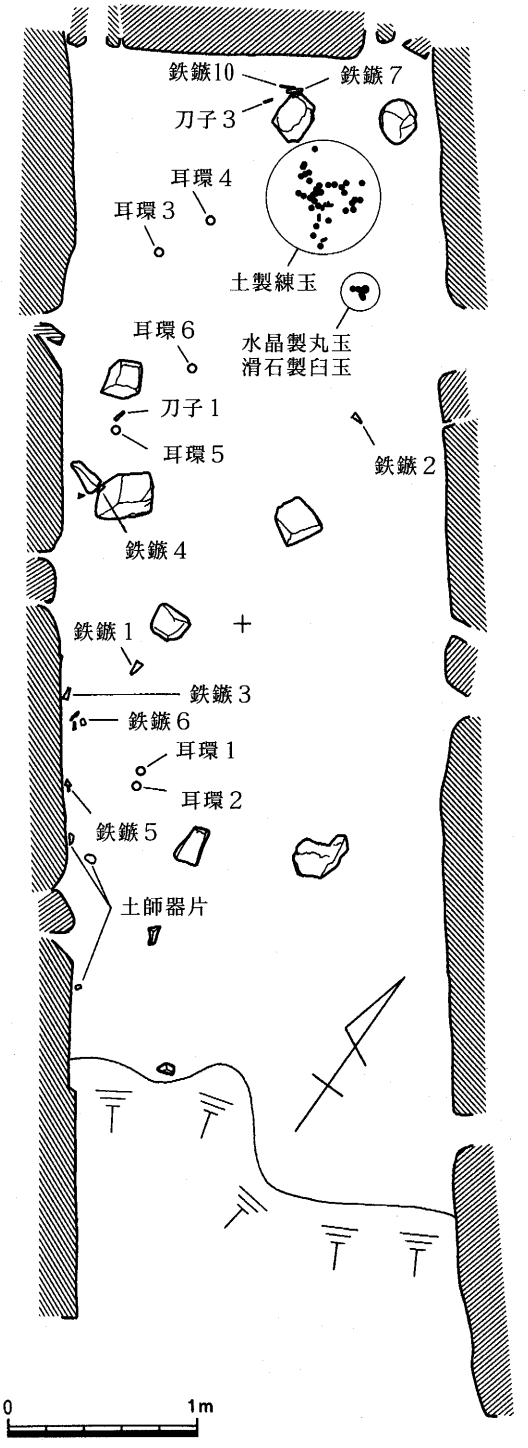
石室奥壁近くの東側には枕石とおぼしき石が２個あり、その南側には土製練玉が集中していた。土製練玉の周辺には刀子破片が散在し、また、石室中央よりの枕石のそばに、鉄鏃２点・刀子が置かれていた。土製練玉の南からは滑石製臼玉４点と水晶製丸玉が出土している。石室堆積土の選別作業中に検出された臼玉もすべてこの付近の堆積土から検出されている。臼玉から南に0.5mほど離れて鉄鏃１点が出土した。この付近の遺物はほぼ原位置を保っているものと考えられる。

土製練玉集中部の西方からは金環２点が検出された。その南にはさらに金環２点・刀子・鉄鏃がやや散漫に分布している。さらに西側壁にそって石室中央付近には鉄鏃４点・金環２点・土師器細片が散漫に分布している。この他、石室内堆積土をふるいにかけて、鉄鏃破片・刀子片・耳環・土製練玉・滑石製臼玉・ガラス玉２点等が出土している。

遺物の他に石室内には、枕石として使用されたと考えられる石が散在する。土製練玉集中部の北側に並ぶ２個は原位置を保っていると考えられるが、その他のものは原位置をとどめているかどうか不明である。

石室前端から前面にかけてはかなり大きく攪乱を受けている。攪乱孔内からは石室内からかき出されたと考えられる須恵器・土師器破片・鉄器の細片・馬具が出土している。

墳丘周辺からは甕・壺を中心とした須恵器の破片が出土している。周溝底から約５cm程度浮いた状態で周溝堆積土中から出土した須恵器甕以外はすべて畑の耕作土及び後世の堆積土から検出されている。



第15図　２号墳遺物出土状況（S＝1/40）

４．出土遺物

２号墳の調査で出土した遺物は整理用コンテナ２箱分と少量であるが、石室内及び石室前面から出土した副葬品は、今回調査した３基の古墳のなかでは比較的豊富である。

１．須恵器（第16図、図版15）

図示できるものは少数で、平瓶１点が完形の他はすべて小破片である。13は周溝内から、他はほとんどが石室内及び石室前面攪乱土中から出土している。細片ばかりのため、正確な個体数は不明である。

１～４は高杯である。いずれも石室前面の耕作土・攪乱土から出土したものである。１・２は杯部、３は頸部、４は脚部である。この他にも小破片が出土している。

５～７は甕である。５が石室前面攪乱土から、６・７は石室内流土中から出土している。５・６は口縁部で、６の外面にはヘラ状工具によって縦方向に沈線が施されている。７は胴部で、上方に一条の沈線がめぐっている。焼成から５と７は同一個体の可能性がある。

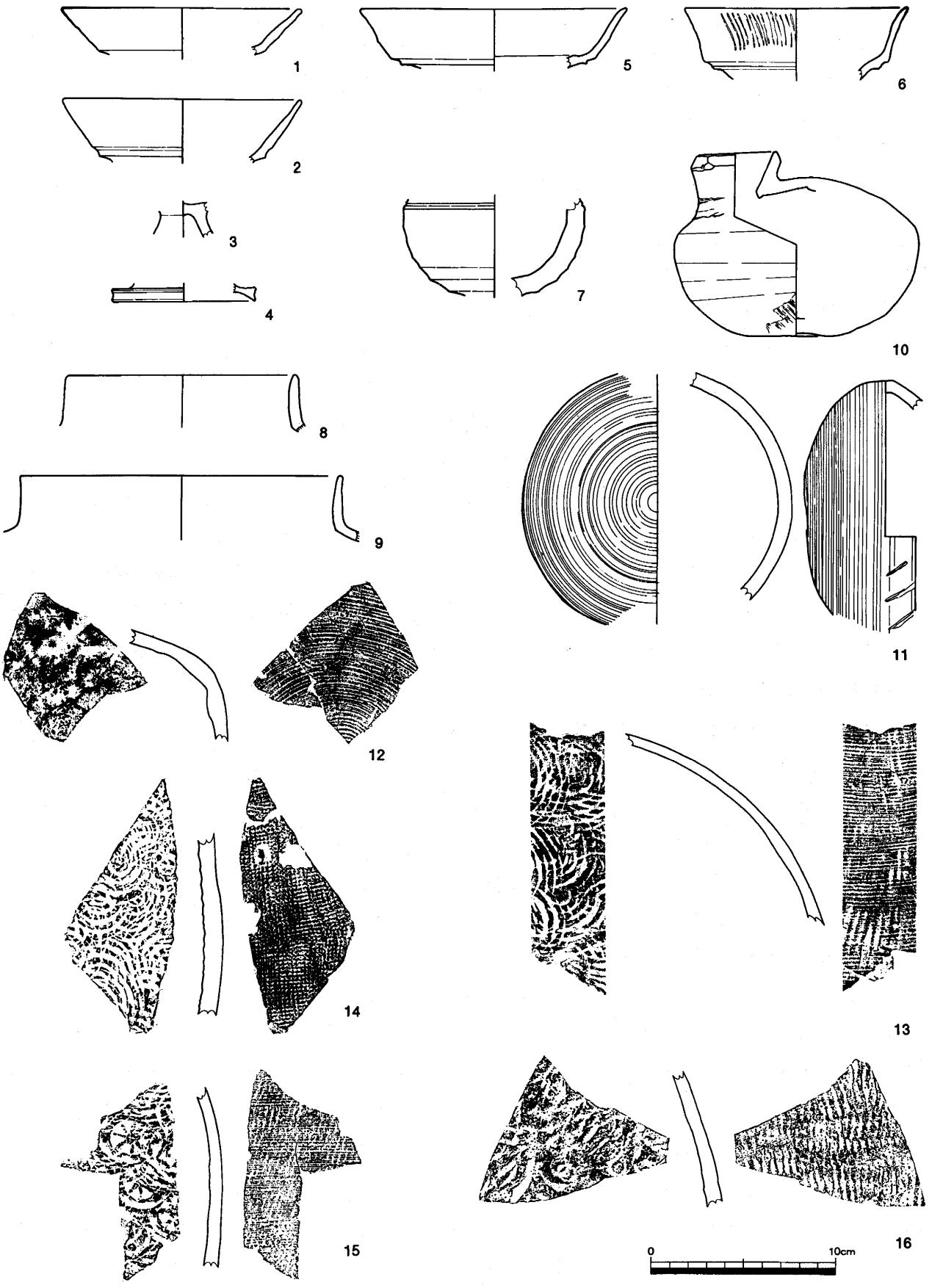
８・９は壺の口縁部である。胴部は出土していない。８は石室内流土中、９は墳丘上の攪乱土中から出土している。

10は平瓶である。石室前端の攪乱土中から出土した。口縁部がヘラ状工具で切り落とされたよ

番号	種類	法量（cm）	技法上の特徴	胎　土	色　調	焼成	備　考
1	高杯		内面・外面ともにナデ	0.5mm大の長石を含む	内　5Y5/2　灰オリーブ色 外　5Y5/1　灰色	良	口縁部
2	高杯		内面・外面ともにナデ	精良	内　7.5Y4/1　灰色 外　7.5Y3/1　オリーブ黒色	良	口縁部
3	高杯	頸部径　2.7	内面・外面ともにナデ	0.5～2mm大の長石を含む	内　10Y5/1　灰色 外　10Y4/1　灰色	良	頸部
4	高杯	復元径　7.8	内面・外面ともにナデ	精良	内　7.5Y6/1　灰色 外　7.5Y6/1　灰色	良	脚部
5	甕		内面・外面ともにナデ	0.5mm大の長石を極めて少量含む	内　5Y4/1　灰色 外　5Y4/1　灰色 断面　7YR5/4　にぶい褐色	良	口縁部
6	甕		内面はナデ 外面は縦方向の沈線の後ナデ	1mm大の長石を少量含む	内　5Y5/1　灰色 外　5Y6/1　灰色	良	口縁部
7	甕	復元径　9.9	外面は左回りのヘラケズリの後ナデ	0.5mm大の長石を含む	内　5Y6/1　灰色 外　5Y5/2　灰オリーブ色	良	胴部
8	壺		内面・外面ともにナデ	精良	内　5Y4/1　灰色 外　5Y5/1　灰色	良	口縁部
9	壺		内面・外面ともにナデ	0.5～1mm大の長石を含む	内　5Y6/1　灰色 外　5Y6/2　灰オリーブ色	良	口縁部
10	平瓶	口　径　4.1 最大径　13.4 器　高　10.0	口頸部はヘラナデ　胴部は右回りのヘラケズリの後ナデ 底部はヘラケズリ	1mm大の長石を含む	内　5Y7/1　オリーブ灰色 外　5GY7/1　オリーブ灰色	良	完形
11	提瓶	復元径　16.8	内面はユビオサエ後ナデ 外面はカキ目調整	精良	内　5Y8/1　灰色 外　N5/1　灰色	良	胴部
12	横瓶		内面はユビオサエ後ナデ 外面はカキ目調整	2mm大の長石を少量含む	内　5GY4/1　暗オリーブ色 外　10Y5/1　灰色	良	胴部
13	甕		内面は同心円当て具 外面はタタキ後カキ目調整	精良	内　2.5Y8/2　灰白色 外　2.5Y8/2　灰白色	良	胴部
14	甕		内面は同心円当て具 外面はタタキ	1mm大の長石を含む	内　7.5Y5/1　灰色 外　5GY2/1　オリーブ黒色	良	胴部
15	甕		内面は同心円当て具 外面はタタキ後カキ目調整	0.5mm大の長石を多く含む	内　10Y6/1　灰色 外　10Y5/1　灰色	良	胴部
16	甕		内面は同心円当て具 外面はタタキ	1mm大の長石を含む	内　N5/　灰色 外　7.5Y4/1　灰色	良	

表番号は、第16図の遺物番号に対応

第２表　須恵器観察表



第16図　須恵器実測図（S＝1/3）

うな形状になっているのが特徴である。

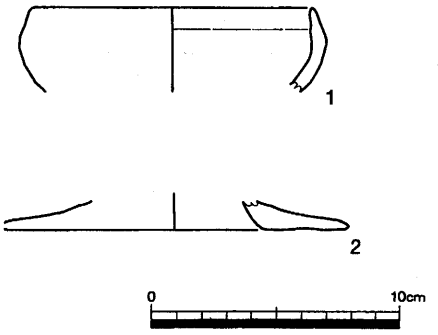
11は提瓶である。石室前面攪乱土から出土した。口縁部及び把手は検出されていない。上下も不明である。この他、提瓶の裏面の中央付近の破片が石室前面攪乱土及び墳頂部から出土しているが、11と同一個体かどうかは不明である。

12は横瓶である。石室内流土中から出土している。胴部の破片のみである。

13～16は甕である。13は周溝内堆積土から出土した甕である。14は墳丘上堆積土、15は石室前面、16は石室内流土から出土している。いずれも胴部の破片である。

２．土師器（第17図、図版15）

石室内及び前面攪乱土から細片が出土している。石室床面から出土しているものはいずれも細片であり、実測は困難であった。石室前面の攪乱土からは碗の口縁部と高杯の脚部が出土している。碗の復元口径11.2cm、胎土は0.5 ～1mm大の長石・石英粒をわずかに含むが、比較的精良な粘土である。内外面共に赤褐色を呈し、調整はナデ仕上げである。高杯の脚部は復元径14cm、胎土は精良な粘土で内外面共に赤褐色を呈し、調整はナデ仕上げである。



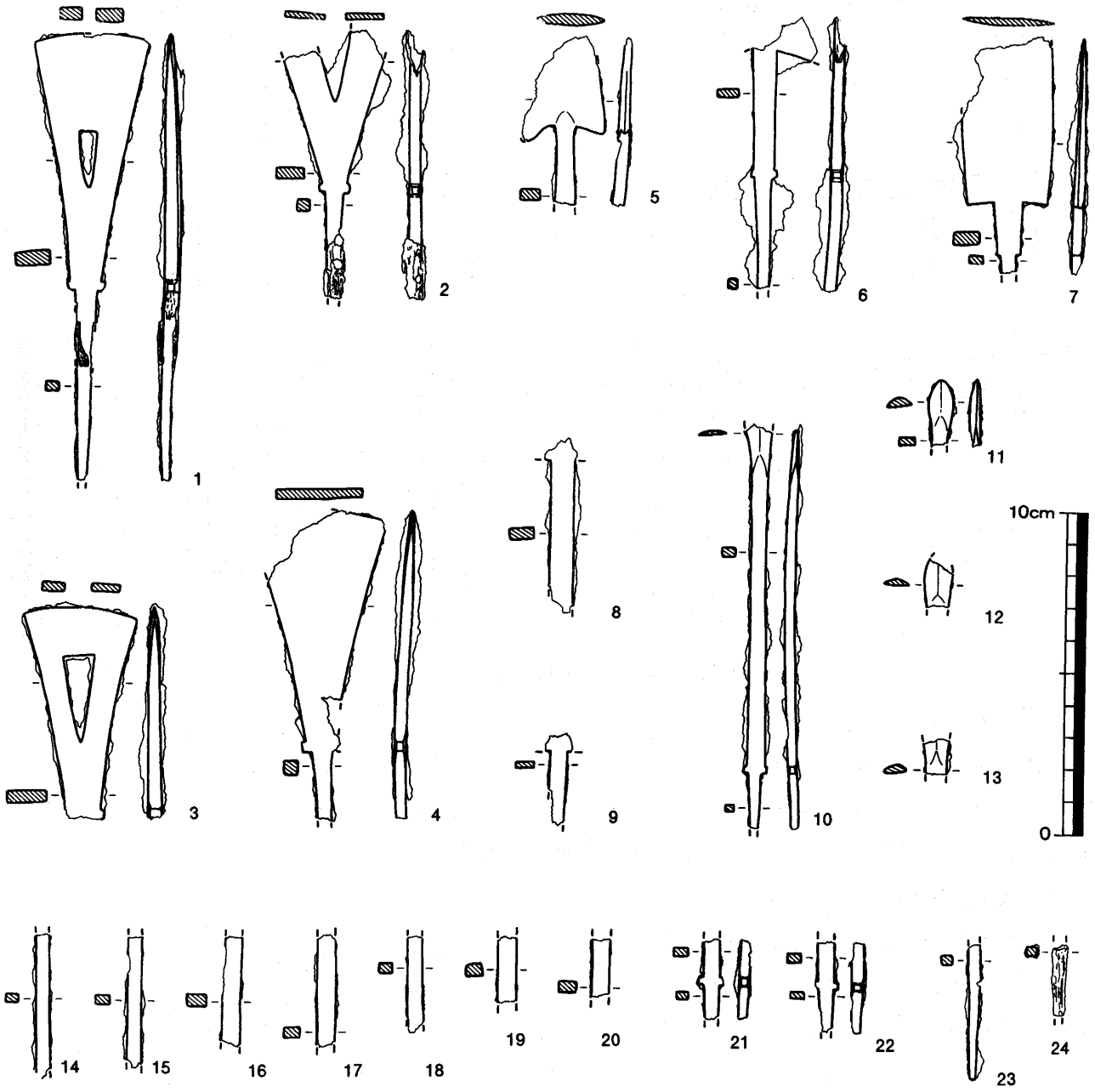
第17図　土師器実測図（Ｓ＝1/3）

３．鉄器

鉄鏃11点以上・刀子５点以上・馬具等が出土している。

鉄鏃（第18図、図版15・16）

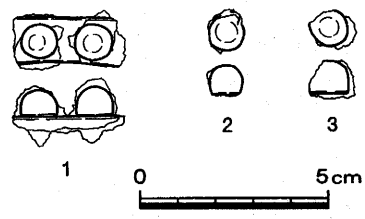
破片が多く、明確な数量は不明であるが、有茎平根式の鏃が７点、長頸式の鏃が４点確認できる。1～7・10は石室床面に伴って検出され、その他は石室内堆積土を選別作業中に検出された。有茎平根式鏃のうち１～４は方頭式のものである。このうち、４を除く３点の鏃身部に透かし穴が入っている。１はほぼ完形に近く、長さ約14cm、弧状を呈する刃部の幅は約3.5cm 、関部は棘状関である。透かし穴は長さ約1.8cm 、幅約0.6cm である。２は刃部を欠損している。３は茎部を欠損している。刃幅約3.2cm で透かし穴がやや大きく長さ約2.7cm 、幅約1.0cmである。４は透かし穴がない以外は１～３と同形態であろう。１・２の茎部には木質がわずかに残存している。５は浅い逆刺部を持つ腸抉三角形式鏃である。先端と茎部を欠損している。６も５と同形態と考えられるが、こちらは棘状関を残している。７は先端部と茎部を欠損しているが、三角形式鏃と考えられる。幅約3cm 、角関である。８・９は５～６のような平根式鏃の頸部であろう。10～24は長頸式鏃とその破片である。関部の破片が計４点有るので、長頸式鏃は４点以上の数量が副葬されていたと考えられる。10は先端部と茎部を欠損しているが、ほぼ完形に近く復元長14cmぐらいである。鏃身部は柳刃形片丸造、鏃身関部は撫関、関部は棘状関である。11～13も同形態の鏃身部である。11は幅約0.9cm 、12は幅約1.0cm 、13は幅約0.8cmである。14～20は長頸式鏃の頸部と考えられる。21・22は棘状関を残す部分である。23・24は鏃の茎部である。24にはわずかに木質が残存している。



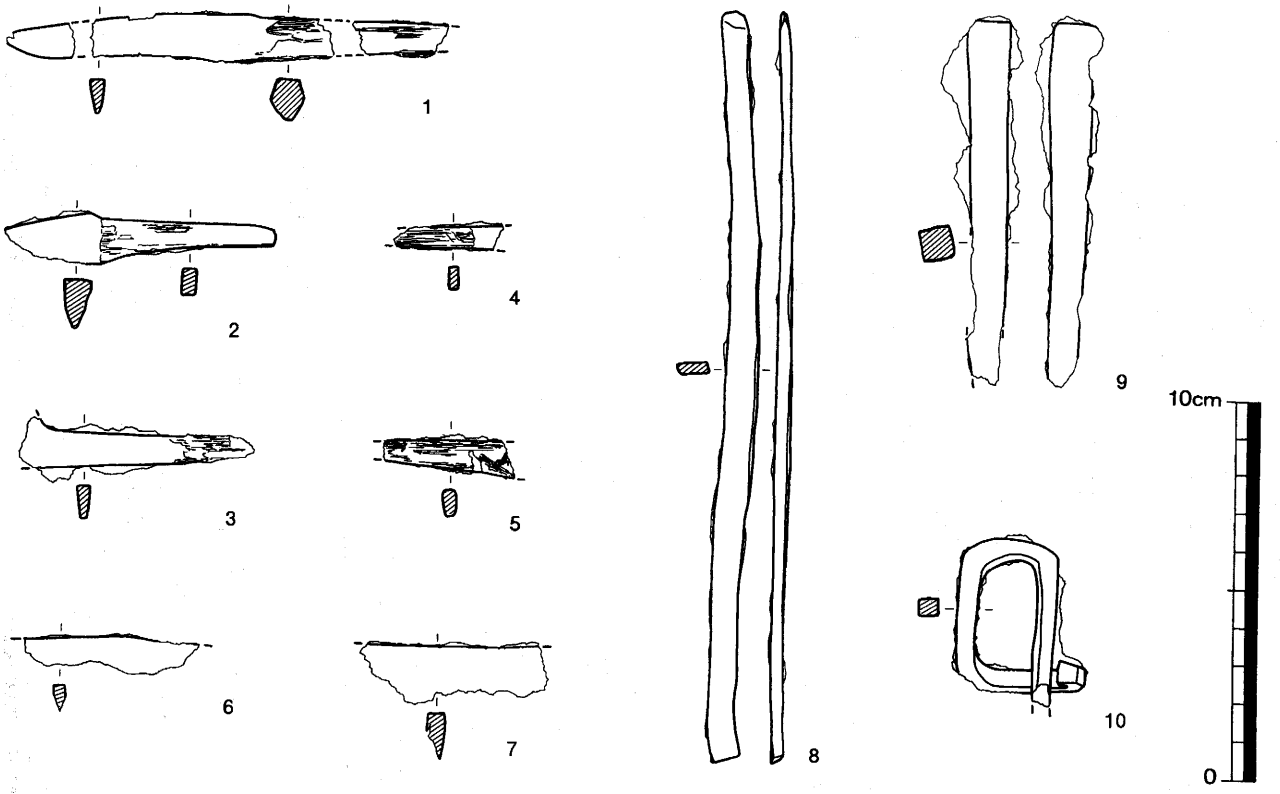
第18図　鉄鏃実測図（S＝1/2）

馬具（第19図、図版16）

３点出土している。いずれも石室前端の攪乱土中から出土している。１は幅1.3cm程の弧状の金具を鋲で木材に留める構造のものである。小破片のため本来の形状は不明であるが、鞍金具の一部ではないかと考えられる。金具部分の表面には金箔が貼られている。鋲頭の部分は錆が著しく明確ではないが、顕微鏡観察によるとやはり金箔が貼られていたようである。鋲頭径0.8～１cm、高さ0.8cm程である。鋲身は錆化が著しく径・長は不明である。２・３は鋲頭のみ出土したもので、２は緑青が吹いており、金箔の痕跡が残存していた。３は錆が著しく金箔の有無は不明確である。



第19図　馬具実測図
（S＝1/2）



第20図　刀子・その他の鉄製品（Ｓ＝1/2）

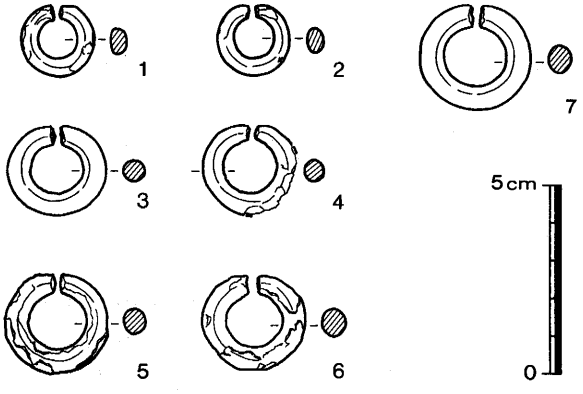
刀子（第20図1～7、図版16）

５点以上出土している。５が石室堆積土を選別作業中に検出されたほかはすべて石室床面から出土している。完形のものはないが、１の推定復元長は12cm以上である。２～５は柄の部分で、木質がわずかに残存している。６・７は刃部と考えられる。

その他の鉄製品（第20図8～10、図版16）

いずれも石室内流土中から出土している。８は先端がやや細くなり尖っているので鑿ではないかと考えられる。長さ19.9cm、幅1.0cm前後、厚さ３～４mm程度である。９は銹化が著しいが釘か鑿ではないかと考えられる。長さ9.8cm、太さ1.3cm前後である。10は楕円形の環状製品である。長径4.2cm、短径2.7cm、古墳に伴うかどうかはよくわからない。

４．耳環（第21図、図版17）



第21図　耳環実測図（Ｓ＝1/2）

番号	外径（cm）		断面径（cm）		重量(g)	備　考
	（上下）	（左右）	（上下）	（左右）		
1	1.91	1.98	0.69	0.49	8.5	銅芯金貼
2	1.89	2.00	0.71	0.48	8.7	銅芯金貼
3	2.39	2.63	0.61	0.64	12.2	銅芯銀貼
4	2.37	(2.52)	0.59	0.54	8.7	銅芯銀貼
5	2.64	2.83	0.68	0.67	13.8	銅芯銀貼
6	2.51	2.79	0.73	0.69	13.3	銅芯銀貼
7	2.76	2.98	0.71	0.68	19.1	銅芯金貼

（　）内は現存値

第３表　耳環計測表

石室内から７点が出土している。１・２は奥壁から約４ｍ付近から出土し、直径２cm程度、３・４は奥壁から約１ｍ付近出土で、直径2.4cm程度、５・６は奥壁から約２ｍ付近で出土し、直径2.6cm程度である。それぞれ出土位置が近く大きさも揃っているので対になるものと考えられる。７は石室奥壁付近の堆積土を選別作業中に検出されており、１～６よりやや直径が大きい。１・２・７が銅芯金箔貼り、３～６が銅芯銀箔貼りである。

５．玉類

土製練玉44点以上・滑石製臼玉26点・ガラス玉２点・水晶製丸玉１点が出土している。

土製練玉（第22図1～44、図版17）

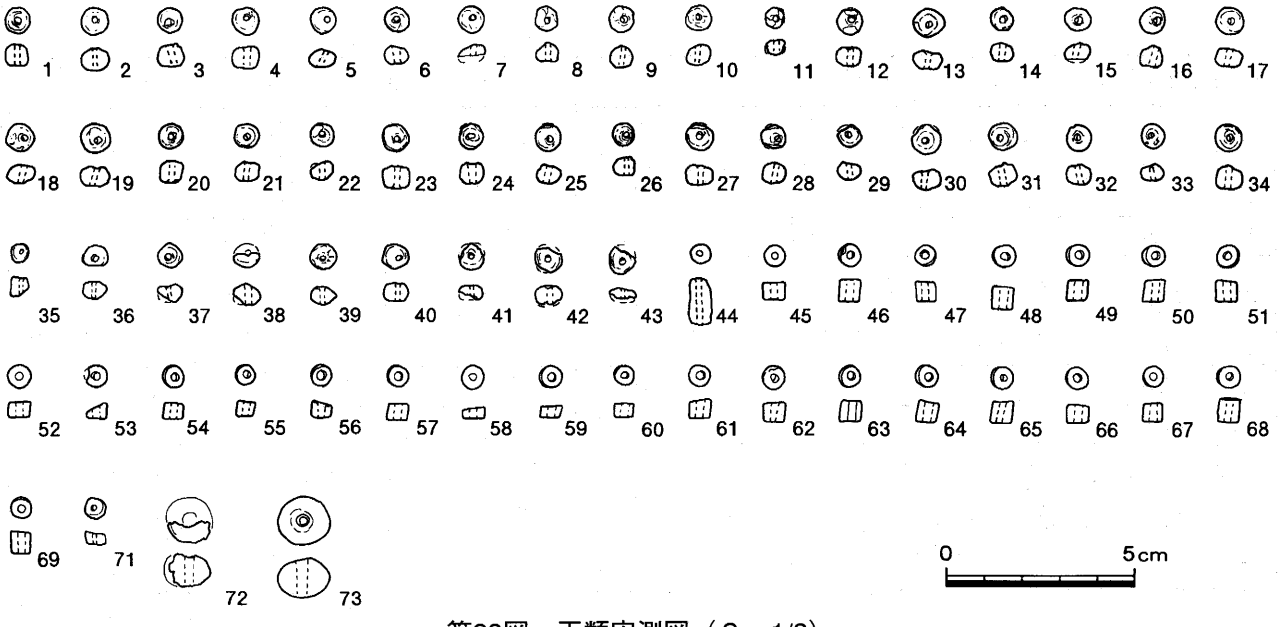
石室奥壁から約0.7ｍ、東側壁から約0.5ｍ付近に集中して出土している。石室堆積土を選別作業中に検出されたものもいくつかあり、この場合、細片となったものが多く正確な数量は不明である。直径6.5～7.0mm、孔径は1.5～2.0mm、厚さ5.5mm 前後のものが多いが、44のみは厚さ（長さ）12.4mmと他のものと異なって管玉状である。表面は灰黄褐色から黒褐色を呈し、割れ口内部は赤褐色を呈するものが多い。

滑石製臼玉（第22図45～70、図版17）

石室奥壁から約1.2ｍ、東側壁から約0.4ｍ付近から水晶製丸玉と共に出土した４点以外は石室堆積土の選別作業中に検出された。直径5.7～6.0mm、孔径は2.0mmのものが多く、厚さはあまり一定していないようで、最大6.2mm、最小3.2mm である。明緑灰色の滑石を用いており、側面には製作時に磨いた痕跡が斜方向の擦痕として残っている。

ガラス玉（第22図71・72、図版17）

石室堆積土の選別作業中に２点を検出した。71は直径5.8mm、孔径1.2mm、厚さ3.1mm、重量0.2g、濃い青色を呈している。72は風化が進んでおり、約半分が欠損している。推定直径11.2mmで孔径3.5mm、厚さ9.4mm、重量1.2g、明るい緑色である。



第22図　玉類実測図（Ｓ＝1/2）

水晶製丸玉（第22図73、図版17）

石室奥壁から約1.2m、東側壁から約0.4m付近から出土。おそらく滑石製臼玉と一連であったと考えられる。直径13.6mm、孔径は入口が3.6mm 、出口が1.8mm 、厚さ10.3mm、重量2.4g、表面に傷がある以外は透明な材質である。

番号	直径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備　考	番号	直径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備　考
1	7.4	1.6	5.8	0.3		23	7.3	1.6	5.9	0.3	
2	7.4	1.5	6.1	0.3		24	6.4	1.5	5.9	0.2	
3	7.2	2.3	6.8	0.3		25	7.1	1.5	5.4	(0.2)	
4	7.4	1.6	5.8	0.3		26	6.1	1.3	4.9	(0.2)	
5	7.0	1.5	4.8	0.2		27	7.1	1.9	5.2	(0.3)	
6	6.7	2.0	4.8	0.2		28	6.7	1.5	5.7	(0.2)	
7	7.2	1.4	(2.8)	(0.1)	破片	29	6.6	1.5	5.0	(0.2)	
8	6.9	1.6	5.3	(0.2)		30	7.8	1.9	5.3	(0.3)	
9	6.8	1.4	5.9	0.3		31	7.7	1.9	6.5	0.3	
10	6.8	1.4	5.4	0.2		32	7.1	1.5	5.9	(0.3)	
11	5.6	1.5	4.0	(0.1)		33	6.8	1.5	4.3	0.2	
12	6.8	1.4	5.4	(0.2)		34	7.3	1.8	6.3	0.3	
13	7.8	1.8	5.1	0.3		35	5.7	1.3	4.6	0.1	
14	6.4	1.8	4.7	0.2		36	7.5	1.5	4.8	(0.2)	
15	7.0	1.9	(4.3)	(0.2)		37	6.7	1.8	4.4	(0.2)	
16	7.2	2.0	5.7	0.3		38	6.8	1.9	6.1	(0.1)	
17	7.2	1.6	4.8	0.2		39	7.1	1.4	4.5	(0.2)	
18	7.5	1.6	4.9	0.3		40	7.1	1.3	5.2	(0.2)	
19	9.8	1.6	5.5	(0.3)		41	7.8	1.8	(4.2)	(0.2)	
20	7.0	1.8	5.6	0.3		42	7.2	1.7	(4.6)	(0.2)	
21	6.6	1.4	5.3	0.2		43	7.2	1.9	(3.1)	(0.1)	
22	6.4	1.7	5.0	(0.2)		44	6.2	1.5	12.4	0.5	

表番号は、第22図の遺物番号に対応、（ ）内は現存値

第４表　土製練玉計測表

番号	直径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備　考	番号	直径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備　考
45	5.8	1.9	4.8	0.3		58	6.0	1.9	3.2	0.2	
46	5.8	2.0	5.7	0.4		59	5.7	2.2	3.4	0.2	
47	5.2	2.2	5.2	0.2		60	5.3	2.3	3.8	0.2	
48	6.0	2.0	6.2	0.4		61	5.7	2.1	4.9	0.2	
49	5.9	2.0	5.5	0.3		62	6.1	1.8	5.3	0.4	
50	5.8	2.0	5.7	0.3		63	5.7	2.2	5.7	0.3	
51	6.1	1.8	5.4	0.4		64	5.7	2.2	5.9	0.3	
52	5.8	2.1	4.4	0.3		65	6.1	1.9	6.1	0.4	
53	5.7	2.0	(4.3)	(0.1)		66	6.1	2.1	5.0	0.3	
54	6.0	2.0	4.4	0.2		67	5.7	2.1	5.0	0.3	
55	5.3	2.1	4.2	0.2		68	6.0	2.0	6.6	0.3	
56	5.6	2.2	4.3	0.2		69	5.5	2.1	5.8	0.3	
57	5.8	2.2	4.6	0.2		70	－	－	－	－	破片

表番号は、第22図の遺物番号に対応、（ ）内は現存値

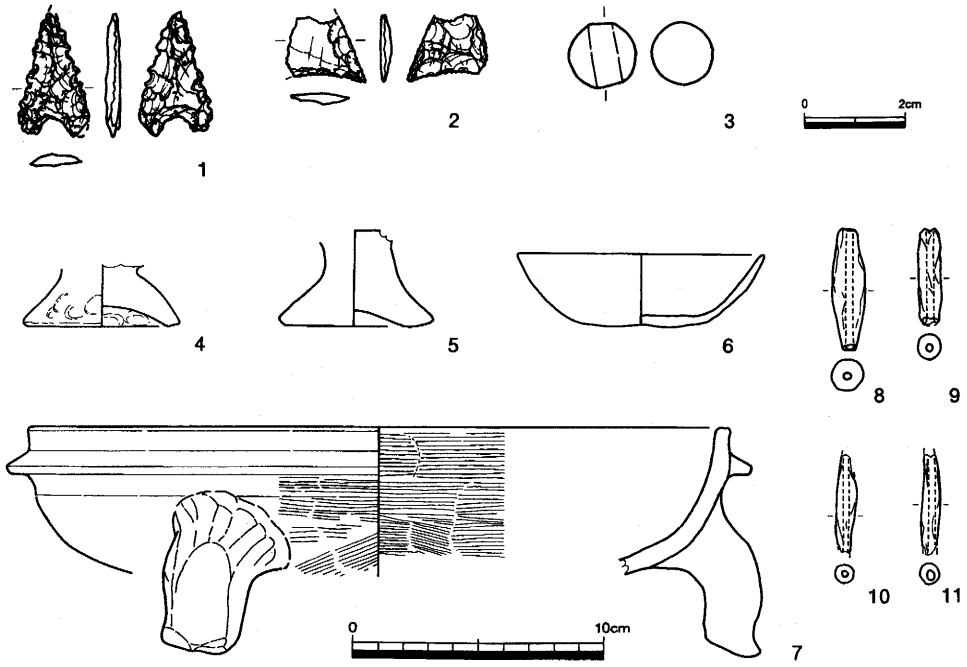
第５表　滑石製臼玉計測表

6．古墳に伴わない遺物（第23図、図版16）

石室内及び墳丘周辺から石鏃２点、製塩土器２点の他、中世土器多数が出土している。

１・２は縄文時代の石鏃と考えられる。１は残存長2.43cm、幅1.48cm、厚さ0.32cm、重さ0.8gで、刃部は鋸歯状を呈している。２は残存長1.29cm、残存幅1.59cm、厚さ0.24cm、重さ0.5g、抉のやや浅い形態をしている。製塩土器は脚台が２点出土している。弥生時代後期から古墳時代前期のものと考えられる。胎土は砂粒を多く含んでおり、内外面ともに指圧痕が残っている。

中世土器は土錘・土鍋・擂鉢等、主に鎌倉時代に属するものが出土している。６は土師器の碗である。復元口径9.8cm、胎土は１mm大の長石をわずかに含むが、比較的精良な粘土である。内外面ともに鈍い黄橙色を呈し、調整はナデ仕上げである。７は脚付きの深皿である。脚部分の破片が２点出土しており、おそらくは三脚であったのだろう。復元口径約28cm、口縁部の下には１条の突帯がめぐっている。調整は内外面ともハケメ調整を行い、口縁部及び突帯がナデ仕上げである。８～11は土錘である。素焼きで明黄褐色から赤褐色を呈している。８はやや大きめで長さ約５cm、直径約1.5cm、重さ8.6ｇである。9～11は長さ４cm前後、直径１ｃｍ弱、重さ２～４g 程度である。このほか、鎌倉から南北朝にかけての時期に属すると考えられる擂鉢の口縁部なども出土している。



第23図　古墳に伴わない遺物（1～3：S＝2/3、4～11：S＝1/3）

３は鉄砲の弾と考えられる。径12.6mm、長さ13.1mm、重さ11.9gで鉛製である。

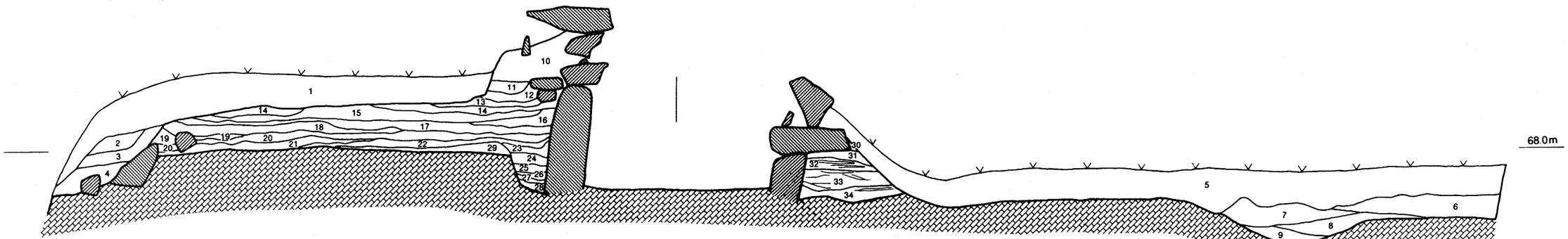
第５章　茂浦３号墳

１．墳丘と周溝

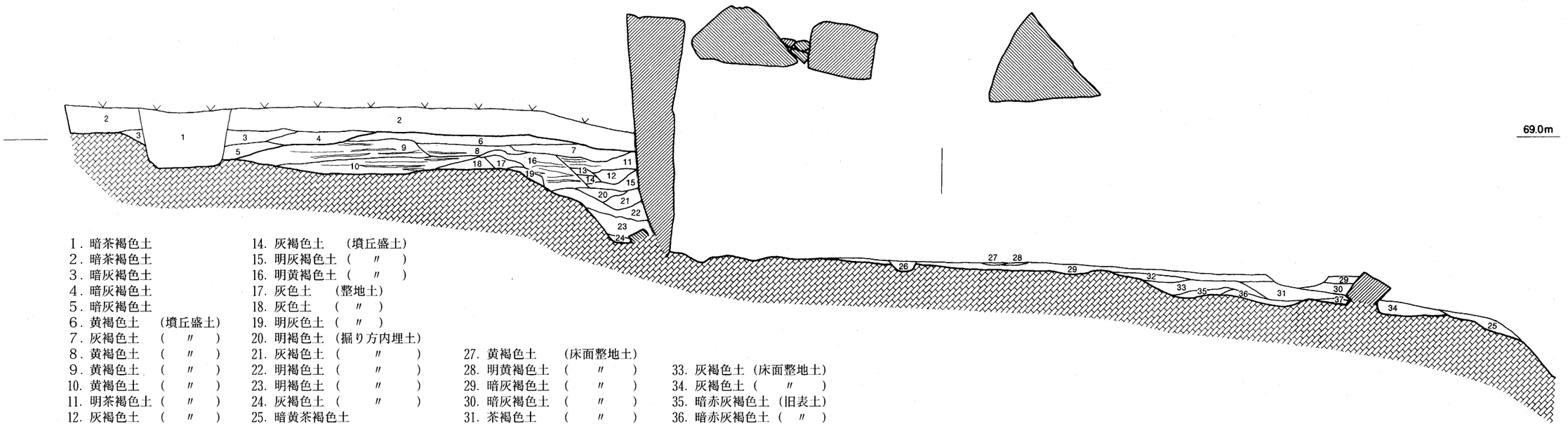
茂浦３号墳は、標高約71ｍ南北方向に張り出した尾根の頂部から南へわずかに下って位置する円墳である。先述の茂浦２号墳からは、約30ｍの距離を測る。

古墳の周囲には段々畑の造成が行われており、調査時にはこれらの畑の造成により墳丘の大半は削平され、地形的に大きな改変を受けていることが確認された。このため石室は、天井石が既に露出している状況であった。石室の崩落の危険性があるため、墳丘の発掘調査は石室長軸方向とそれに直交する方向に軸を設定し、この土層断面観察を中心にして調査を行った。

第24図　３号墳墳丘測量図（Ｓ＝1/150）

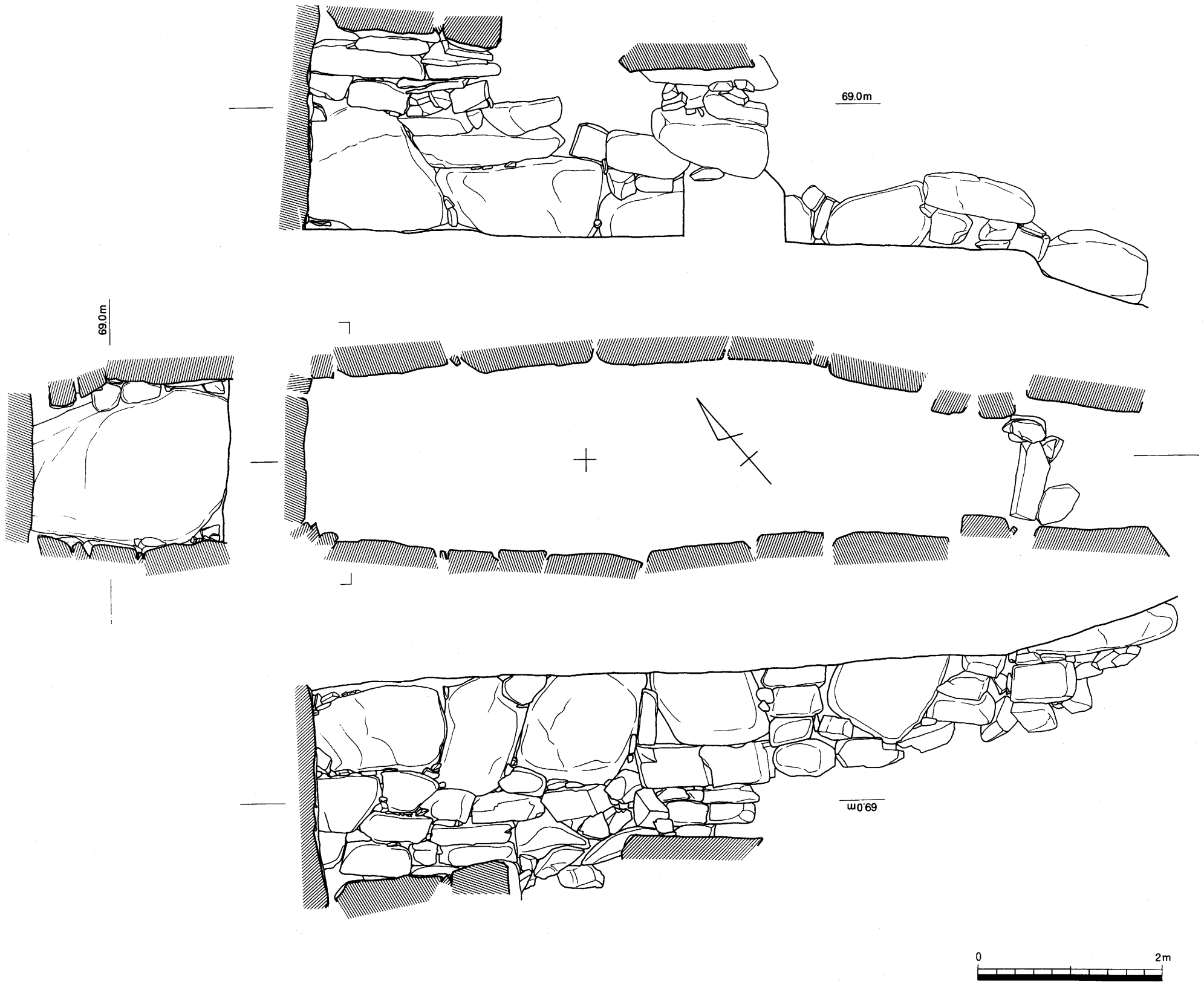


1．暗黒褐色腐植土
2．暗褐色粗い砂質土
3．暗茶褐色粗い砂質土
4．暗褐色細砂
5．暗茶褐色土
6．暗灰褐色土
7．明灰褐色土
8．明灰褐色土
9．明黄灰褐色土
10．褐色粗い砂質土　(墳丘盛土)
11．黄褐色粗い砂質土　(　〃　)
12．灰褐色細砂　(　〃　)
13．淡灰褐色細砂　(　〃　)
14．淡黄褐色細砂　(　〃　)
15．灰褐色細砂　(　〃　)
16．灰白色細砂　(　〃　)
17．黄褐色粗い砂質土　(　〃　)
18．明黄褐色粗い砂質土　(　〃　)
19．橙黄褐色粗い砂質土　(墳丘盛土)
20．暗褐色細砂土　(　〃　)
21．淡灰褐色細砂　(　〃　)
22．明黄褐色細砂　(　〃　)
23．灰褐色細砂　(掘り方内埋土)
24．橙黄褐色細砂　(　〃　)
25．淡黄褐色細砂　(　〃　)
26．灰白色細砂　(　〃　)
27．明黄褐色細砂　(　〃　)
28．灰黄色細砂（掘り方内埋土）
29．黒灰色細砂（整地土）
30．暗灰茶褐色土（墳丘盛土）
31．暗灰茶褐色土（墳丘盛土）
32．明灰褐色土　(墳丘盛土)
33．明黄褐色土　(墳丘盛土)
34．明黄褐色土　(墳丘盛土)



1．暗茶褐色土
2．暗茶褐色土
3．暗灰褐色土
4．暗灰褐色土
5．暗灰褐色土
6．黄褐色土　(墳丘盛土)
7．灰褐色土　(　〃　)
8．黄褐色土　(　〃　)
9．黄褐色土　(　〃　)
10．黄褐色土　(　〃　)
11．明茶褐色土　(　〃　)
12．灰褐色土　(　〃　)
13．灰色土　(　〃　)
14．灰褐色土　(墳丘盛土)
15．明灰褐色土　(　〃　)
16．明黄褐色土　(　〃　)
17．灰色土　(整地土)
18．灰色土　(　〃　)
19．明灰色土　(　〃　)
20．明褐色土　(掘り方内埋土)
21．灰褐色土　(　〃　)
22．明褐色土　(　〃　)
23．明褐色土　(　〃　)
24．灰褐色土　(　〃　)
25．暗黄茶褐色土
26．暗褐色土
27．黄褐色土　(床面整地土)
28．明黄褐色土　(　〃　)
29．暗灰褐色土　(　〃　)
30．暗灰褐色土　(　〃　)
31．茶褐色土　(　〃　)
32．黄褐色土　(　〃　)
33．灰褐色土（床面整地土）
34．灰褐色土　(　〃　)
35．暗赤灰褐色土（旧表土）
36．暗赤灰褐色土　(　〃　)
37．暗灰褐色土　(　〃　)

第25図　3号墳墳丘・石室断面図（S＝1/50）



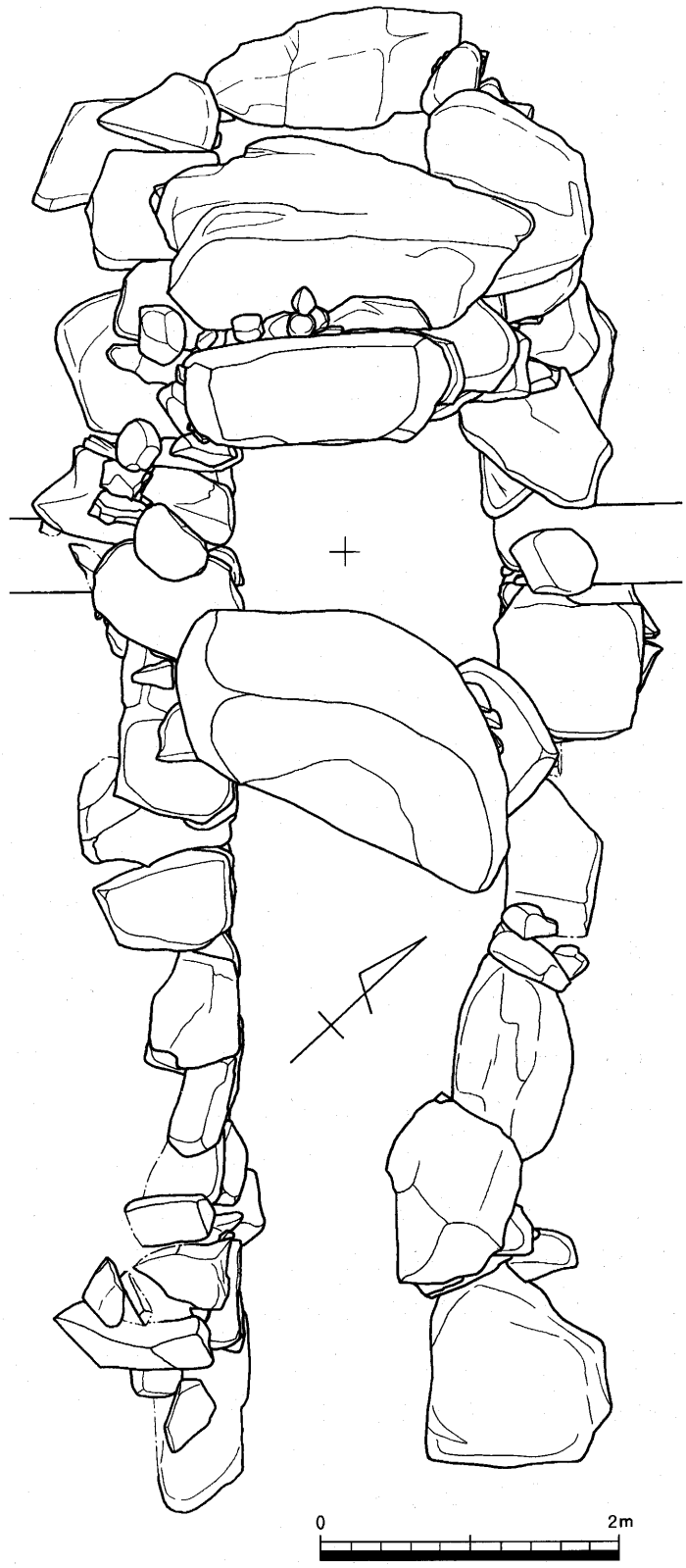
第26図　3号墳横穴式石室実測図（S＝1/50）

墳丘は、まず丘陵斜面を地形にそって削平し、整地を行ったうえで盛土を行っていることが確認された。盛土は、黄褐色系の土と灰褐色系の木炭を含む土が10cm前後の厚さで版築状に構築されている。これらの盛土は固く叩きしめられ、全体的によく締まっていることが確認された。古墳端部の盛土は、段々畑の造成時の攪乱で状況が把握できなかったが、墳頂部に近づくにつれ若干傾斜していき、墳形を形成しながら盛土を行っているものと思われる。

石室掘り方は、石室奥壁部分で、この整地された地表面から0.8m程掘り込まれ、褐色系の土と灰褐色系の木炭を含む土が約10cmの厚さで版築状に重ねられており、この埋土は固く締められている。石室西側部分の掘り方は0.6mと若干浅い。これは、旧地形を基に掘削を行っているためである。また、石室東側については、旧地表直上に側壁の根石を置いたのみで、石室掘り方は確認されていない。

周溝は、石室の背後の部分および石室東側の一部のみ残存しており、他の部分は、墳丘同様に段々畑の造成により大きく破壊されていた。残存状況の良い石室北側の土層断面観察によると、この周溝は、旧地表面を幅約1.5m・深さ約0.4mの皿状に掘削し、古墳の石室を中心に弧状に形成されていたものであることがうかがえる。

なお、検出された周溝から古墳の直径を復元すると、約16mになる。



第27図　3号墳石室平面図（S＝1/50）

2．横穴式石室

本古墳の内部構造は、ほぼ南東に開口する横穴式石室で、その主軸方向はN49°Wを示す。

石室は、前半部の崩壊が著しく、天井石

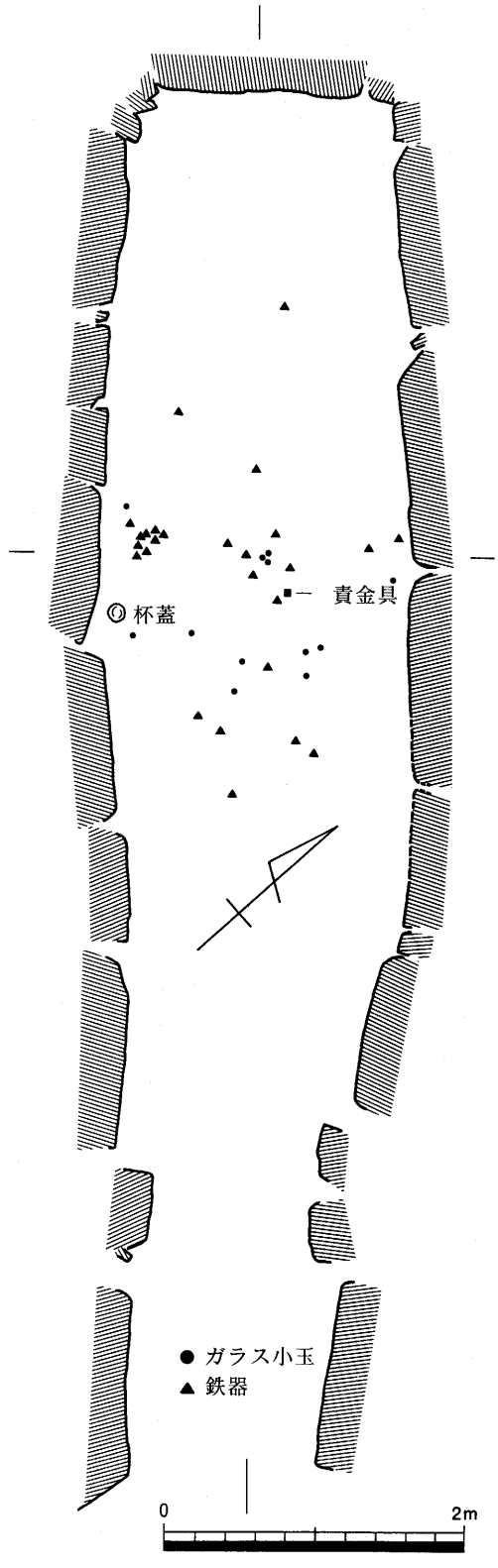
は石室中央部に１枚、奥壁側に２枚残存しているのみである。他の天井石は、畑の造成時に既に抜き取られたものと思われる。

石室は、無袖の横穴式石室で石室床面の全長は、9.1ｍを測る。石室内は、石室中央部で若干ふくらみが認められる。このため石室幅は、奥壁付近で1.7ｍ、石室中央部分で2.0ｍを測る。また、石室入口付近に石室の床面造成時の土止めと考えられる大型の石材が石室と直交する形で残っているのが確認された。この石の石室側で両側壁が石室内に飛び出した形を呈しているが、これは両側壁が土圧等により二次的に移動したためである。また石室入口での幅は、1.3ｍとなっており、石室中心部との幅の差が0.7ｍ認められる。石室天井高は、奥壁付近で2.2ｍであるのに対し、石室中央部分の天井石が残存する部分では1.8ｍと低くなっている。

奥壁は、高さ2.6ｍ・幅1.8ｍ・厚さ0.8ｍの大型の１枚石を使用している。このため、奥壁が天井石より高く石室背後に突出する形となっている。なお、両側壁と奥壁の間に生じた隙間には、小型の石材を充塡している。

両側壁は、基本的には大きめの石を４段に積み重ねているようであるが、大型の石と小さな石を数段積み重ねている部分もあり、側壁の構築方法に特に規則制は認められないようである。構築の過程で生じた隙間には、奥壁同様に小型の石材を充塡している。両側壁ともほぼ垂直に構築されていたようである。

石室の構築方法は、奥半分は石室掘り方の底面に側壁の基礎を置き、前半分は旧地形にそのまま側壁の石材を置いている。したがって、石室前端部では最大で約40cmの盛土を行い床面を作っている。この床面の盛土を止めるために、前述の土止めの石を石室入口付近に配置している。このように造成された石室入口付近は、石室掘り方を床面としている奥壁側とは30cm程度の比高差があり、築造当時の床面はかなり斜めになっていたと思われる。



第28図　３号墳遺物出土状況（Ｓ＝1/50）

３．遺物の出土状況

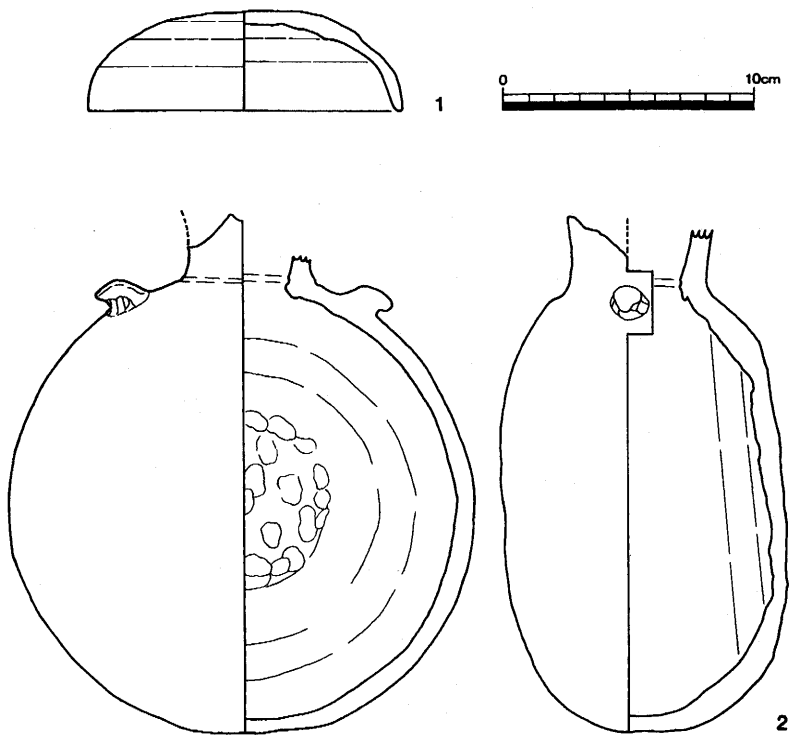
石室内は、奥壁付近及び前半部を中心に盗掘を受けた痕跡があり、この部分からの出土遺物は非常に少ない。し

たがって、床面からの出土遺物は、石室の中央部分を中心にしてやや奥よりにかけての一部に限られた。その主なものとしては、耳環１、石室中央部からやや奥壁側にかけて直径90cmの範囲で検出されたガラス小玉のまとまりの他、須恵器杯蓋１、鉄釘等があるが、その量は少なく全体としては点在という状況であった。鉄釘については、石室中央部で比較的まとまって検出されたものもあるが釘の位置・方向に規則制はなく、木棺の痕跡や棺台の石等も確認されておらず、付近に木棺が存在したことが推測されるのみである。また、石室入口付近で床面からやや遊離した状態で、ほぼ完全に復元できる須恵器提瓶が１個体出土している。

なお、古墳に伴わない遺物としては、石室床面から中世の土鍋が検出されており、石室埋土および攪乱土からも土鍋等の中世土器片が検出された。石室内の攪乱土からは、石鏃も検出されており、このことから古墳の周辺に古墳時代以前の遺跡の存在もうかがえるところである。

４．出土遺物

この古墳の発掘調査で出土した遺物は、整理用コンテナ１箱と少量であった。石室内から検出された遺物は、須恵器・耳環・ガラス小玉・鉄器等がある。古墳に伴わない遺物として、石鏃、土鍋等の中世土器が検出されている。



第29図　須恵器実測図（S＝1/3）

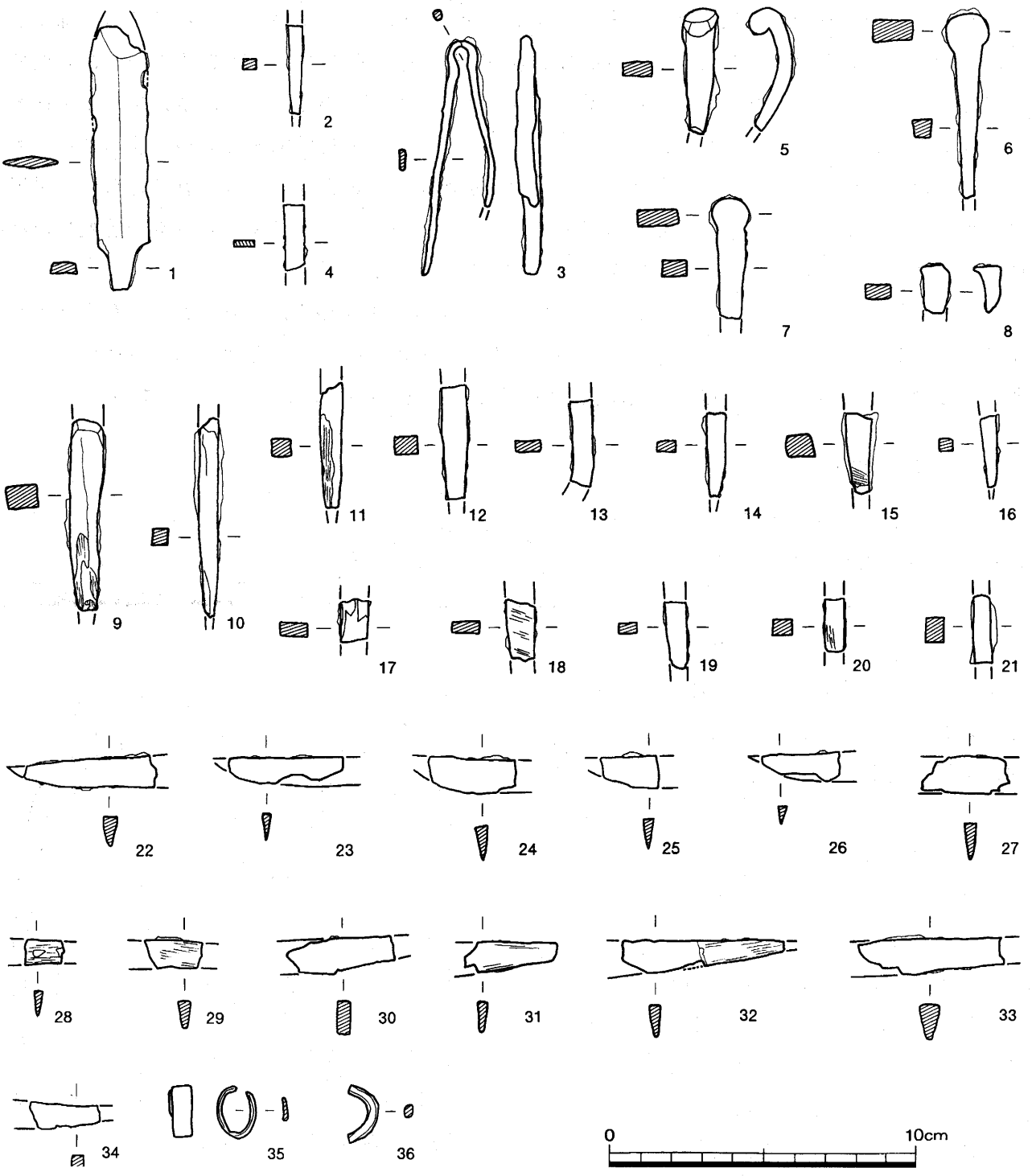
１．須恵器（第27図、図版18）

杯蓋（１）

完形に復原されたもので、口径は12.4cm、器高4.0cmを測る。調整は、外面の胴部下半が回転ヘラケズリ、胴部上半が回転ナデ、内面が回転ナデである。色調は内外面とも淡灰色を呈し、焼成は良好である。口縁端部は丸く収められている。

提瓶（２）

口縁部は欠損しているが、胴部は完全に復原できたものである。胴部径は18.2 cm、胴部の厚さは11.2cmを測る。外面の表面は本来はカキメが施されていたと思われるが、調整は風化による磨滅が著しく不明である。外面の裏面はヘラケズリの後にヨコナデを行っている。内面の中心部はユビオサエを行い周辺はヨコナデを行っている。外面の色調は淡灰色、内面は淡青灰色を呈し、焼成は良好である。断面観察によると、口縁部・吊り手ともに貼りつけにより形成されている。



第30図　鉄器実測図（Ｓ＝1/2）

２．鉄器（第28図、図版18・19）

鉄鏃（１・２）

１は、刃部が8.5cm程度に復原できる長いものである。中央にはかすかであるが稜線が認められる。茎部は偏平な長方形を呈している。２は、残存長2.9cm、段面は長方形を示す。断面の幅から、茎部の先端に近い部分と考えられる。

馬具（３・４）

「鑷子」いわゆる「毛抜き」と考えられているものであるが、３と４の２点が存在するため、１組の馬具と思われる。３は、幅６mm・厚さ３mm程度の鉄板を折り曲げて作られたものである。環状部は断面が丸くなるように鉄板を潰して形成されている。一方の長さは８cmであるが、もう一方は5.7cmのところで折れており、同じ長さで作られていたかどうかは不明である。４は、現存長2.2cm、厚さ２mm、幅７mmを測る。鉄板の厚さの違いから３とは別個体と考えられる。

鉄釘（５～21）

完形品は皆無であるが、17点以上が検出された。釘の頭部が残存しているものは、先端を折り曲げたもの(5･8)と、先端が丸く偏平なもの(6･7)の２種類が存在する。前者にはさらに、丸い先端部を折り曲げただけのもの(5)と、扁平な板を折り曲げ頭部としているもの(8)の２種類が存在する。頭部の残存しないものは13点(9～21)検出されている。

刀子（22～34）

破片で13点以上が検出されている。このうち刃部が５点、茎部が８点確認されている。茎部は過半数のものに木質が付着している。

責金具（35）

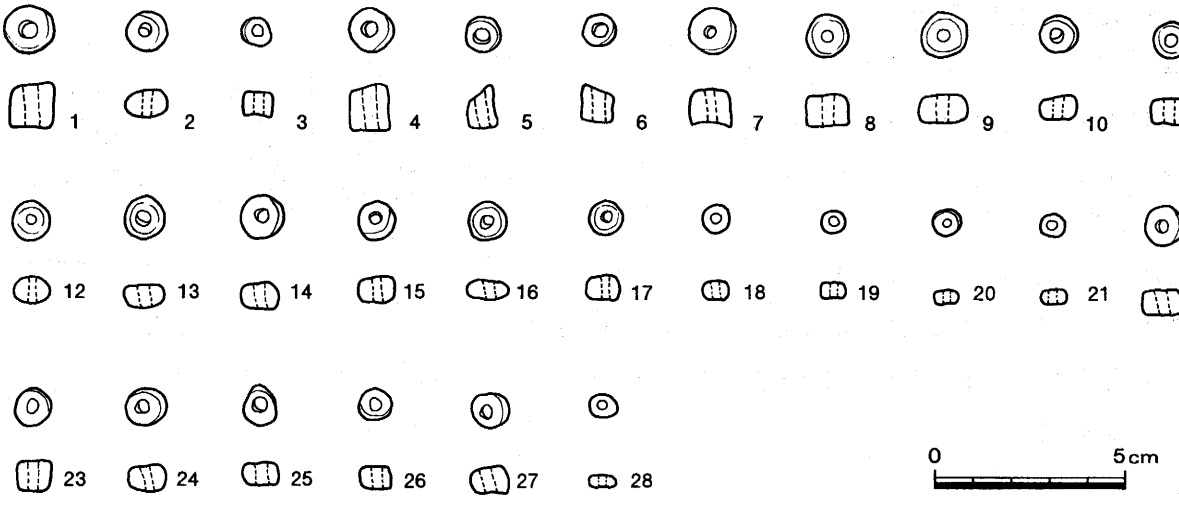
刀子の責金具と考えられる。環の長径は1.8cm、短径は1.4cmを測る。厚さ0.7cm、幅0.2cmの銅板を環状に曲げたものである。表面の劣化が著しく、金属が表面に貼られていた跡は見受けられない。

不明鉄器（36）

半円形で環状を呈している。残存部の外径は1.9cm、断面径は４mmを測る。馬具の一部とも考えられる。

３．装身具

ガラス小玉（第29図、図版19）



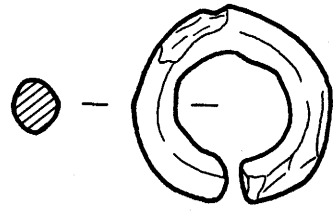
第31図　ガラス小玉実測図（Ｓ＝1/2）

番号	直径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	色　調	番号	直径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	色　調
1	6.2	1.8	6.3	0.5	透明	15	5.1	1.0	4.0	0.1	青色
2	5.4	1.8	3.6	0.1	黄色	16	5.0	1.7	2.7	0.1	青色
3	4.4	1.6	3.8	0.1	赤色	17	4.1	1.2	2.9	0.1	青色
4	5.9	1.8	6.2	0.3	濃紺	18	3.5	1.2	2.7	0.1	青色
5	4.8	2.0	6.2	0.2	濃紺	19	3.4	1.0	2.3	－	青色
6	4.6	1.8	4.2	0.1	濃紺	20	3.6	1.4	1.6	－	青色
7	5.8	1.3	4.5	0.2	青色	21	3.3	1.1	2.0	－	青色
8	5.6	1.7	3.9	0.2	青色	22	5.5	1.7	3.5	0.1	水色
9	6.0	1.7	3.5	0.2	青色	23	4.6	2.0	3.9	0.1	水色
10	5.4	1.6	3.3	0.1	青色	24	5.0	1.8	3.6	0.1	水色
11	4.8	1.4	3.6	0.1	青色	25	4.6	1.7	3.2	0.1	水色
12	5.0	1.0	3.7	0.1	青色	26	4.2	1.4	3.4	0.1	水色
13	5.6	1.5	3.1	0.1	青色	27	4.9	1.8	3.4	0.1	水色
14	6.6	1.3	3.6	0.1	青色	28	3.6	1.4	1.4	－	水色

表番号は、第29図の遺物番号に対応

第６表　ガラス小玉計測表

28点のガラス小玉が検出されている。大きさによって直径６mm内外のものと、直径４mm程度の小型のものの２種類に大別できる。色はほとんどのものが青色を呈するが、濃い色のものと淡い色のものとが混在する。側面が短いものは、球状の上下を切った形を呈しており、側面が長いものは、いびつな長方形を呈している。このことから、長いものは管状のガラス棒を切断したものであり、短いものは個々にガラスを巻き付けて形成されたと考えられる。



第32図　耳環実測図（S＝1/1）

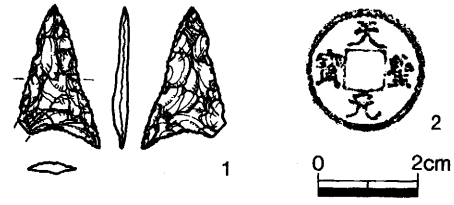
耳環（第30図、図版19）

外径の上下2.6cm、左右2.6cm、断面直径の上下0.5cm、左右0.7cmを測る。このため断面の形は、やや横長の楕円形を呈している。重量は、11.8ｇを量る。銅芯で形成されているが、表面の劣化が著しく、金貼りか銀貼りかの判別は不可能である。

４．古墳に伴わない遺物

石鏃（第31図１、図版19）

縄文時代のものと考えられる石鏃が１点検出されている。現存部分で、長さが2.8cm、幅1.7cm、厚さ0.3cmを測り、重量は0.9ｇを量る。



第33図　石鏃・貿易銭（S＝2/3）

貿易銭（第31図２、図版19）

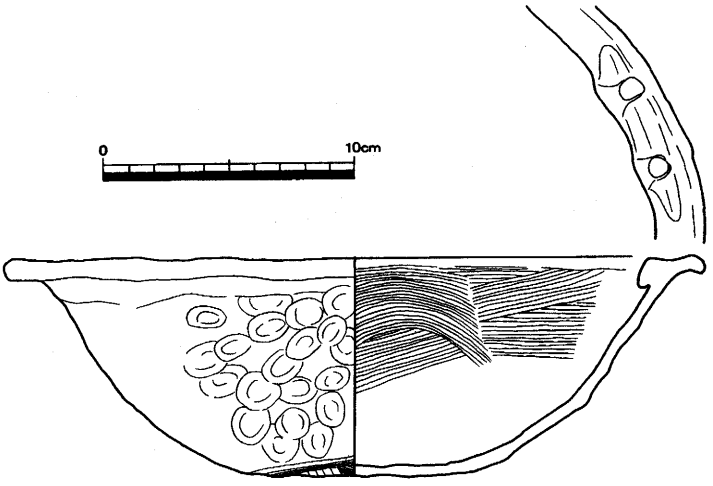
長崎貿易銭の「天聖元寶」が１点検出されている。これは、貿易決済専用に使用されたものであるといわれている。直径は2.5cm、厚さは1.6mmを測り、重量は2.9ｇを量る。

土鍋（第32図、図版19）

一部を欠損しているがほぼ完全に復元できたものである。口径24cm、器高8.8cmを測る。外面

の調整は、底部がハケメ、胴部がユビオサエの後にヨコナデを行っている。内面の調整は、胴部下半がユビナデを行い、胴部上半がハケメを施している。胎土には微砂粒を含むが精良な粘土を使用している。色調は、外面が灰黄褐色で口縁部下にススが付着している。内面は、にぶい黄褐色である。焼成は、土師質で良好である。また偏平に形成された口縁部には、２個ずつ対向して径８ｍｍ前後の孔が４箇所穿たれている。

また、石室埋土から土鍋・羽釜等の中世土器片も検出されている。



第34図　土鍋実測図（Ｓ＝1/3）

第６章　まとめと考察

今回発掘調査を行った茂浦１～３号墳は、いずれも段々畑の造成により墳丘上半部や石室前端部が破壊を受けており、残存状態は良くなかった。また、これらの破壊により石室が開口していたためか、何度となく盗掘を受けたようで、特に２・３号墳はその石室規模に比べて極端に遺物が少なかった。したがって、古墳群の全体像に迫るには資料的にやや難があるが、以下調査によって明らかになった点を整理し直し、若干の考察を行いたい。

古墳の年代

まず、１号墳から出土した須恵器（第８図）としては、杯身が２点と高杯が１点ある。このうち杯身については、どちらも口径９cm前後、高さ3.5cm前後の小型品で、底部にはヘラ切り未調整の跡が残っている。また、立上がりは短く、受部よりわずかに上へ出ているだけである。これらの須恵器は岡山県内の須恵器編年で言えば、稼山古墳群(1)の稼山３期から４期にかけて、また寒風古窯址群(2)ではＡ類からＢ類にかけての特徴を有していると考えられる。陶邑の編年(3)に当てはめればＴＫ－209からＴＫ－217にかけての時期がこれにあたる。ところで、１号墳の石室は既に盗掘を受けていたものの、棺台石と鉄釘の一部はほぼ原位置を保っており、また、出土した須恵器は少なかったものの一時期におさまるなど、追葬が行われた形跡を確認することはできなかった。むしろ、遺物の全体的な出土量から考えれば、単一葬であった可能性が高い。したがって、須恵器の示す時期が古墳の築造時期となり、実年代では７世紀前半から中頃にかけてと考えられる。

次に２号墳については、出土した須恵器（第16図）のうちほぼ全形がわかるものは平瓶１点だけであり、他のものは全て小片で図面上でも完形に復元できるものは１点もなかった。特に杯類については破片すら出土しておらず、遺物から古墳の時期を特定することは困難である。そこで、石室の規模や構造を当地域の後期古墳のそれと比べれば、おおむね６世紀の後半から末頃にかけての築造と考えて良さそうである。そして、耳環が７点出土していることから、その後何度かの追葬が行われたものと推定される。

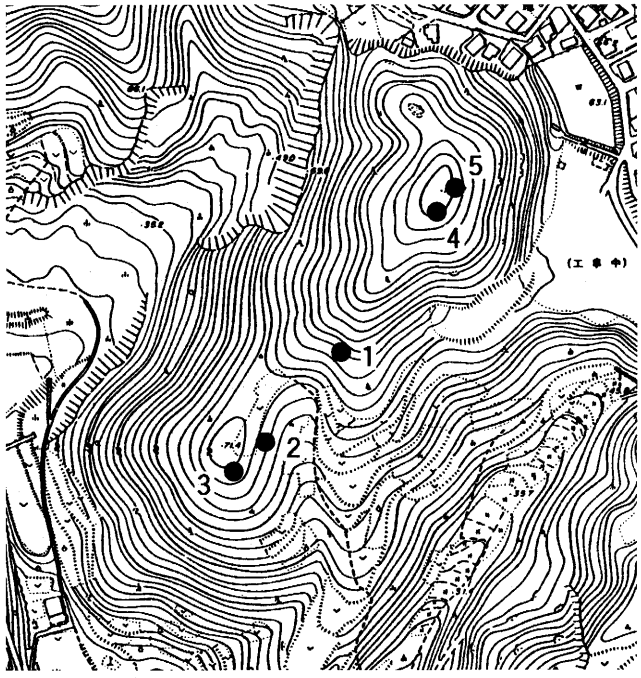
３号墳についても、出土した須恵器（第27図）のうち時期がほぼ特定できるのものは杯蓋が１点のみであり、遺物から築造時期を推定するのは困難と言わざるを得ない。この須恵器は、形態や調整の仕方などから、おおむね陶邑編年のＴＫ－43段階に当てはまると考えられるが、２号墳の場合は、１号墳と違い単一葬であった可能性は低いと思われるから、須恵器の示す年代が築造時期と即断することはできないであろう。むしろ、石室の規模や構造等から推定すれば、２号墳とほぼ同じ６世紀の後半から末頃にかけての時期が考えられ、これは先のＴＫ－43段階と矛盾しないであろう。

以上のことから考えて、茂浦１～３号墳の築造順序については、まず６世紀の後半から末頃にかけて、茂浦２号墳と３号墳があまり時期を異なることなく築造され、やや間をおいて７世紀前

半から中頃にかけて茂浦１号墳が築造されたものと思われる。

横穴式石室の規模

茂浦古墳群は、今回調査を行った３基とこの北西に位置する２基の、合計５基の古墳[4]から成る。造成工事の範囲外であった茂浦５・６号墳については、未調査のため詳しいことはわかっていないが、古墳と石室の規模についてまとめたのが表７である。これを見ると、茂浦２号墳は墳丘の直径で３号墳にやや劣るものの、石室規模においては全長９ｍ強、幅と高さはどちらも２ｍ程度と、ほぼ３号墳と同一の大きさを有している。これに対して他の３基は、石室の全長こそ明らかではないが、幅は約１ｍ、高さは1.4ｍ前後と、小さいながらもそれぞれ相似た大きさを示している。したがって、石室の規模からすれば、茂浦古墳群は大型石室を持つタイプと小型の石室を有するタイプに分けることができる。また、石室の大きさが変わればそれに使用する石材の大きさも当然変わってくるが、大型石室の奥壁は一枚石の巨岩で構成されているのに対し、小型の石室は小さな面積にもかかわらず奥壁に２～３枚の石を使用しているなど、石材の使用法にも違いが見られる。



No.	古墳名	直径	横穴式石室			石室主軸方向
			全長	幅	高さ	
1	茂浦１号墳	8.4	5.5	0.9	1.4	N20° W
2	茂浦２号墳	15.0	9.3	2.2	2.0	N36° W
3	茂浦３号墳	16.0	9.1	2.0	2.1	N49° W
4	茂浦５号墳	－	－	0.9	1.3	N41° W
5	茂浦６号墳	－	－	1.1	1.5	N31° W

数値の単位は全てｍ、直径・全長は復元値

第７表　茂浦古墳群一覧表

ところで、茂浦２・３号墳のように、無袖でありながら石室全長が９ｍを越え、その幅・高さも２ｍに達するような大型石室墳は、県内でもほとんど知られていない。もちろん、石室の全長が10ｍを越える古墳は、備中南部を中心として県下に分布しているが、それらのほとんどは石室に袖を有し、玄室と羨道の区別が明確なものばかりである。無袖で大型石室墳と呼べるものとしては、倉敷市児島の琴海１号墳[5]や久米町のコウデン２号墳[6]などがあるが、その石室規模としては、前者が全長約7.5ｍ、幅2.1ｍ、高さ1.9ｍで、後者が全長約8.3ｍ、幅1.8ｍ、高さ1.8ｍと、いずれも茂浦２・３号墳のそれを上回るものではない。このように、無袖の横穴式石室で茂浦２・３号墳に匹敵する規模を有する古墳は、今のところ類例が少ないと思われる。

横穴式石室の構造と特色

茂浦１号墳の石室は、現存長4.7ｍと小型のものであったが、羨道部分の幅が玄室の幅よりも広くなる珍しいタイプのものであることが明らかとなった。もっとも、その幅の差は片側で10～15cmとわずかなものであり、また、根石より上の側壁には段が見られないことなど、確実な例

とするにはやや難があるかもしれない。しかし、両側壁の根石がほぼ同じ位置でずれていることや、玄室に接する羨道部の根石が、どちらも玄室の根石よりも若干高いものを使用しているといった構造上の特徴から、玄室か羨道かは別として、石室構築の際に何らかの意識が働いていたことは確かであろう。

今のところ、羨道の幅が玄室の幅よりも広くなるタイプの石室を持つ古墳はほとんど知られておらず、県内では矢掛町奥迫古墳群の中にわずかに１基(7)確認できるだけである。未調査のため詳しいことはわかっていないが、この古墳の場合片側だけが広くなるタイプの石室であり、また、逆についた袖は30cm程の明瞭な屈曲部を呈しているなど、やや茂浦１号墳とは様相が違うようである。石室の平面プランが類似するものとしては、総社市長砂２号墳(8)、福山市の曽根田白塚古墳・猪の子１号墳(9)等の例があるが、これらはいずれも横口式石槨と呼ばれる石室で、畿内の影響のもとに成立したものと考えられている(10)。築造時期も全て７世紀後半頃であり、茂浦１号墳との接点を見いだすことは困難であろう。したがって、このタイプの石室を築くに至った理由については、現段階では残念ながら手がかりがなく、今後の資料の増加を待って検討したい。

次に、茂浦２・３号墳について見てみよう。両古墳が、石室全長９ｍを越える大型石室墳であることは既に述べた。このように石室が長いためか、どちらの古墳も石室の掘り方に収まりきらずにその先の自然斜面にまで延びていた。したがって、石室の前端部分では側壁の根石が斜面に沿って低くなっているのがわかる（第13・26図）。茂浦２・３号墳の場合は、掘り方の底面そのものが既に奥壁から入り口に向かって緩やかに傾斜しているが、それでも掘り方の外側の自然斜面にまではその傾斜が及ばないため、石室前端部には土を置き、かさ上げを行って床面を作っていた。

これと全く同様な方法で石室を構築しているものに、先の琴海１号墳がある。この古墳の築造時期は６世紀末頃と考えられており、時期をほぼ同じくして離れた場所に、ほぼ同程度の規模の石室が、同様な方法で築かれているのは興味深い。そしてこのことは、築造途中で石室の規模を拡大したために石室が掘り方に収まらなくなったのではなく、もともとの築造計画に則ったものであったことを示している。

副葬品

今回の調査で出土した遺物は、３基の古墳を合わせても整理用コンテナ４箱と非常に少ないものであった。特に茂浦２・３号墳については、その石室規模から考えればほとんどが盗掘等により持ち去られたと考えざるを得ない。しかし、遺物の全体量は少ないものの、２号墳では須恵器・土師器・鉄器・馬具・玉類・耳環など一応の種類はそろっており、築造当時の副葬品の多さが想像できる。３号墳についても一組の馬具が出土しており、副葬品についてはその石室規模にみあう状況であったと思われる。

茂浦１号墳では、石室内の堆積土からであるが、鉛ガラスの丸玉が１点出土した。県内において古墳から鉛ガラスが出土した例としては、山陽町用木５号墳(11)、津山市寺田古墳(12)などがあるが(13)、これらはいずれも勾玉であり、本墳のように直径、長さともに約１cmの丸玉となると

あまり知られていないようである(14)。また、鉛ガラスの国産化は７世紀末頃と考えられているので(15)、この丸玉は舶載品あるいは舶載のガラス原料を使用して作られたと考えて良いだろう。その供給元となった集団あるいは地域については、現段階での判断は困難で、今後類例の増加や鉛同位体比の測定などの自然科学的分析を行うことにより解明されることを期待したい。

古墳群の成立

茂浦古墳群について、個々の古墳をその立地から見てみれば、１号墳がやや離れているものの、１・５・６号墳が同一丘陵上に位置し、そこから南西方向へ低く延びる丘陵に２・３号墳が位置しているのがわかる。したがって、丘陵を単位としたグループ分けは、先の石室の規模によるグループ分けと対応しており、このことは、茂浦古墳群の成り立ちを考えるうえで興味深い。すなわち、立地により分けられたグループ間で石室の規模にかなりの差があるとすれば、それは当然古墳を造営した集団の系譜なり性格にかかわってくるからである。ところが、石室の開口方向に着目すれば、数値にある程度のばらつきはあるものの、全体として南南東から南東方向へ開口しているようである。特に１号墳については、眼下に平地を見下ろせる南西方向とは違い、丘陵側である南南東に開口していることが指摘でき、少なくとも葬送儀礼に関しては、何らかの共通意識のもとに古墳群が築造されたと考えて良いだろう。

茂浦５・６号墳が時期的にみて２・３号墳に続くものか、あるいは１号墳とほぼ同じであるのかは不明であるが、いぜれにせよ石室規模からすればその間には大きな隔絶があるのであって、周辺に２・３号墳に続く石室規模を有する古墳が確認されていない(16)以上、７世紀を前後する時期に、茂浦古墳群を造営した集団に何らかの大きな社会的変化があったと考えることができよう。

註（１）　村上幸雄ほか『糠山遺跡群Ⅱ　古墳・墳墓編』久米開発事業に伴う文化財調査委員会　1980年
（２）　山磨康平「寒風古窯址群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告27』1978年
（３）　田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981年
（４）　茂浦４号墳については、確認調査により自然の露岩であった可能性が高く欠番とした。
（５）　山磨康平・福田正継「琴海１号墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告36』1980年
（６）　註（１）文献
（７）　奥迫古墳群には16基以上の古墳が存在するが、このタイプのものは１基しか存在していない。
（８）　『総社市史　考古資料編』総社市史編さん委員会　1987年
（９）　『福山の文化財』福山市教育委員会　1984年
（10）　『図説　発掘が語る日本史』５中国・四国編　新人物往来社　1986年
（11）　神原英朗『用木古墳群』山陽町教育委員会　1975年
（12）　中山俊紀「寺田古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第22集』津山市教育委員会　1986年
（13）　どちらも報告書中では鉛ガラスとの記述はないが、その可能性が高いという。総社市教育委会高橋進一氏の御教示による。
（14）　本文脱稿後、茂浦２号墳出土のガラス玉（第22図72）の比重を測定する機会を得た。それによれば、5.17g/cm^{3}と重く、また色調も鮮緑色を呈していることから、鉛ガラスである可能性が高い。
（15）　肥塚隆保「古代ガラスの材質」『古代に挑戦する自然科学』クバプロ　1995年
（16）　『倉敷市文化財分布図』によれば、ここより約250ｍ南東の丘陵上に石室長8.9ｍの大江古墳が記載されているが、既に破壊・消滅しており、確認できない。

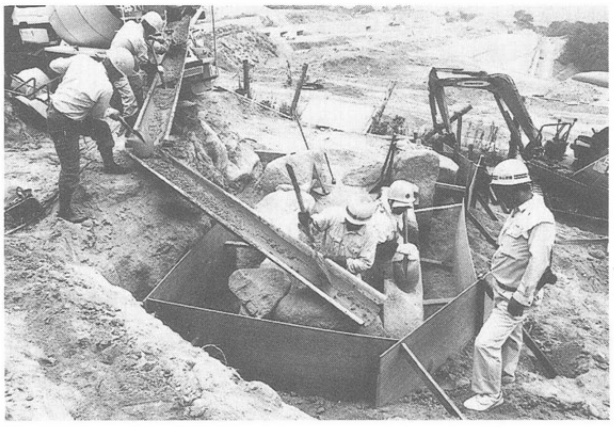
付章　茂浦１号墳の復元整備

第２章調査の経緯でも触れたように、古墳の保存については当初、茂浦２号墳あるいは３号墳の公園内への移築を前提として小松建設との協議を行っていた。ところが、詳しい現地測量の結果、１号墳が残地森林として残る部分に近接していることが明らかになり、移築保存の代わりにその残地森林に１号墳を取り込むことで保存を行うこととなった。ただし、後世の破壊のために石室は不安定な状態で崩落の危険もあったため、また、遺跡の活用といった側面も含めて、発掘調査後に古墳の復元を行い、併せて周辺を公園として整備することになった。以下、その概要について述べたい。

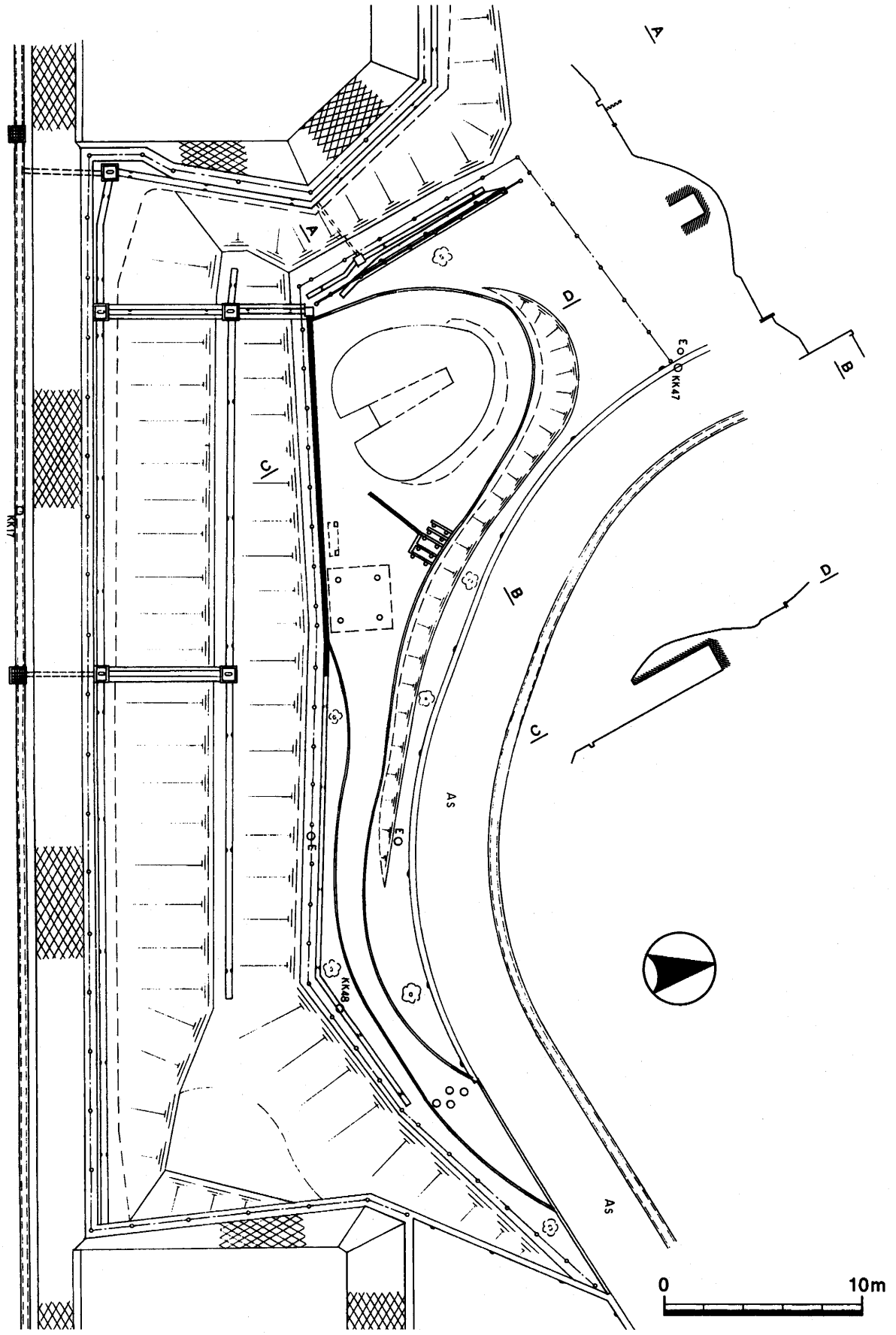
まず最初に、崩落の危険のあった石室の積み直しを行った。奥壁及び側壁の根石より上の部分を一旦解体し、根石の角度を調整したうえで再度側壁を積み上げ、最後に天井石を架けた。側壁の石材が存在しない部分は、内側からソイルセメントを充填した。側壁の外側はコンクリートで固め、その一部を天井石にかけることで崩落の危険がないようにした。また、石室前端部の天井石が１枚既に消失していたので、天井の高さが同じになるようコンクリートで作り、表面はソイルセメントで仕上げた。

墳丘については既に天井石より上の部分が削平されていたため、残存する周溝の立ち上がりの角度を参考に復元した。盛土には真砂土を用い、表面10cmはソイルセメントとした。周溝の外側には園路を設け、古墳の周囲を自由に歩けるよう配慮した。また、園路や墳丘、床面など連続する部分は一体感を出すため、全てソイルセメントで統一した。公園としては非常に面積が狭いものであったが、東屋及び古墳の説明板を設け、古墳公園として最低限の施設を確保した。

・施工期間　平成6年9月20日～12月31日
・設　　計　（株）開発技研コンサルタント
・施行業者　（株）ウエマツ　（株）山都屋　神戸企業（株）
・費用負担　小松建設工業（株）



１号墳の復元作業



第35図　古墳公園平面図

図　　版

１．調査前の状況

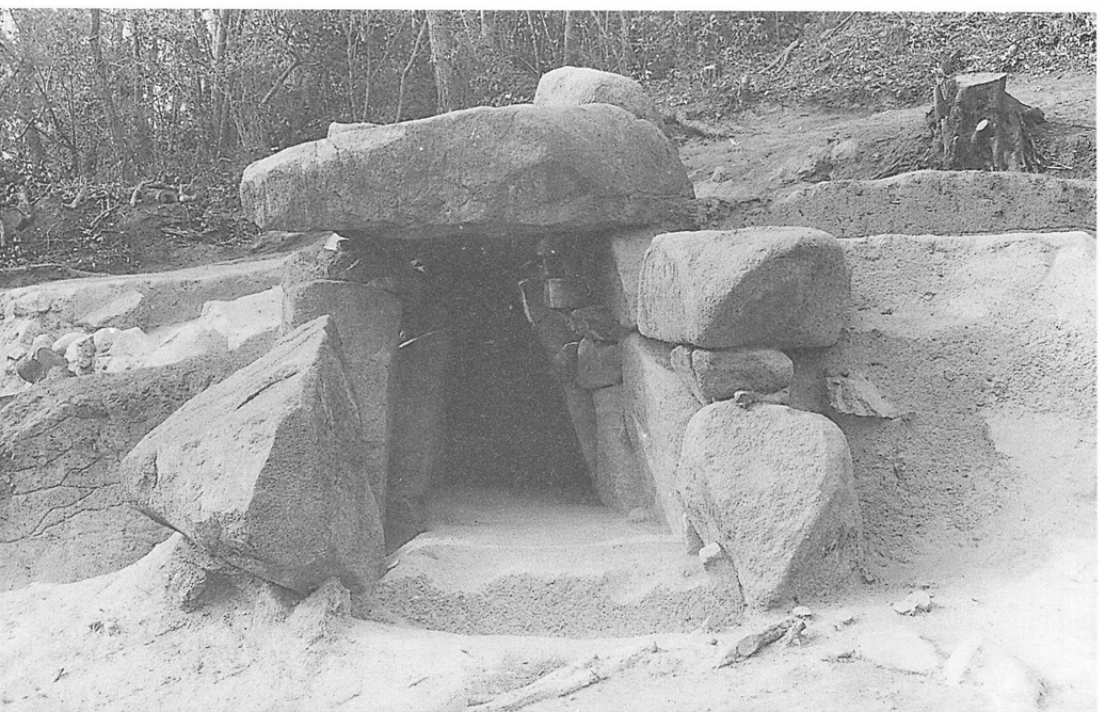
２．古墳全景
（南から）

３．古墳全景
（東から）

図版２　茂浦１号墳

１．古墳全景
（北から）

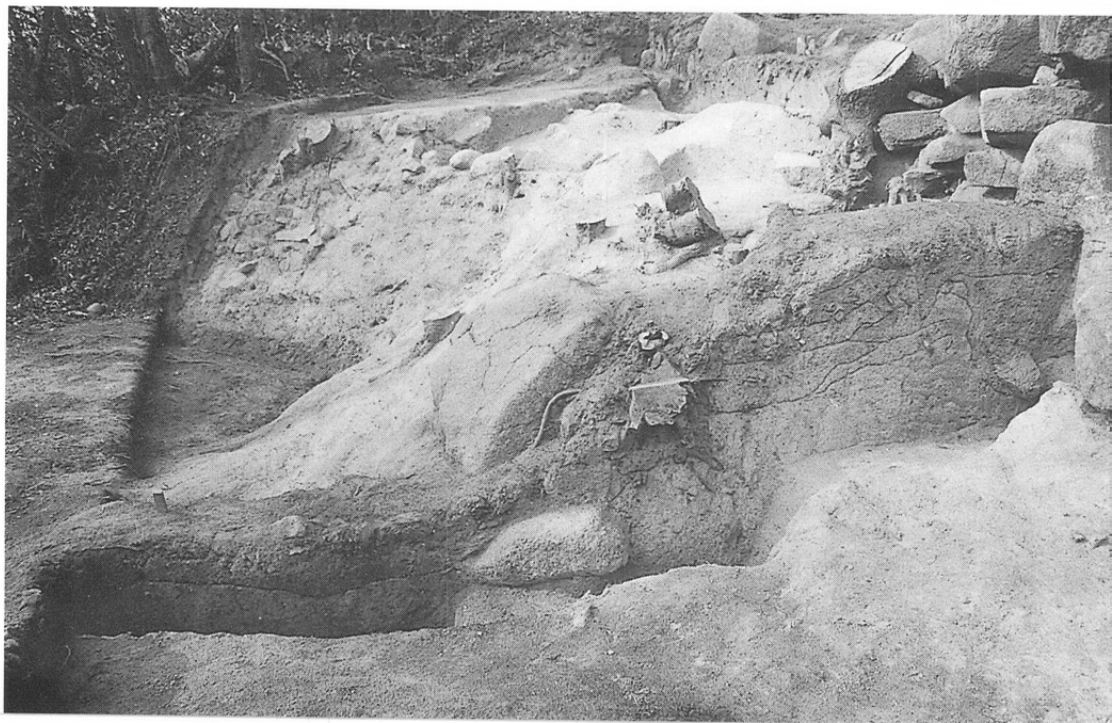
２．古墳全景
（西から）



３．石室入り口

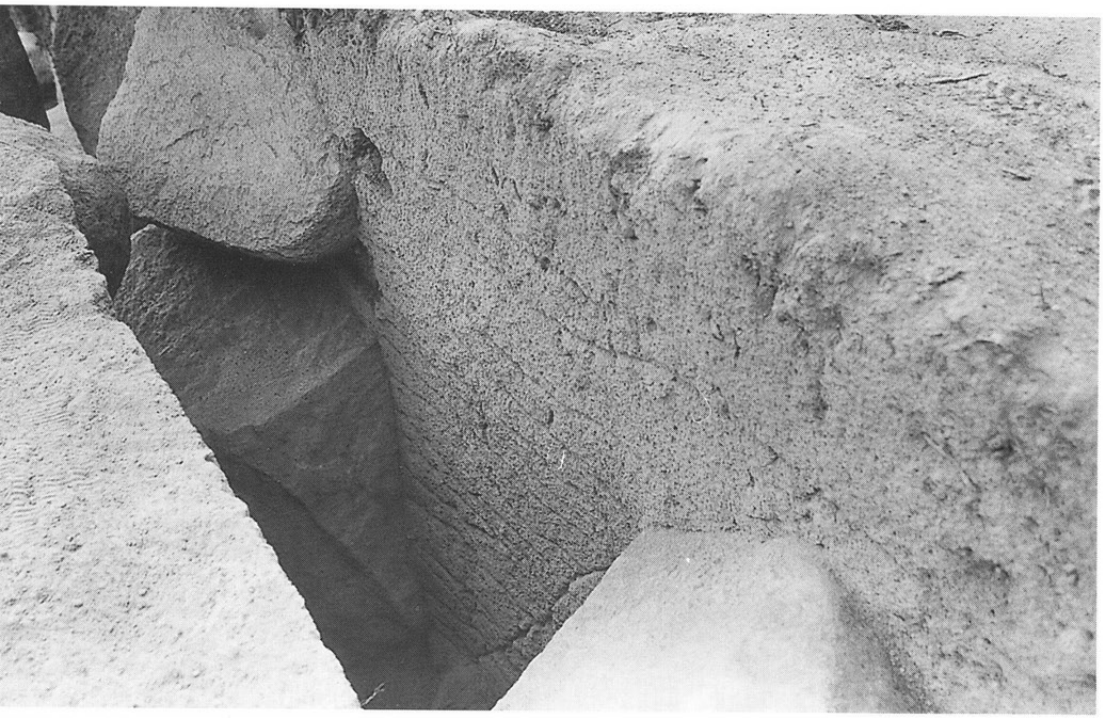
1．遺物出土状況

2．土層断面
（東側）

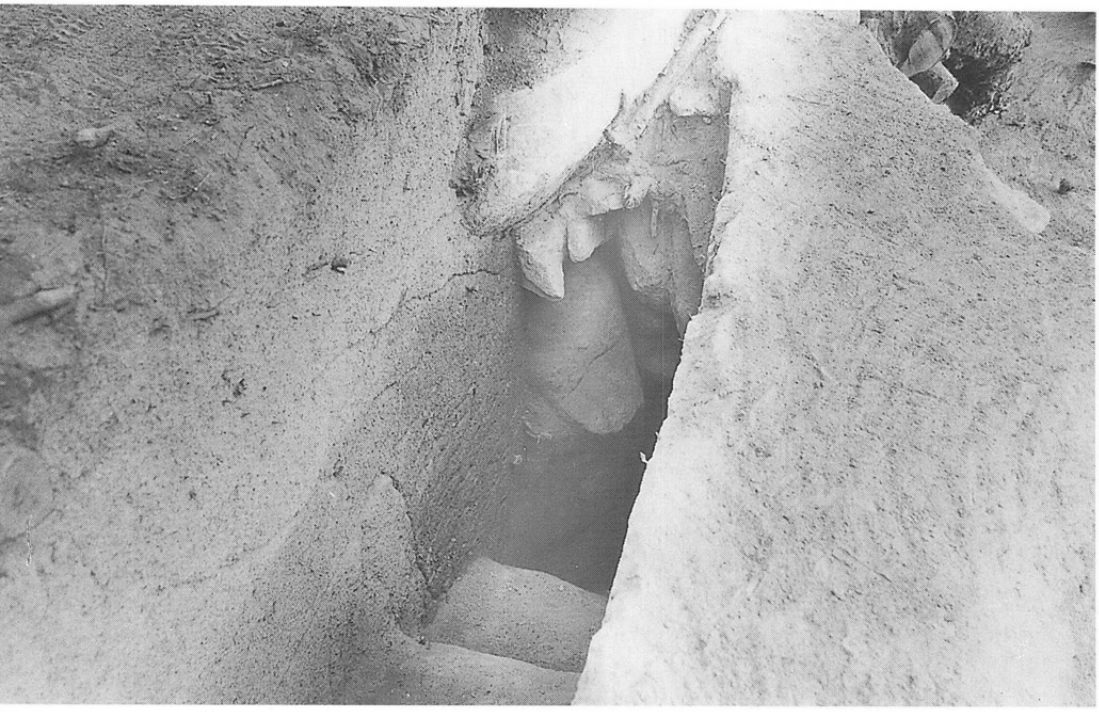


3．土層断面
（西側）

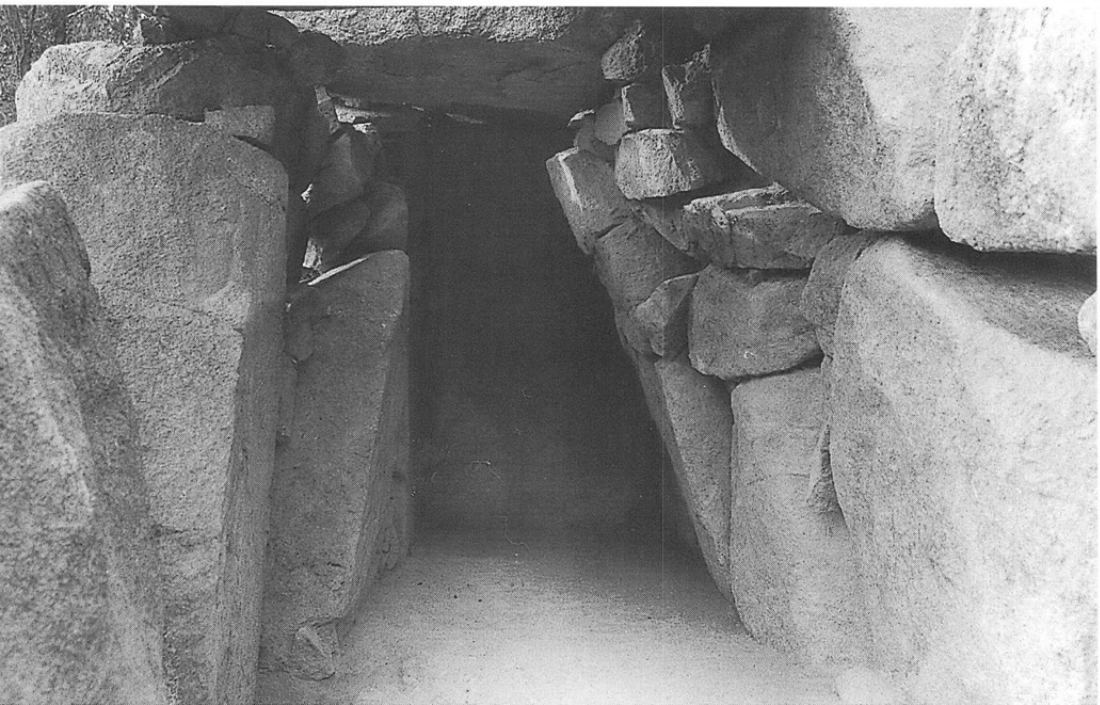
図版 4　茂浦 1 号墳



1．東側壁付近の築成状況

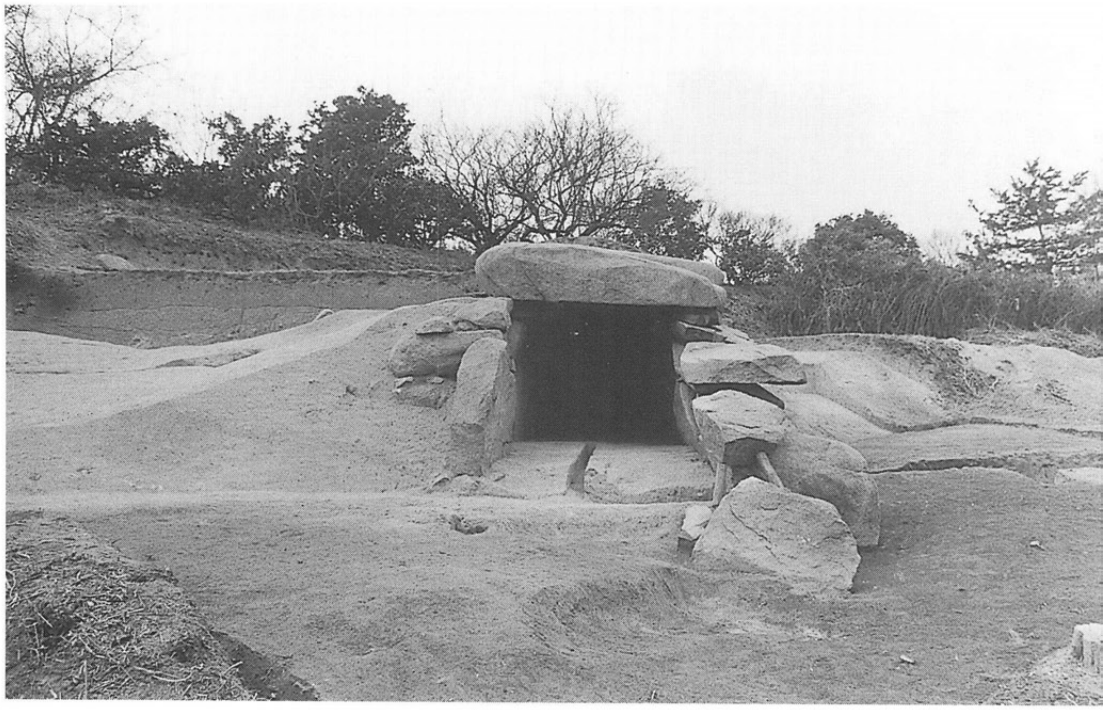


2．奥壁付近の築成状況



3．横穴式石室

１．調査前の状況



２．墳丘検出状況
（南から）

３．墳丘検出状況
（東から）

図版6　茂浦2号墳

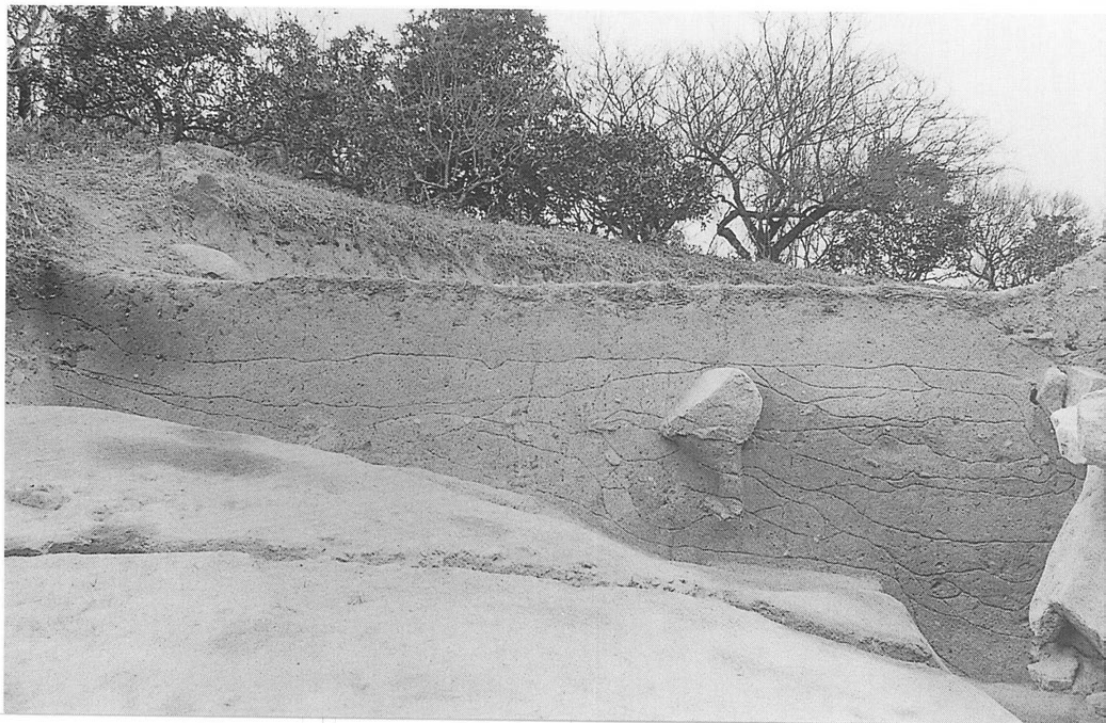
1．周溝検出状況
（北から）

2．調査終了後
（南から）

3．調査終了後
（東から）

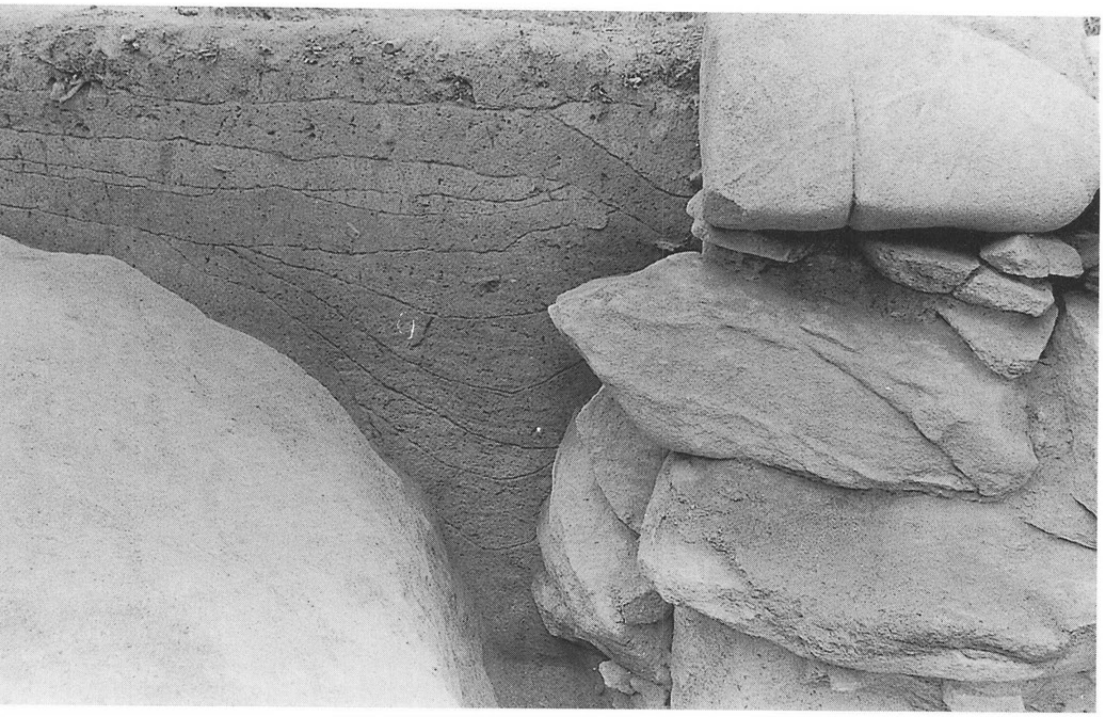
１．調査終了後
（北から）

２．調査終了後
（西から）

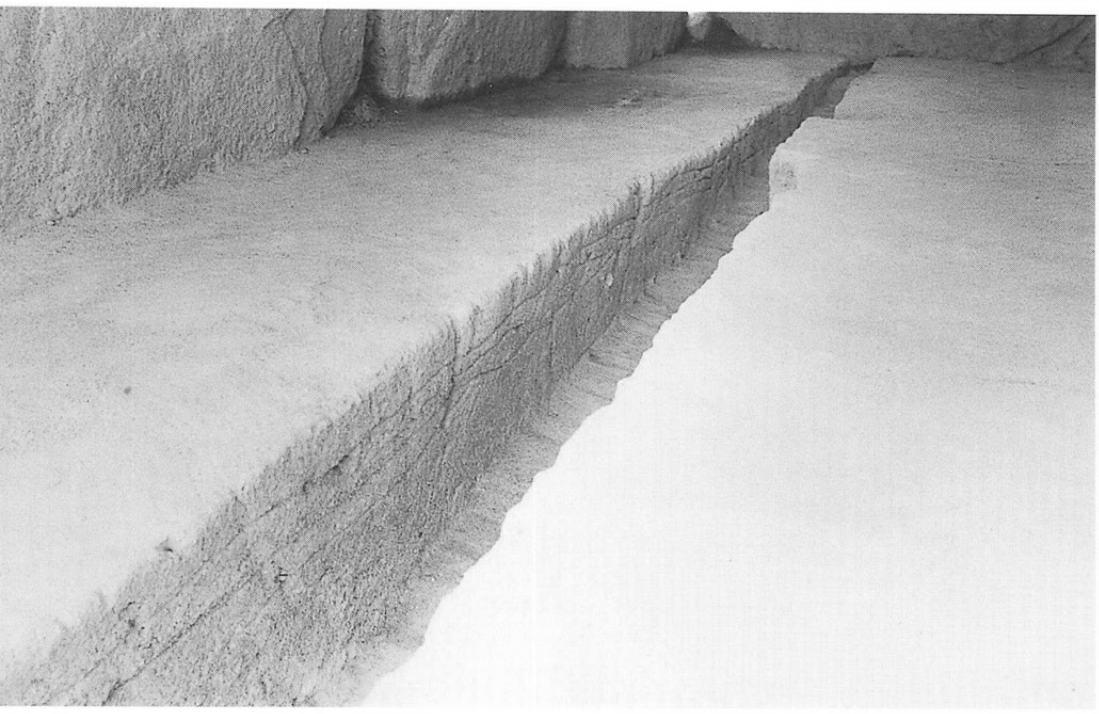


３．土層断面
（西側）

図版8　茂浦２号墳



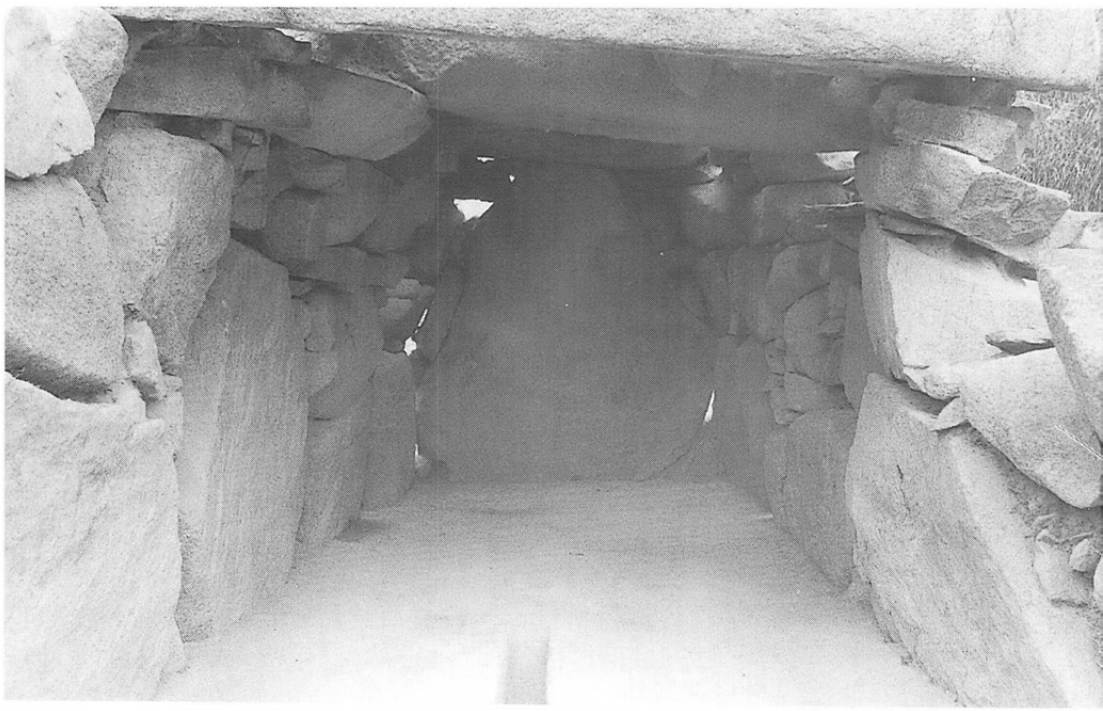
1．奥壁付近の築成状況



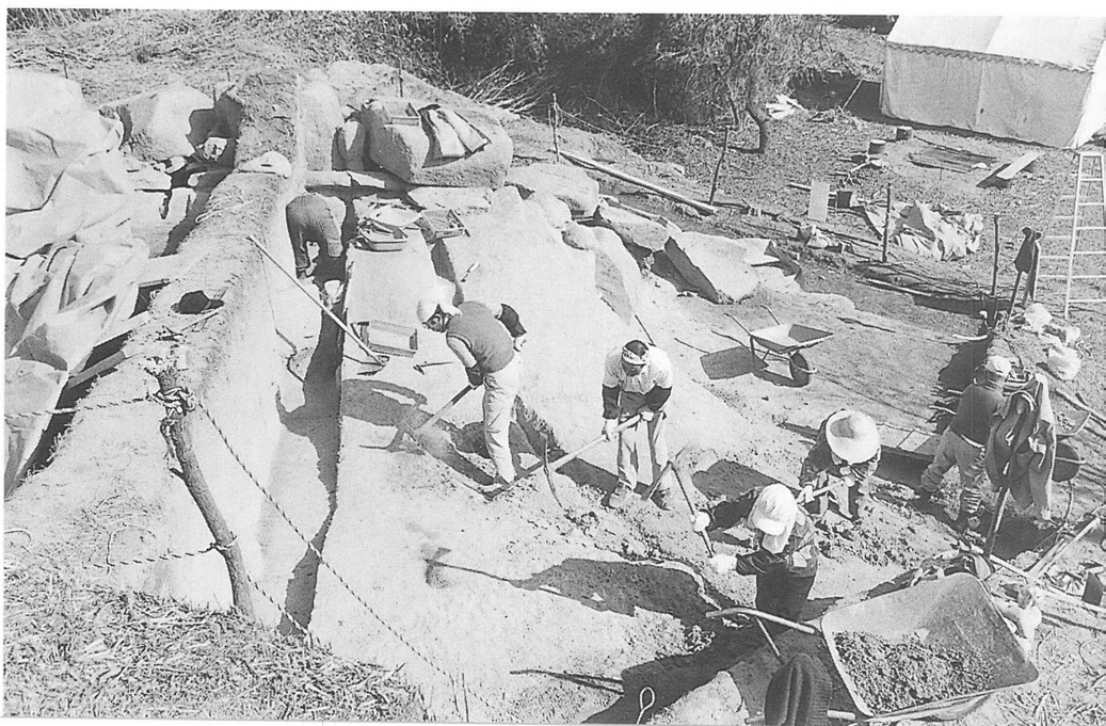
2．石室床面の築成状況

3．遺物出土状況（1）

１．遺物出土状況（２）

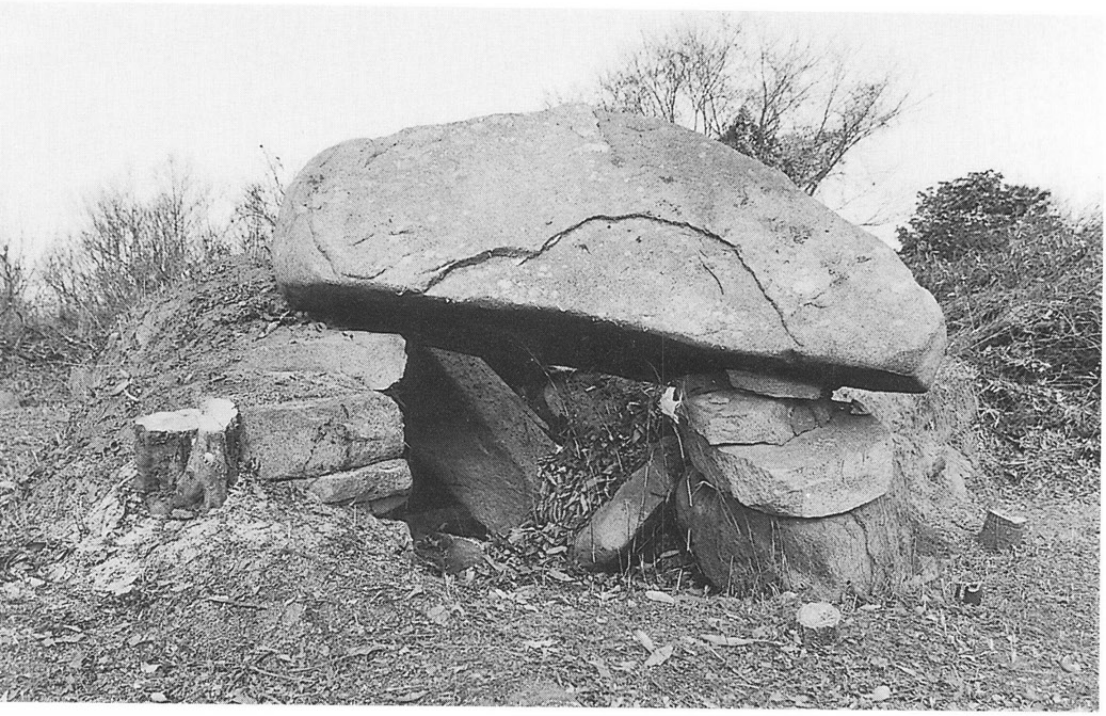


２．横穴式石室

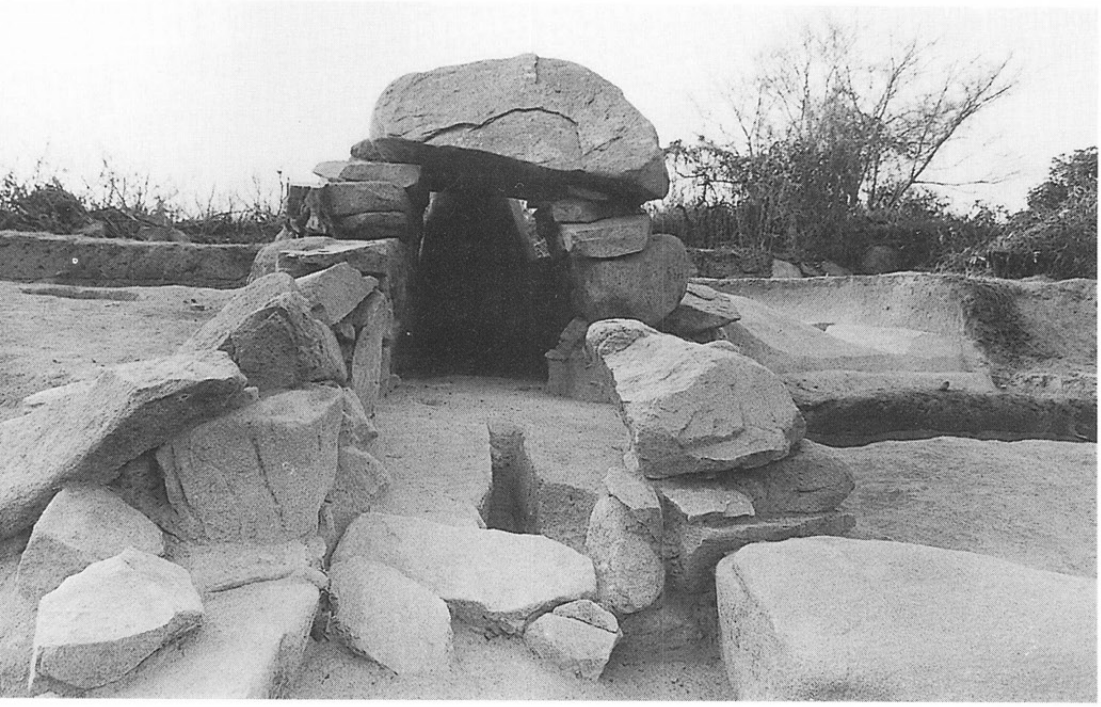


３．調査風景

図版10　茂浦３号墳



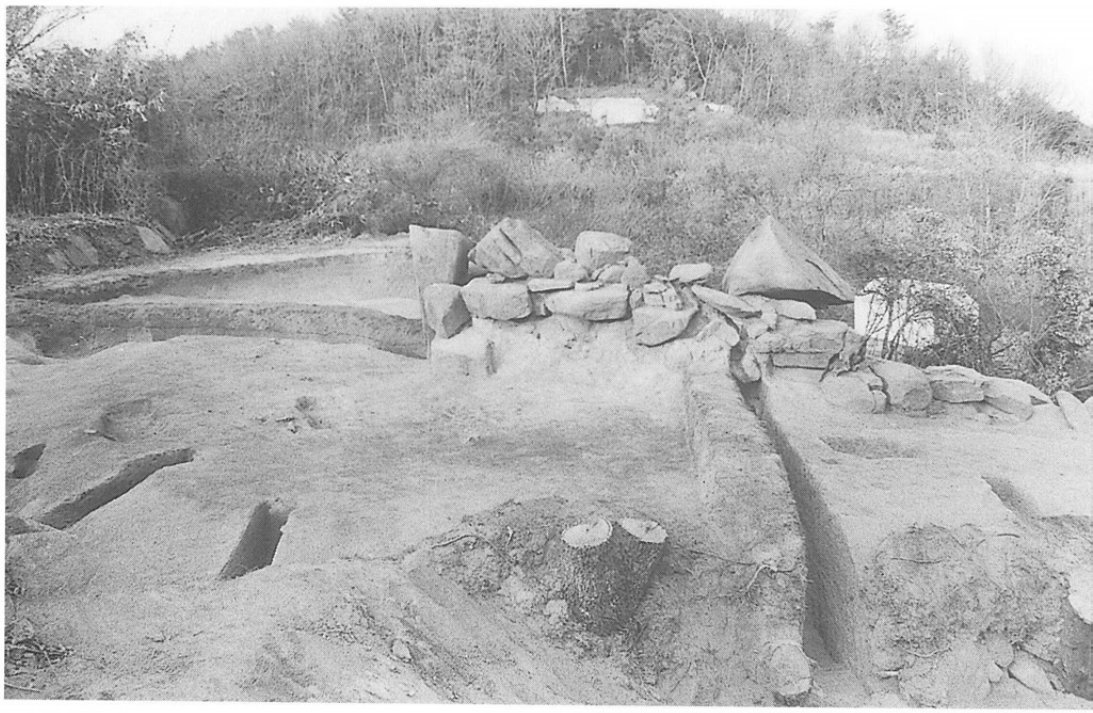
１．調査前の状況



２．調査終了後
（南から）

３．調査終了後
（東から）

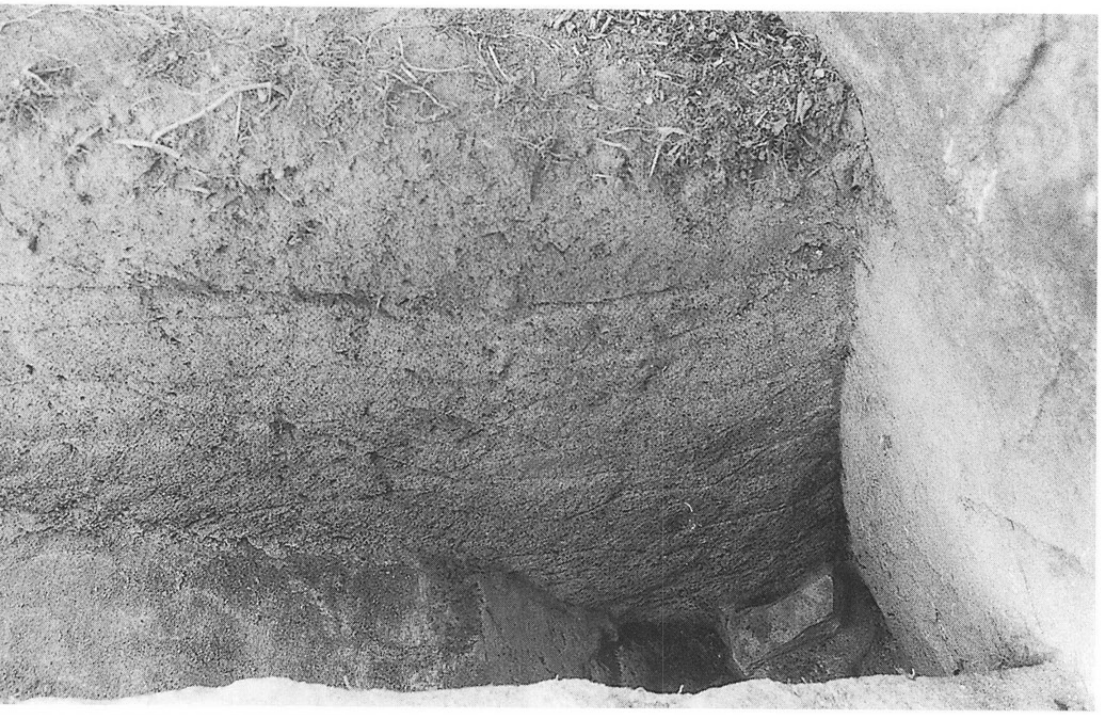
１．調査終了後
（北から）



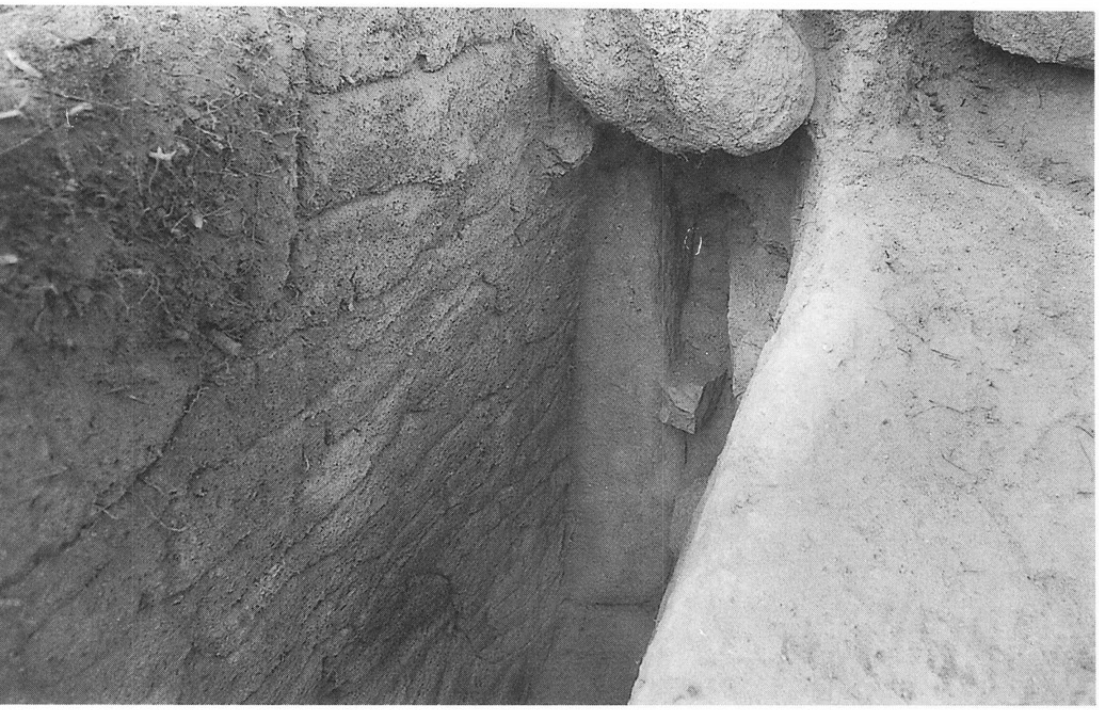
２．調査終了後
（西から）

３．土層断面
（西側）

図版12　茂浦３号墳

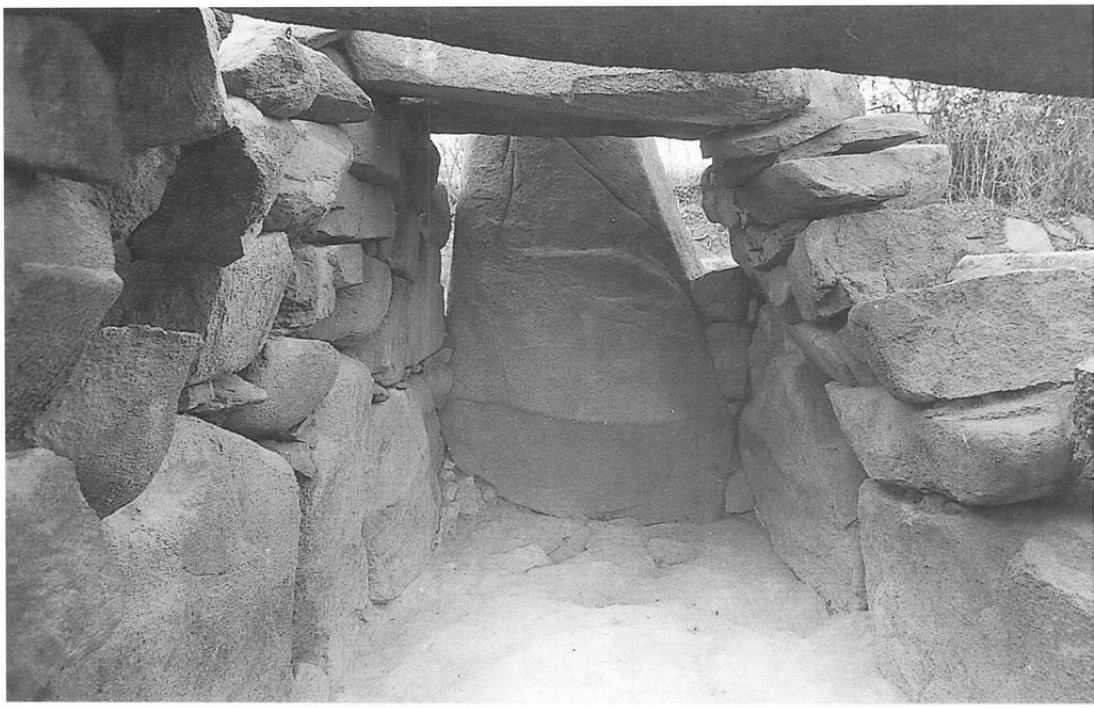


1．奥壁付近の築成状況

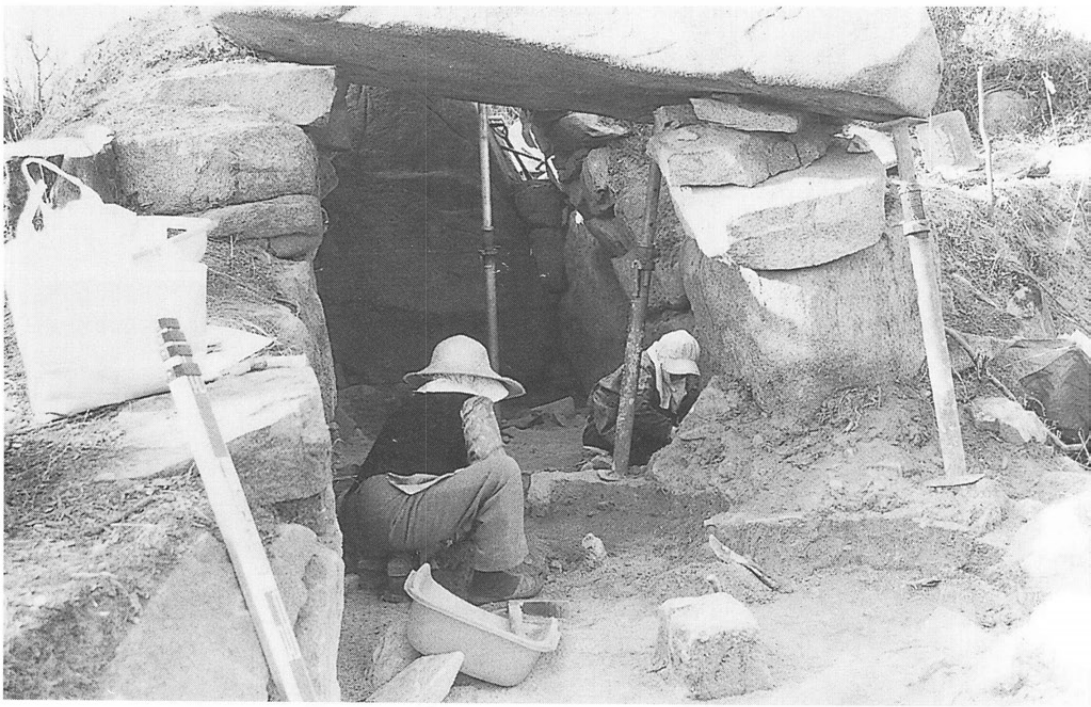


2．西側壁付近の築成状況

3．遺物出土状況



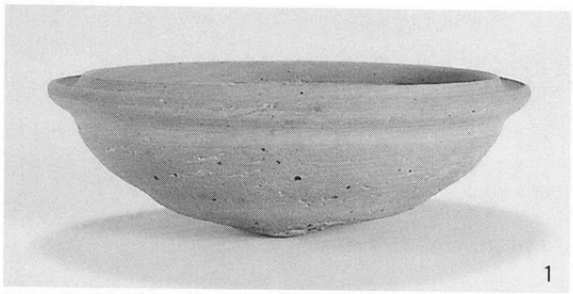
１．横穴式石室



２．調査風景

３．現地説明会

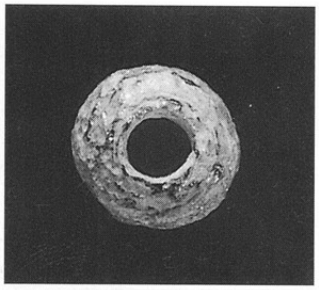
図版14　1号墳出土遺物

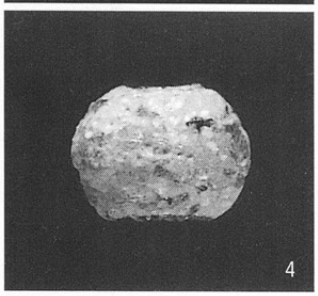

1

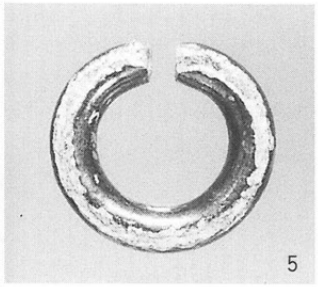
2

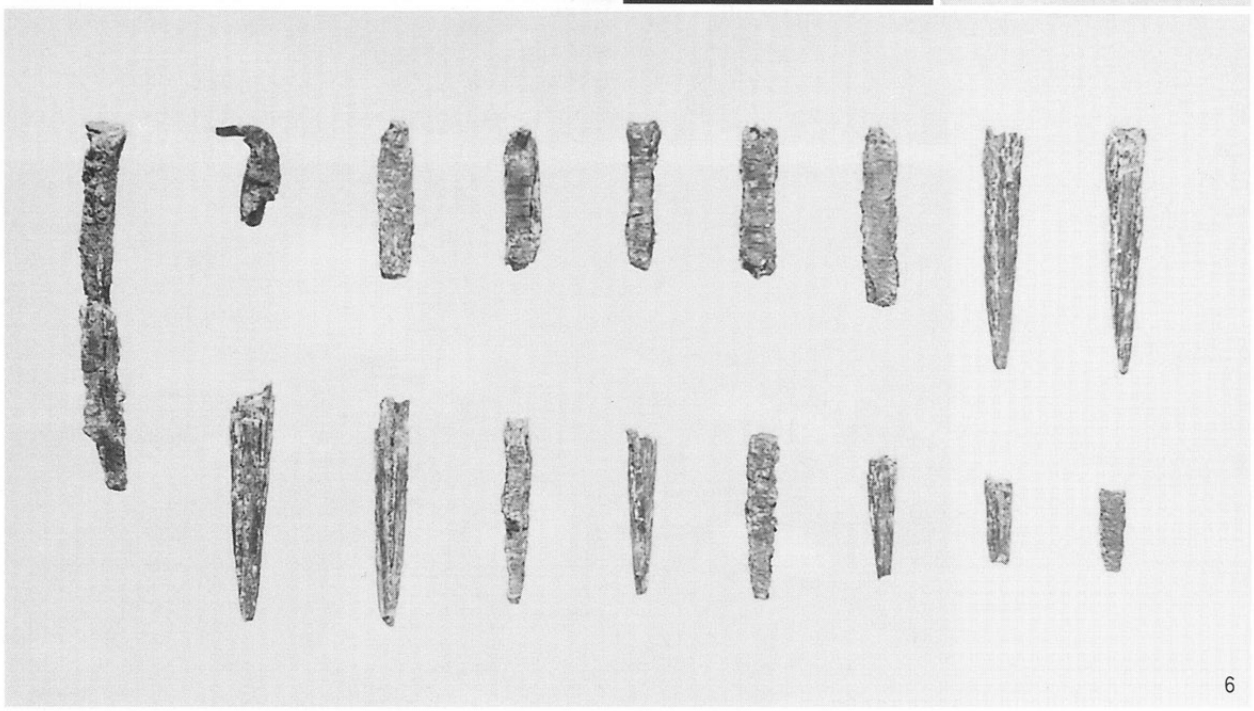
3

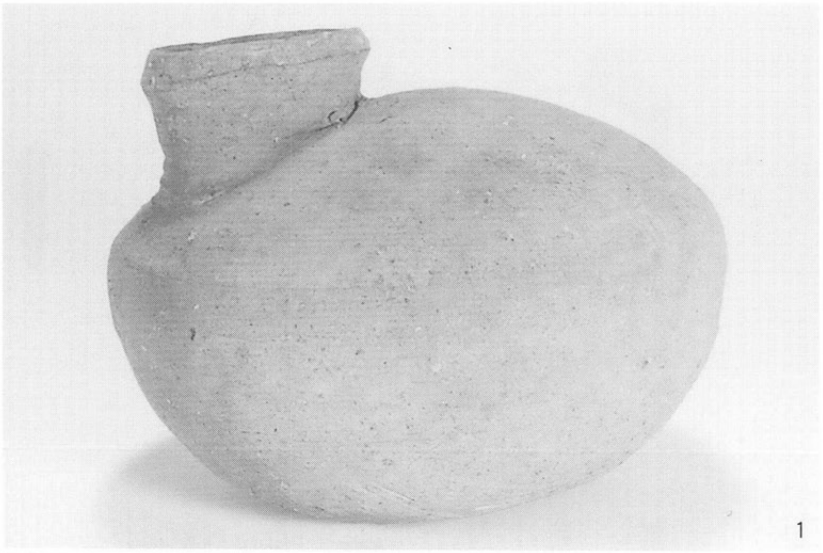
1．須恵器杯身
2．須恵器杯身
3．須恵器高杯
4．鉛ガラス玉
5．耳　環
6．鉄　釘



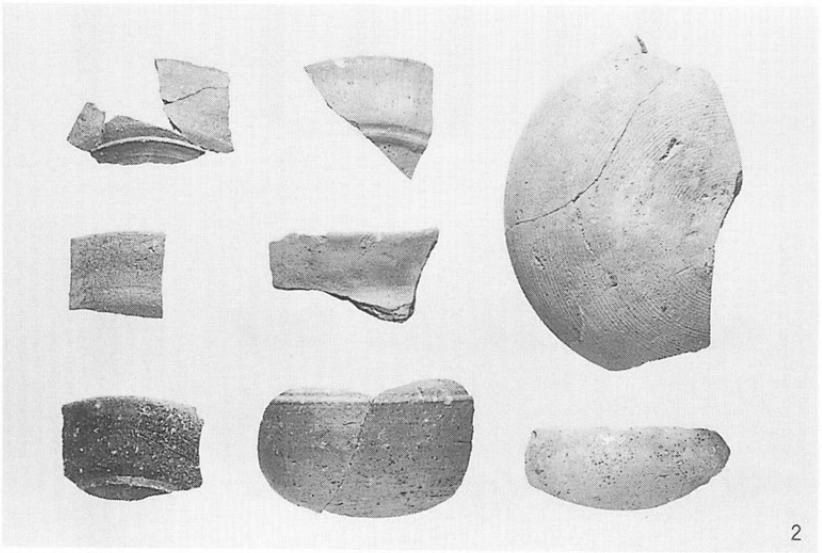

4


5


6



1

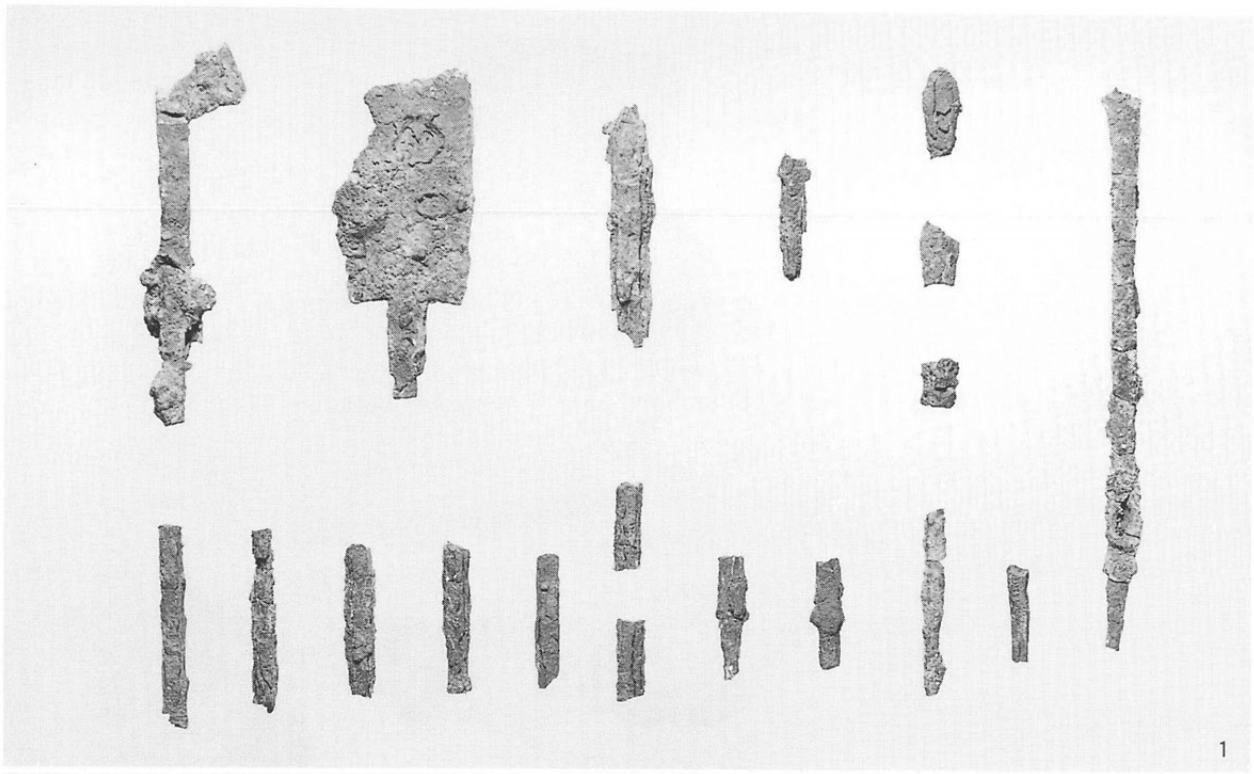


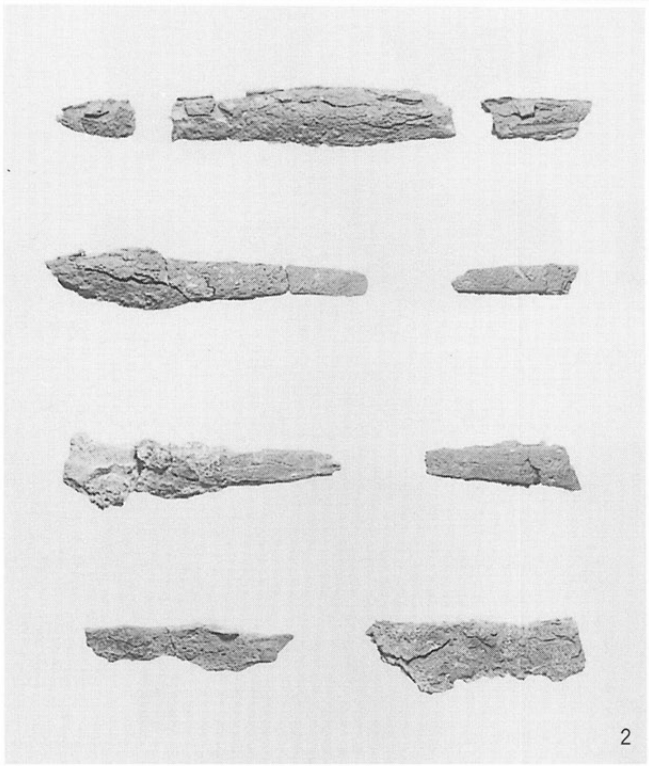
2

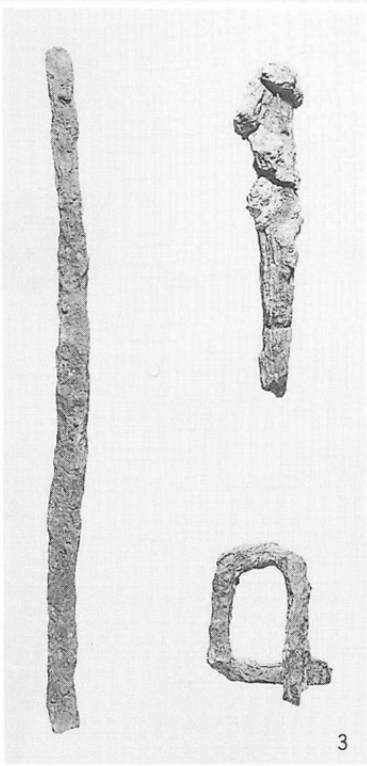
１．須恵器平瓶
２．須恵器・土師器
３．鉄　鏃（１）

3

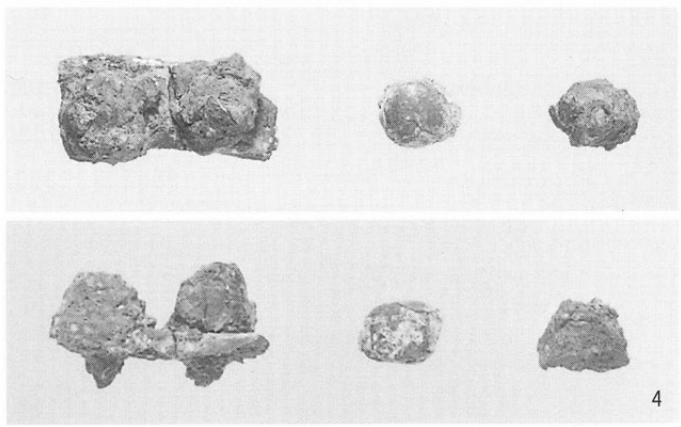
図版16　２号墳出土遺物（２）

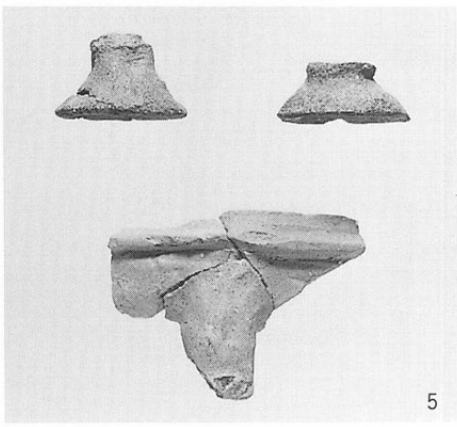

1

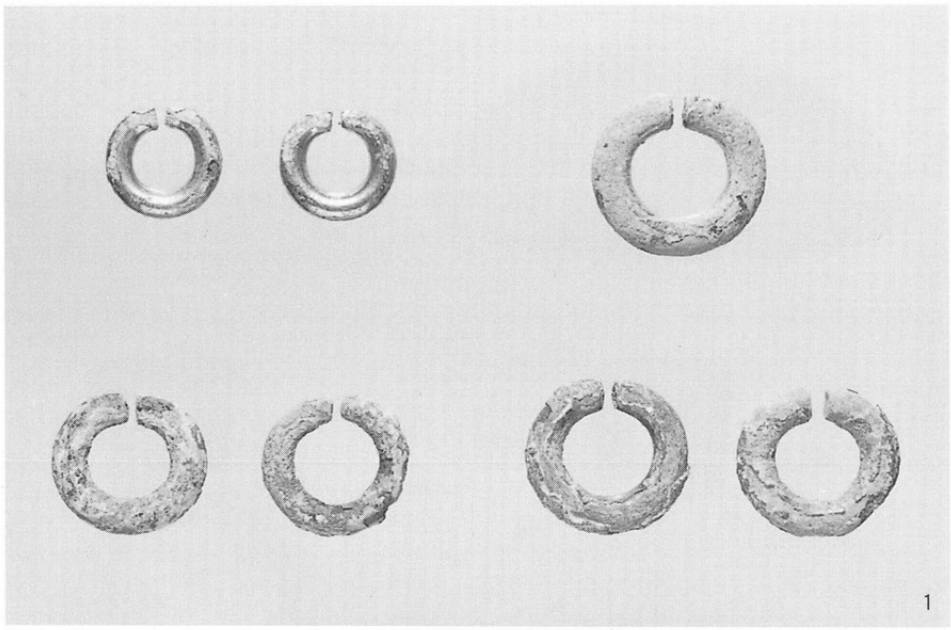

2


3

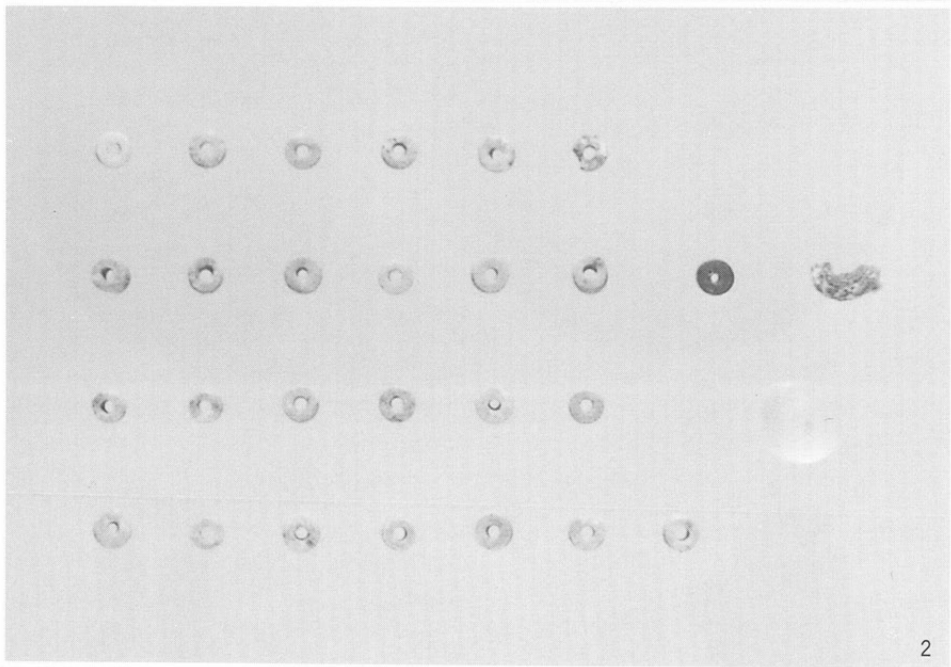
1．鉄　鏃（２）
2．刀子
3．その他の鉄製品
4．馬　具
5．古墳に伴わない遺物


4


5

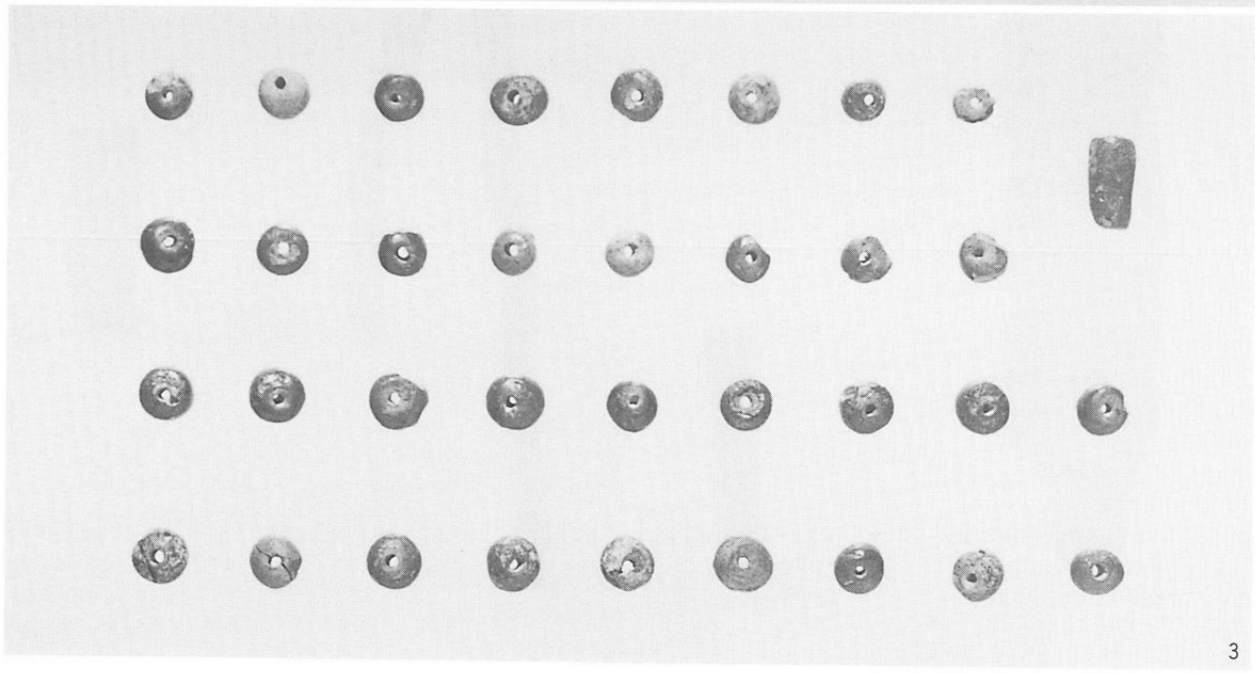


1



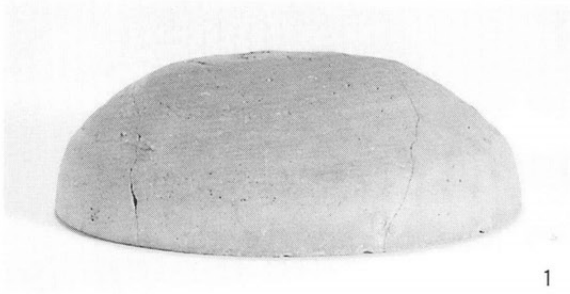
2

1．耳　環
2．滑石製臼玉・
　水晶玉・ガラス玉
3．土製錬玉

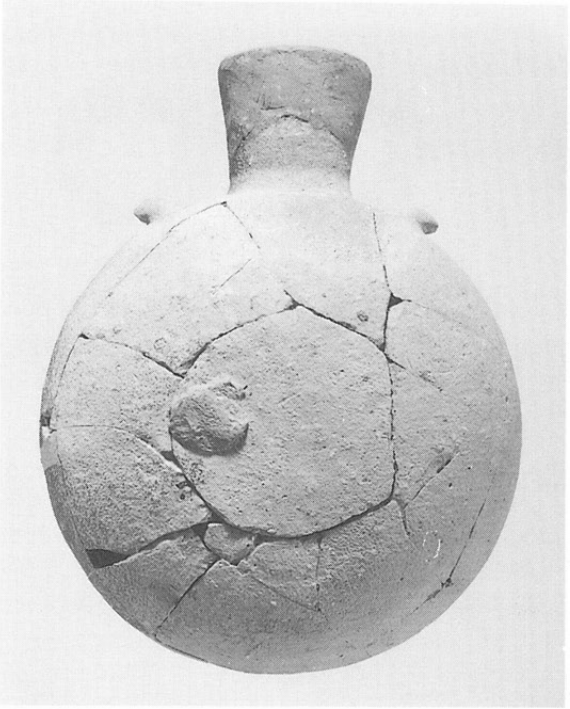


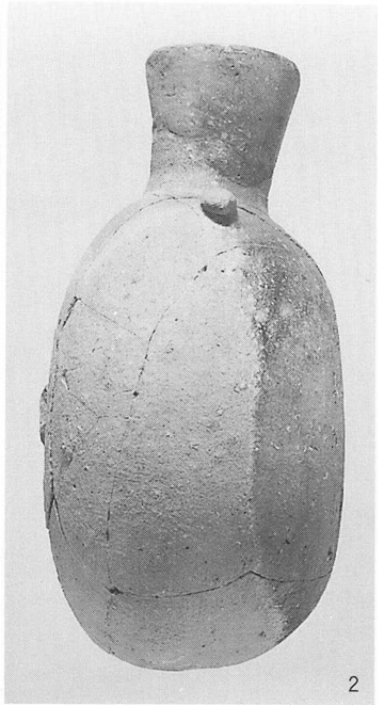
3

図版18　３号墳出土遺物（１）



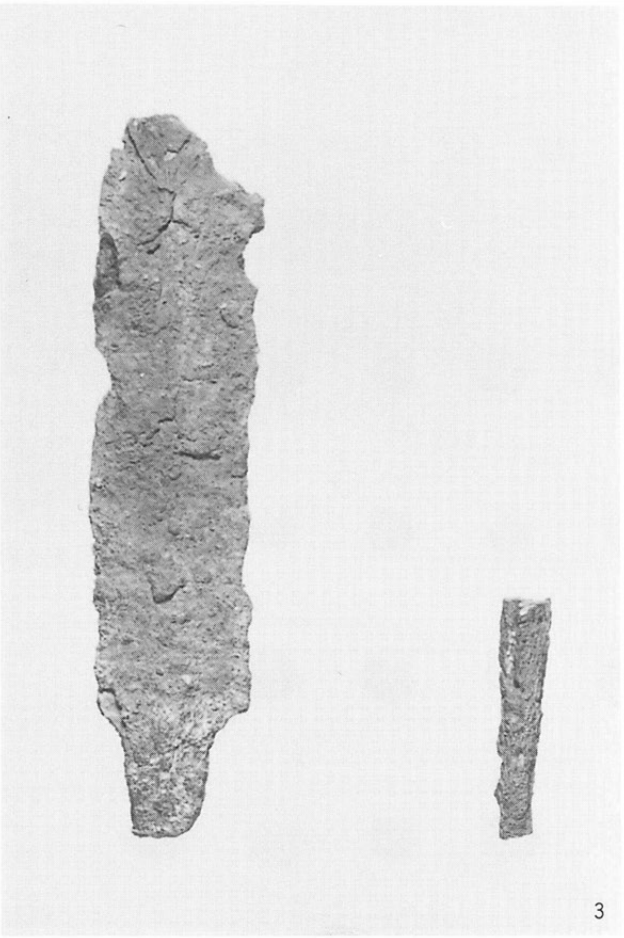
1





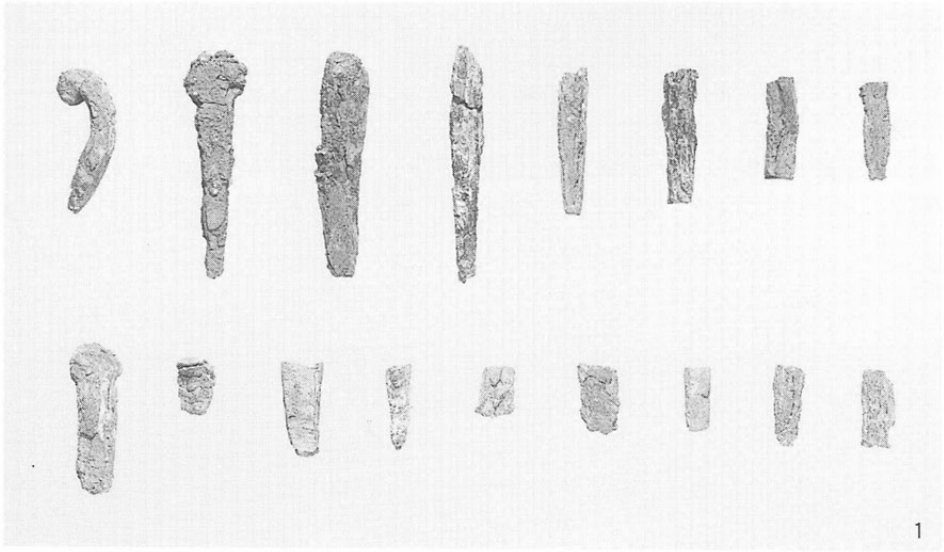
2

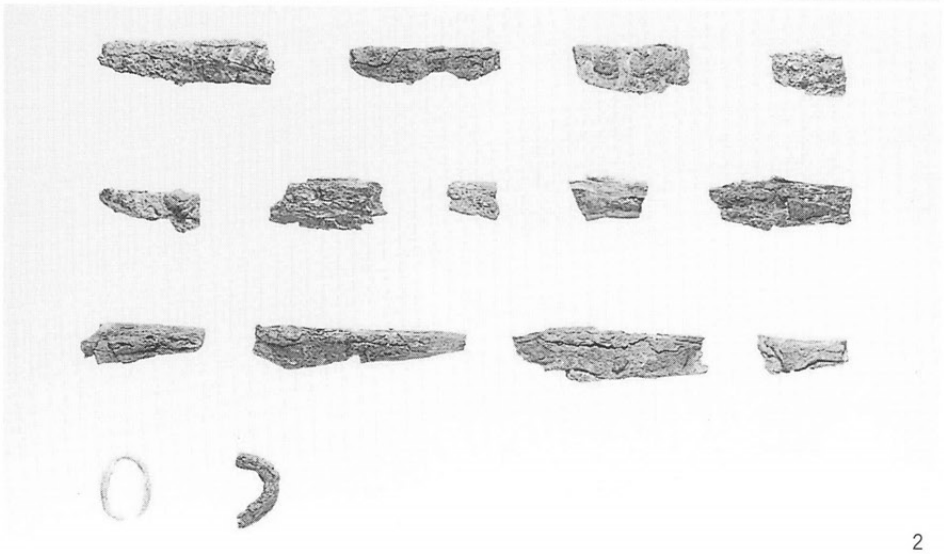
1．須恵器杯蓋
2．須恵器提瓶
3．鉄　鏃
4．馬　具

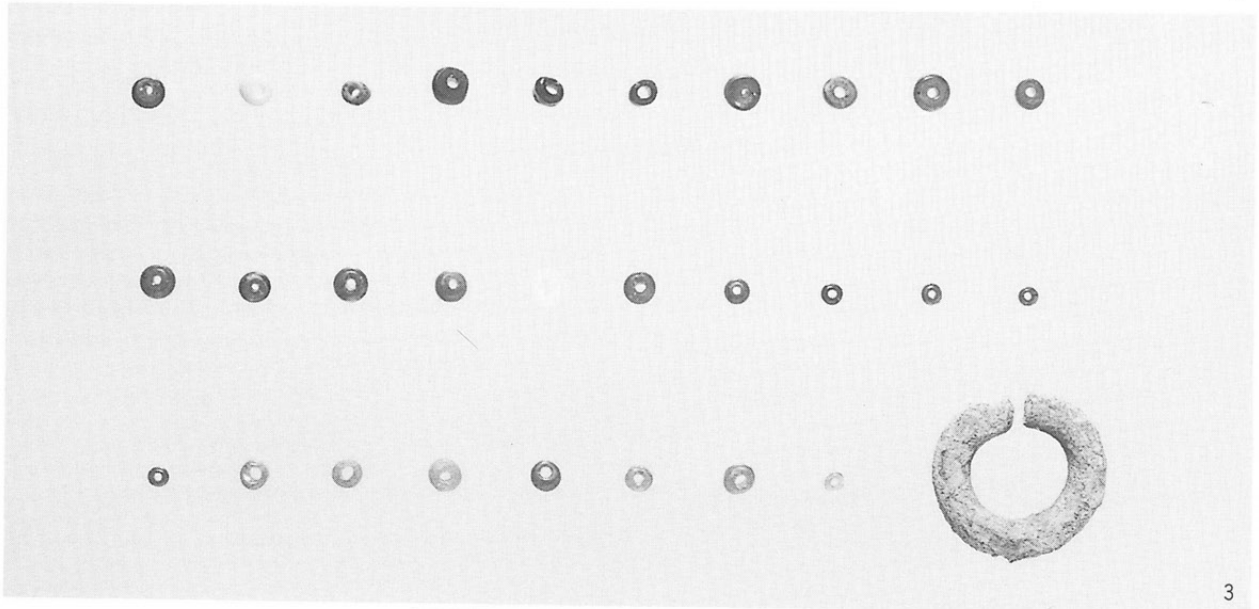


3

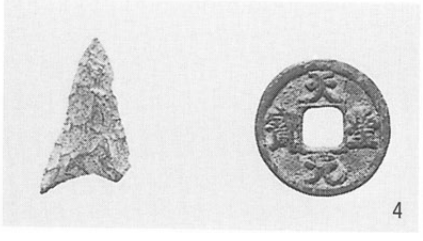
4


1


2


3

1．鉄　釘
2．刀子・その他の鉄製品
3．装身具
4．古墳に伴わない遺物（１）
5．古墳に伴わない遺物（２）


4

5

報告書抄録

ふりがな	もうらこふんぐん
書名	茂浦古墳群
副書名	
巻次	
シリーズ名	倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第5集
編著者名	鍵谷守秀・藤原好二・片岡弘至・中野倫太郎
編集機関	倉敷埋蔵文化財センター
所在地	〒712　岡山県倉敷市福田町古新田940番地　　TEL　086-455-0600
発行年月日	1996年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
もうらいちごうふん 茂浦1号墳	おかやまけんくらしきし 岡山県倉敷市 つらじまちょうつらじま 連島町連島 字小迫	33202	4－116	34° 33′ 19″	133° 44′ 25″	19920213～ 19920407	80㎡	住宅団地造成工事に伴う発掘調査
もうらにごうふん 茂浦2号墳	同　上	33202	4－117	34° 33′ 19″	133° 44′ 22″	19911202～ 19920211	140㎡	同　上
もうらさんごうふん 茂浦3号墳	おかやまけんくらしきし 岡山県倉敷市 つらじまちょうつらじま 連島町連島 字長命寺山	33202	4－118	34° 33′ 17″	133° 44′ 19″	19920127～ 19920331	170㎡	同　上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
茂浦1号墳	古墳	古墳	横穴式石室	須恵器・鉄釘・金環	鉛ガラス玉 玄室幅より羨道幅が広い石室
茂浦2号墳	古墳	古墳	横穴式石室	須恵器・鉄鏃・刀子・耳環・土製練玉・滑石製臼玉・馬具	大型石室墳
茂浦3号墳	古墳	古墳	横穴式石室	須恵器・耳環・ガラス小玉・鉄釘	大型石室墳

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告　第５集

茂浦古墳群

平成８年３月３１日　印刷発行

編集・発行　倉敷埋蔵文化財センター

〒712　岡山県倉敷市福田町古新田940番地

☎086-454-0600

印　　刷　（株）あさひ印刷